
仮面 RIDER birth 戦記

宇宙ひらめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面 RIDER birth 戦記

【Nコード】

N2531V

【作者名】

宇宙ひらめ

【あらすじ】

後藤は謎のオーロラに包まれ、忽然と姿を消してしまった・・・世界を超え、機動六課と協力する。いま、彼らの戦いの幕が上げられた。

…そして、未来、さらに未来にも・・・敵の魔の手が・・・。

はじめに

はじめに・注意書き

ひらめの駄作製造所へようこそ。

以下の注意点参照。いろいろ注意して、お読みください。

- ・ 他作品を見ての通り、序盤グダグダである上・・・終盤なんてXXです。
- ・ 作者は中二病を患っています。
- ・ 他作品同様、独自解釈、独自設定アリです。作者の勘違い、公式設定等を教えていただけるのは大歓迎です。ですがそれでお話を修正するかという程度によります。修正がない場合はこのSSの仕様です。
- ・ これは昔（2011/3/6）に書こうとしていた作品と書いていた作品”ディケイド&なのは及び、ヒーロー戦記（初期）”のフルリメイクです。
- ・ なるべく、カラムは避けます。

では宜しければ、お付き合いよろしくお願いします。

追記、物書きドベです。誤字脱字があれば教えてください。

プロローグ

真木研究所跡、

”仮面ライダーバース”こと、”後藤慎太郎”はあまりの疲労に眠りについた。

だから気付かなかった。

何も無い空間に裂け目が現れ、そこから漏れだす光に彼が徐々に飲み込まれていき、完全に光の中に飲み込まれてしまった後、その裂け目は何もなかったように消えた。

「うつ…ここは？」

慎太郎は眩しい…草の匂いがする…空が蒼い…どこ…なんだ？と起き上がる

「とりあえず立ち上がるか」

慎太郎は立ち上がると周りを見る。どうやら森の中みたいだ。

「ライドベンダーも見当たらない…とりあえずは…どうしようか」

彼は考えていると茂みから円筒状の機械が出て来た！おまけにいきなりレーザーを撃ってきた！

「コイツら、グリード・・・じゃないっ!？」

慎太郎は近くの岩陰に隠れて懷からバースバスターを出す。

「この・・・くらえっ!」

慎太郎はバースバスターで機械の真ん中にある黄色いレンズを撃ち抜くと簡単に爆発した。

「弱点さえ解れば・・・!」

次々に撃ち抜き破壊していく。そして慎太郎は最後の一体を撃ち抜く。

「ふう、今のが最後か。メダルが持ってくれてたすかった、充填していたら間に合わないからな。」

慎太郎はメダルを充填し、バースバスターをしまう。

「・・・移動しておこう、また来たら今度は対応できないし」

とりあえずは歩こう。此処で何もしないよりはマシだ。北は山だしとボヤき、慎太郎は南に向かった。

「そうと決まれば、出発だ」

しばらく歩いていると車道にでた。そして目の前には海が見える。

「綺麗だな……」

慎太郎がボーッと見ていると空に光線が流れてる。ピンクと黄色の光線だ。

「なんだ、アレは。というか……こっちに来る!？」

段々光が近づいてきて。慎太郎は慌てて離れようとしたが、間に合わなかった。前と後ろに挟まれてしまった。

「え……女の子？」

慎太郎は驚く、黄色い光の正体は黒い服とスカートに白いロングコート、手には黒い斧のような物を持っている女の子だった。

後ろのピンクの光の正体は白い服にジャケット、前が開いたスカートを着ていて手には先端が金色で赤い宝石がついた杖のような物をもっている女の子だ。

「君達はいったい……」

慎太郎の問いに答えたのは黒い女の子だった。

「私達は時空管理局の者です」

この出会いは彼が魔法に出会うきっかけになり

そして違う世界で戦う事になる

出来事だった

B・S、1 お告げと系譜と預言（スコア）

時空管理局。

それは、数多ある次元世界の秩序を守る組織の名称。

そしてここは、時空管理局発祥の地であり、時空管理局・地上本部がある次元世界、ミッドチルダ。

地上本部の他にも、ここには様々な部隊の施設が存在する。

その一つが、本局古代遺失物管理課 「機動六課」。

構成メンバーのほとんどが、将来有望な若手やエース級の実力をもった、少数エキスパート部隊。

そんなある日。機動六課部隊長室の通信端末にある通信が入った。

「第94管理外世界で起きている次元干渉エネルギーの調査？」

彼女の名前は、八神はやて。

「最後の夜天の主」として知られる、機動六課の部隊長だ。

『ええ。最近その世界で、時々なんだけど、次元干渉エネルギーが観測されているの』

そのはやてに通信を行っているのは、カリム・グラシア。

時空管理局と同じように、数多の世界に強い影響力を持つ、聖王教会に所属する騎士であり、
時空管理局にも所属している、はやて良き友人であり、機動六課の後見人1人だ。

『そのエネルギーの波長が、レリックと酷似しているのよ』

カリムが最初に言った言葉「レリック」。

それは名目上機動六課が保守管理する、ロストログアの名称。

高密度の魔力の結晶体で、使い方を間違えると大惨事を招く危険物だ。

「なるほど。レリックの可能性があるから、わたしらに調査してほしいっちゅーわけやね」

『ええ。それもあなた達に任せる理由の一つ』

「1つ？他にもあるんか？」

はやてのその言葉にカリムは静かに頷く。

『理由はさっきも含めて3つ。』

1つは、その世界が第97管理外世界の地球に酷似しているの』

「ああ、納得やね。ウチらは地球出身やし、

フォアードのみんなもカリムの依頼で一度地球に行つとるしね。

それで、最後のは？」

はやてが最後の理由について質問すると、カリムは真剣な顔で答えた。

『「前」の預言の前に出た預言を覚えてる？』

「今までの預言と比べてえらく長い預言やったからよく覚えとるよ。それがどうかしたんか？」

『その預言だけど、ようやく最初の部分だけ解読が完了したの。その文章が、これ』

すると、今までカリムが写っていた通信画面に文章が表れた。

その内容に目を向けると明らかに今までの預言とはかけ離れていた。

【無限の欲望よりもたらせられる破滅を回避した時、新たな破滅の扉が開く。

13の欲望混ざりし仮面の儀式を執り行いし軍神。

時の彼方より戦いを運びし誕生の神。

あらざる時より来訪せし特異の者。

3つの時の破壊により、母なる青き星に数多の仮面の戦士が集う。

時の天秤が揺れ、世界は破滅と同時に創世の砂時計が動き出す。

異界より来訪せし異なる芽を出した法の守護者は、時の守護者と共に再生の法を探すだろう。

だが、仮面と共に邪悪もまた集う。

戦いに飢えし古の種族は再び鮮血の遊戯を始め、光の種を狩りし闇の天使は、

異なる芽を咲かせし死と再生の使徒と法の守護者に、滅びを与えんと立ちはだかん。

偽りの進化の聖戦が始まり、魔物達が溢れ出す。

人に紛れし空の来訪者と命を吸いし一族。おのが反映のため、世界

を飲み込み始める。

軍神は幾千と繰り返し欲望の儀式に、古き結晶を使い、仮面に騎士の力を与えん。

願いを叶える種より生み出した裏の世界に、再び争いが起こる。】

『この預言の文章には、あまりにも思い当たる節がありすぎるわ』

「せやね。無限の欲望はスカリエッティで、法の守護者は時空管理局。古き結晶はレリックで母なる青き星はおそらく地球」

はやては、手を口元に持つていき、考える姿勢をとった。

「確かに、物騒な預言やな」

『ええ、だからあなた達機動六課に念の為第94管理外世界の調査をお願いしたいの』

「まあそうするしかないやろな……」

この預言がどのような事態になるかははやてには解らないが、良くない事態が起こる事が解る。

そうなった時、果たして他の部隊でどこまで対処できるだろうか？

「（まあ、無理やろな…）」

他の部隊の平均保有ランクは精々BからA、良くてAA程度。AA以上のエース級を保有しているとしても1人が精一杯。

この預言で事態が起こっても対処は難しい。

「（まあ、それは私らも一緒やね…）」

中心部隊は確かにはやて達機動六課だが、それは結果が良いだけの話。

過程を見れば、回避できた被害が多々見られるのが実際の所だ。

予想以上の事件となりうるこの預言。
自分達で手に余るものかもしれないが…

「（やれるだけのことはやらなあかな）
よっしゃ、その任務確かに引き受けました」

『ありがとっはやて。私も早く預言を解読して、情報を集めてみるわ』

「了解。任したでカリム」

この時、2人は知る由もなかった。

この任務が、他の次元世界を巻き込む、大きな事件になるとは…

B・S、2 警告と冗談と現実（リアル）

- 次元空間内、次元航行船・XV級艦船「クラウディア」、艦長室 -

「いや、まさかクロノ君に送ってもらうとは、思ってもみいひんかったわ」

「なあに、こちらも任務のついでだからな。それとはやて、一応任務中だぞ」

彼の名前はクロノ・ハラオウン。

この「クラウディア」の艦長でもあり、機動六課の後見人でもある彼は、

自分の部隊の任務のついでに、はやて達機動六課を送っているのだ。

因みに今回任務についた六課メンバーは、

はやて・ヴィータ・シャル・リイン・ザフィーラ・スバル・ティアナ・エリオ・キャロの、計9人。

「フフ、相変わらず手厳しいなあ、クロノ提督は」

「相変わらずは君もだろ。それでどうだ？今回の任務は？」

「まあ、カリムが言ってた預言は気になるけどとりあえず今は、第94管理外世界から発生している次元干渉エネルギーについてやね」

「預言か…。一応カリムから見せてもらったが、正直謎が多いな…」

「ほんまにね。まあでも、今はあんまり気にせんとええんちゃうか？まだ解読できてない預言を、こっちであーだこーだ考えとつてもしゃーないしな」

「は yet は、用意されているお茶を一口飲んだ…。因みに、リンデイ茶ではありません。」

「それもそうだな。…そういえば、フォードメンバーの調子はどうだ？」

「うん、みんな元気だよ。さっきも、クラウドディアの訓練室で訓練しとったし」

「うちの訓練室が壊れないか心配だな…」

「ハハハ、大丈夫やって。今は、訓練も終わって、食堂の方にいるんじゃないかな？」

・クラウドディア内・食堂・

機動六課のフォードメンバーは、訓練が終わったため、休憩から食堂に来ていた。

「それにしても、ここの訓練シュミレーター凄かったよね、ティアナ」

「まあ、確かに最新の船艦だけはあるわね、スバル」

スバル達が使用したクラウディアの訓練シュミレーターは、流石に機動六課にあるシュミレーター程ではないが、充実したシステムが搭載されている。

例えば、訓練室を守る防御結界。

Sランク同士が本気で戦っても壊れない程の頑丈な結界を張ることができる。

次に疑似フィールド展開システム。

こちらは、密閉空間ならではのシステムが使われており、例えば魔力素の濃度を上げたり、気温の調節、酸素濃度の調節、

更には重力制御といった事ができるのだ。

「隊長達も初めて使うと言っていましたけど、なかなかいいと誉めてました」

機動六課の空間シュミレーターは建造物などは創りせるが、クラウドディアのような疑似フィールドは創れない。隊長達が誉めるのも、無理はないだろう。

「あつ、みなさん。あそこが空いてますよ」

キャラが空いているテーブルを見つけると、キャラの使役竜・フリードが見つけた場所に止まり、

「ここだよ」と言うように鳴くと、4人はそこに座った。

「それじゃあ僕は、飲み物持ってきますね」

エリオがその場を立ち去ろうとすると、キャラも手伝うということで、キャラとフリードはエリオについて行くことになった。

「でもまさか陸士の私達が、こんな最新の次元航行船に乗るなんて思ってもみなかったよね」

「まあ乗るとしても、アースラみたいなし級くらいしか想像してなかったしね」

「エヘヘ。今度ギン姉に自慢しちゃおっかなあ」

ティアナは、子供っぽい笑顔を浮かべて話すスバルを、呆れた顔見るのだった。

「お待たせしました」

「キュクー」

「お二人とも、何を話していたんですか？」

スバルとティアナが話していると、飲み物を取りに行っていたエリオ達が戻ってきた。

「ありがとうエリオ、キャラ」

「スバルが単純でバカって話しよ」

「あっ！ティアひどーい！」

「あら、違った？」

そんな風にティアナはしばらくスバルをからかっていたが、エリオとキャラは、そんな会話を聞いて、苦笑いしかできなかった。

「相変わらず仲いいおまえ等は」

「あ！ヴィータ副隊長！」

ヴィータがやってきた事に気づくと、4人は「お疲れ様です」と言いながらすぐさま敬礼をした。

「ああ、お疲れさん」

「「す、すみません」「」

そう言うとヴィータは近くの席へと座る。

「そついえばヴィータ副隊長。今回の任務って、具体的にはどんな事をするんですか？」

「ああ、今回の任務は、現地に着いたらサーチャーで付近を探索して次元干渉エネルギーの発生源の特定と原因の調査。それで、原因がわかったら、二度とエネルギーが発生しないように厳重に封印して回収。」

または破壊するのが、今回の任務の内容だ！」

「え」と……」

ヴィータの説明はとても解り易かったのだが、いまいちピンとこないスバル。

そんなスバルを見てか、隣に座っていたティアナが、更に要約して説明してくれた。

「要するに、前に地球でやった任務と大体同じようなものよ」

スバルがティアナの説明を聞いて、「なるほど」と納得していると、次にエリオが質問してきた。

「でも、何なんでしょうか。レリックに似た次元干渉エネルギーって？」

「報告じゃあ、発生する時期がバラバラなうえに、直ぐに治まっち

まっらしいからな…調査してた連中も、レリックに似た次元干渉エネルギーとしかわからなかったらしい」

「・・・」

「まっ、ウチにはシャマルがいるし、直ぐ見つかるんじゃないか」

「うーん、いくらシャマルさんでも、一瞬だと難しいんじゃないかなあ？」

ティアナの言う通り、シャマルはバックアップのエキスパートだが、一瞬しか起こらない反応を果たして捉えられるかは、正直微妙なところだ。

「いつそ、どでかい反応でも起きればいいんじゃないか」

「ヴィータ副隊長？、そんな縁起でm《ビーーーーー！ビーーーーー！》」

突然鳴り響く警報。

艦内全体に「Alert」と映し出されたモニターが艦内の各所に映し出された。

艦内の局員全員が、今も鳴り響く警報に驚いていると、放送が流れ出した。

『第95管理外世界より、強力な次元干涉エネルギーを感知！

それと同時に、第99、第100管理外世界からも、強力な次元干涉エネルギーを感知しました。

局員は直ちに所定の場所について下さい！』

そんな放送を聞いたティアナ達は、ヴィータを見た。

突き刺さる視線。

全員の目から放たれる「あんな事言うから」と言う幻聴。

「あつ、アタシのせいじゃねえー！」

その視線に一瞬たじろいだが、ヴィータは直ぐに必死に否定した。

しかしそんなヴィータを、ティアナ達は暫く恨めしそうな目で見るのだった。

B・S、3 世界（ワールド）と終焉と開闢

ビーーーーー！ビーーーーー！

クラウド内はけたたましいアラーム音が響いている。

緊急事態の艦内では、誰もが思っていた。

「何故こうなった！？」と…

自分達はただ、第94管理外世界で時々起こっている次元干涉エネルギーの調査のため、目的地に向かって航行中だった。

だが、事件は突然起こった。

第94、99、100管理外世界から、突然次元干涉エネルギーが発生。

それらは、互いに共鳴しあうかのようにエネルギーを増幅させ、遂には隣接する平行世界にまでその魔の手を伸ばしたのだ。

「第93管理外世界から第101管理外世界の次元震、尚も継続中！」

「発生源と思われる第94、99、100管理外世界からの次元干涉エネルギー、こちらも上昇中！」

「このままでは次元断層が発生します！」

第93管理外世界から第101管理外世界。

その中には、なのは達の世界。第97管理外世界も含まれていた。

「状況は?!」

警報を聞いて、ブリッジに駆けつけたクロノは、状況把握のため、スタッフに声をかけた。

何もわからない状況では、下手に命令は下せない。

「待ってください！現地の映像…です！」

スタッフの1人が、コンソールパネルを操作すると、クラウドディアのブリッジに、第94、99、100管理外世界の映像を映し出した画面が、3つ出現した。

第94管理外世界の映像は……

何もない。

次元震を発生させている物など何も映っていなかった。

映っているのは、ただの街の風景のみ。

「第94管理外世界の発生源、特定できません！」

「この近くから出ているのは確かなのですが…！」

これです、ひとつの希望が断たれた。

じっくり調べれば、発生源がわかるだろうが、今は一刻の猶予もない。

次に映し出された第100管理外世界。

こちらは解りやすかった。

「市街地の上空に、強力な次元干涉エネルギーを感知！」

おそらくあれが、次元干涉エネルギーの正体なのだろう。

最後に、第99管理外世界。

こちらのモニター映っているのは、この世界の地球と地球に落下しようとしている隕石だった。

しかし、隕石からは、何の魔力も感知されていない。

「第99管理外世界の発生源特定…待って下さい！
宇宙空間内に、何か来ます！」

第99管理外世界を観測していると、突然宇宙空間内に緑色の発光現象が起き、
巨大な隕石がもう1つ現れた。

このまま行けば、最初の隕石と衝突するだろう。

3つ映像を見たクロノは、隕石が現れた瞬間、嫌な予感がした。

「何か…大変な事が起きるのではないか」と。

クロノは回線を開いた

「世界の、消滅…？」

「…それが本当みたいなんだ。」

『そう、消滅だ…文字通り、その世界は世界としての機能を為さなくなり、消え去ってしまっている』

ヴィータと画面越しのクロノが答える

「…そんな。」

「このレベルでの話しにするには、規模が大きすぎへんかクロノ君…正直、どう返事していいかも検討がつかへん…」

少々慌てた様子のはやて。

『すまない…だが事実を端的に伝えるより他に、此方としても表現が見つからない…』

『…。』

六課の全員は黙り込む。

「それで？」

『管理局では、次元振を含む大規模な次元災害は確認していない…つまり…』

「つまり、何の前触れも無く…突然、その世界が壊れて消えた…そう言いたいんか…？」

「ああ…。」

「…クロノ君、確認するんやけど…。」

『うん…？』

はやてはクロノに質問をする。

「いきなり、フツと消えてしまったんやないってことやね？」

『そうだ…管理局が異常に気がついたときには、その残骸とも呼べるものが残っていた…つまり…』

「つまり…その世界は勝手に壊れたわけやない…何者かに、“破壊された”可能性がある…と、いうこと？」

『…管理局本部が全権を動員して事体の解明に尽力している…だが、未だ進展は無い…』

「まあ、そうと決まったわけやないし…あんまり此処でああやこうや言っても仕方ないよ…。それよりも、ウチに連絡してきてくれたんは、他にも用事があるからやろ？」

『…ああ、実は……っと…』

ピピピピ…

「ん？」

そんな時、連絡が入ってきた。

『良くない知らせだ…みんな…』

みんなが、クロノに視線を向ける。

「良い知らせであることを祈ってたけど無駄やったみたいや…何？」

『……新たな世界の消滅を、いや…破壊を確認した…』

この場にいる全員が驚愕した。

B・S、4 バースと六課とヘリコプター

その頃、フェイト・T・ハラオウンと親友の高町なのはは六課で観測された謎のエネルギー反応の調査の為に一緒に現場に向かっている。

「あのあたりだよ。巨大なエネルギー反応があったのは…」

「うん、ポイントはあってるよ、なのは。けれど…」

街から離れている森の中で観測されたとはいえ、近くには民家もある。そんな所で異常なエネルギー反応、犯罪の可能性が高い。おまけに…

「さっきまであったガジェットの反応は全て消えてるし…怪しさ全開だね」

「気をつけてね、なのは。絶対に無茶はしないで」

「大丈夫だよ。皆もフェイトちゃんも心配性なんだから」

機動六課が発足して数日しか経ってないのにいきなり、彼女達が出動することになった。

なのは「！ フェイトちゃん…あそこ、見て」

「どこ…！ 人がいるね、話を聞いてみようか」

なのはが指を差す方向を見ると人影があった。フェイトは話を聞く

為に人影に近づいていくと男性なのがわかった。男性はとても驚いていた。

「君達はいったい…」

「私達は時空管理局の者です」

「少しお話を伺いたいのですがよろしいですか？」

彼女達は男性に話を聞こうとして近付く。すると男性は素早く移動して彼女達から離れ、そして彼女達は驚きの言葉を聞いた。

「時空管理局なんて俺は知らない。ここは日本じゃないのかい？」

「え…日本、て」

「なのは、彼はもしかしたら…」

『いきなりの通信ごめん!!』

なのはに説明しようとした時、緊急通信が開かれてはやてが焦った表情で話してきた。

「はやてちゃん?どうしたの？」

『緊急事態や!今しがた山岳のリニアールが、ガジェットに襲われてるんや!二人はそっちの応援にいつてガジェットを殲滅してほしいんや!』

「ええ!?!でも私達も今、例のエネルギー反応の件で話が聞けそう

な人を見つけたのに！」

今回のエネルギー反応に関係してるかもしれない男性をほったらかしにする訳にはいかないと・・・。

『時間がないんや！その人にはそこで待つといてもらって！こっちから迎えをだすから！』

「クッ…！了解。行こう、なのは！」

「う、うん。すみません、必ず戻るので待っていて下さいね！」

彼女達はその場を離れ、現場に急行する。

後ろを見ると男性はこちらを見上げていた。

「急ごう！フェイトちゃん！」

「うん、急ごうなのは！」

前を向いて現場に飛んでいくなか、彼女は何故か男性の事が気になるって仕方なかった。

慎太郎は彼女達が飛んでいくのを見送っていた。

「やっぱり飛んでいる…」

慎太郎はいつたどこに来てしまったんだろう？あんな技術…日本では考えられないとぼやく。

「おまけに通信機も無しに通信していたし、山岳リニアレールとか言っていたし…何だか訳が分からなくなってきたな…」

そして、慎太郎はセルメダルを一枚、ベルトに投げ入れ、叫んだ。

「変身。」

『カポーンッ!』

慎太郎はセルメダルから生み出されるアーマーを纏い、仮面ライダーバースに姿を変える。

「コレだな!」

『カッターウイング』

体が空中に浮くのを確認してバースは勢いよく飛び出し、戦闘空域に向けて飛翔した。

ミッドチルダ山岳地帯

「あのリニアレールの先端にいるのは…」

バースは離れた所でリニアレールの先端から内部に潜入しているガジェットを目にする

「ガジェットとか言う奴か…っ！なんだ！？」

バースは上空を見つめると空にはヘリが一機リニアレールに向かっていた

「俺も向かうか。」

バースはそう言うとりニアレールの方に向かう

山岳リニアレール付近

「中々やるみたいだな、あの子たちは・・・」

バースはリニアレールの上でガジェットを銃で倒しているオレンジ色の髪をした少女を見ながらそうつぶやく

「腕はまだ少し甘い、これから化けるかもな……それにしてもさっきのバンダナの子は、一人で突っ込むなんて・・・火野より無茶をする……っ？…ちよつとあれはやばそうか」

バースの視線の先には巨大なガジェットに苦戦している少年とそれを呆然と眺めている少女がいた

そして巨大なガジェットは少年に襲い掛かる。

「!!、つまズい!!」

バースは驚く、もう一人の少女が少年を助けようとリニアレールから飛び降りたのだ

『クレーンアーム』

「君達!捕まれ!」

「えっ?」

バースはクレーンアームを装着し、2人を援護しつつ、巻きつける

「ハッ!!」

バスはそのままアームを戻し2人をリニアレールに着地する

「……………さあ、かかって来い！！」

バスはバスバスターの銃口をガジェットに向けた

B・S、5 リニアと銃口とガジェット

リニアレール

(さて、どう来る?)

バーズはゆつくりとバーズバスターの銃口をガジェットに向ける

「あの…貴方は？」

「…話は後だ！」

ガジェットは黄色いセンサー状のパーツらしきところからバーズに目掛けて熱線を放つ。バーズはガジェットの攻撃をかわすとガジェットに向けて発砲する

「ちっ、お返した」

バーズは再び、ガジェットに攻撃を仕掛ける

だが、弾はガジェットが出した障壁に阻まれた

「これならどうだ!!」

バースはバースドライバーへセルメダルを2枚投入。

『キャタピラレッグ』

『ドリルアーム』

バースの右手にドリルアーム、両脚にキャタピラレッグが出現。

「!?!? まさかそれ……質量兵器!」

キャロは驚く、

「下がれ!」

バースは再びセルメダルをバツクルへ投入し、ハンドルを回す。

『セルバースト』

バースはドリルアームの出力を最大まで上昇させてキャタピラレックでガジェット目掛け、勢い良く突っ込んで行った。

「はあああああああ！！！」

バースはキャタピラレックの脚力とドリルアームの回転力をあわせ、た『セルバースト』をガジェットへと放った。ガジェットはドリルアームの攻撃でズタズタになり爆発した

「んっ？」

「止まって下さい！」

バースが声のする方向に振り返ると

「管理局機動六課スターズ分隊隊長、高町なのはです、貴方を質量兵器不法所持で逮捕します」

「（！？ ……さっきの。）質量兵器？これは”バース”といって・・。」

バースは他の気配を察知し、後ろを振り向くと

「動かないで。武装を解除してください。あなたから未確認の反応が出てるんです。すみませんが事情聴取のため同行を願いますか？」

それを聞いたバースはバースドライバーからメダルを抜き取って慎太郎に戻った。

「抵抗は無駄なだけだからな。解かった投降しよう…」

慎太郎はなのは達に簡単に事情を説明した。

「では…後藤慎太郎さん、すみませんがこちらの”バースドライバー”と”バースバスター”と・・・”セルメダル”でしたね？預かって貰います」

「ああ、分かったよ。ハラウン執務官・・・だったか？」

「後藤さんの身の安全と自由は私達が必ず何とかしますので・・・。」

「私の方もベルトがあなたの手元に戻るようにします。それまでは我慢していてください。」

「それなら少しは安心できる。」

そんな雑談をしているとヘリがホバリングを始めた。外を見ると機動六課の隊舎が見える

B・S、6 不屈と雷刃と誕生

なのは達に連れられて、慎太郎は時空管理局本局へと赴いた。その一室に案内されるとそこには茶色の髪をした少女が椅子に座って待っていた。

「失礼します。高町なのはは一等空尉、任務の報告に参りました。」

「とりあえずご苦労さん。で、そこにいる人がフェイトちゃんが言っていた人なん？」

はやてと呼ばれる少女にフェイトは今回のガジェットと慎太郎に關してのおおまかな報告をはやてに伝えるとはやては慎太郎の方を見る。

「どうも。この子達が世話になったみたいでおおきにな」

「後藤慎太郎だ。」

はやてと慎太郎は軽く挨拶をすますと部屋のインターホンが鳴り、はやての「どうぞ。」の声と共に扉が開いた。その扉から黒い髪をし、きりつとした格好で一人の男が入ってきた。

「クロノ提督、忙しい中来てくれて、ありがとな。」

「なに、時空漂流者を保護したというなら本局の時空航行部隊の提督である僕が赴くのは当然だろ、はやて・・・」

はやては訪れた男・時空管理局本局次元航行部隊提督・クロノ・ハ

ラウンに挨拶をする。そしてクロノははやての後ろにいた慎太郎の姿を見る。

「それで、そちらの方が？」

「そうや、ガジェットとの戦闘現場にいた時空漂流者、名前は後藤慎太郎さんや」

「聞きたいことがある。」

二人の話に慎太郎が割り込む。

「んっ、何や？」

「さっきから時空漂流者とか時空航空なんとか等わけのわからない単語ばかり出てきてるんだが・・・説明してくれないか？」

慎太郎の指摘に、クロノは「ああ、そうだったな。」と思い出し、クロノは慎太郎に時空管理局、そして時空漂流者の事などを説明した・・・

< 数時間後・・・ >

「なるほどな・・・俺のいた世界とは別の、平行世界の管理をしている組織が時空管理局で、時空漂流者つてのは何らかの理由で別世界に迷い込んだ迷子みたいなもの・・・それが俺というわけだな？」

慎太郎の確認にクロノがうなづく。

「しかし、君はどうしてあの場所にいたんだ？」

クロノの問いに慎太郎は答える。

「それは・・・うまく説明できない。」

気づかぬ間に別の世界へ来ていた、そんなことを言っても無理だと慎太郎は思ったのだろう。

それを聞いたクロノは「まあ、いいだろう。」と答えた。

「それで、俺は元のいた世界に戻るのか？」

「ああ、時間は掛かるかもしれないが探してみよう」

「・・・そうか。感謝する。だが、居座るのはしゃくに合わない。俺も自分の世界が見つかるまでこの“機動六課”に協力する。」

「ありがとう。慎太郎さん。では改めて、機動六課の部隊長、八神はやて二等陸佐です。」

「よろしく、はやて二等陸佐。」

「呼び捨てで構えへんよ。それに無理して階級まで言わなくてもええで。」

「私はフェイト・Ｔ・ハラオウンです。私も普通に呼んでも構いません。」

「ところで、後藤さんの使ってたあれは一体何なんですか？バースドライバーでしたね？」

「あ、それは私も気になります。教えてください。」

六課のメンバー達は、知りたそうな目で慎太郎を見る。

「あの、後藤さん、バースドライバーを一度調べてみてもいいですか？何か仕組みがわかるかも・・・」

シャーリーの目が輝いている、メカニックの血が騒いだようだ。

「しょうがないな・・・あまりいじらないでくれ。」

「はい。それはもう！」

「フェイトちゃん、協力してくれるって、解かったから・・・返してあげて。」

「うん。わかった。」

「ありがとう。・・・調べるのは時間がかかるのか？」

「いえ、スキャンして調べるだけですからすぐに済みますよ...では、その台の上にバーストライバーを置いてください」

「ああ・・・」

シャーリーは、コンソールに慎太郎から預かった物を全て置く。

「うーん・・・やっぱり魔力機関などは積んでいませんね・・・それに構成物質などもミッドチルダでは見た事の無い物質で出来ているようですね・・・おや？これは・・・だとすると・・・もしかしたら・・・」

シャーリーはセルメダルを見ている。

「なんだ？どうかしたのか？」

「い、いえ！大丈夫です！あ、もういいですよ。」

「ありがとう。」

こうしてあまりにも突然に、慎太郎の六課入りが決定されるのであった。

B・S、7 話とAMFとアラート

慎太郎は、なのはに案内されてとある所に案内された。そこは多くの管理局員が打ち合わせに使う場所である。

「遅れてごめんねはやてちゃん。」

「うっん、ありがとな！なのはちゃん」

なのはは椅子に座ったはやての後ろに立った。

「それで、何で俺を呼んだんですか？」

慎太郎は質問をする

「えっとな、慎太郎さんがあの子たちと出会った時、機械がおったやろ？」

世界の概念というかそれが全く異なっているが、慎太郎は火野や伊達と違って賢い為（笑）。はやての話をすぐに理解した、そして説明をし終わり本題に入った。

「ええ、まあ」

「でな、その機械が厄介でな、私たちはガジェット・ドローンと呼んどんんやけど・・・」

そう言うってはやては目の前にモニターを出した。

「これを見てください」

「ん？」

そこには、赤毛の髪に赤い服を着た子供が写っていた。そして、彼女の見ている方向には数体のガジェットがいる。

「よくみてください」

はやてがそういうと同時に、画面の赤毛の髪に赤い服を着た子供が魔法で攻撃をした。弾を鉄槌で打つ、魔法・・・？と慎太郎は少し疑問。

「これがな、あまりガジェットについて分からなかったころの映像なんやけど」

勢いがあつた赤毛の髪に赤い服を着た子供の弾が、突如威力を失った。

「な！？なんだと！」

慎太郎と画面の中の赤毛の髪に赤い服を着た子供が同じ反応をする。

「これが私が説明したAMF。魔法が使えなくなっちゃうの」

なのはがそう言った。

「・・・つまり、魔法じゃ攻撃が通用しにくいから魔法を使わない俺に協力を・・・？」

「そうです。お願い……できますか《ビー——！ビー——！》」

慎太郎は暫く考えたのだが……運が悪いことに「Alert」が鳴り、出勤要請が出されたのである。

ガジェットが海上上空で確認されたことからすぐにはやては出勤命令を出した。ヘリがないため飛ぶことができるのは、フェイトの2人と紫色のポニーテールの女性が出動することが決まった。

「一方その頃、街の一角の地下道」

「運んでいたのは飲料ボトルや食料……特に変哲の無い普通のトラックだけ……」

「それなんです、下の方に妙なものがあまして……」

「これは！？メダル……？」

「プラズマバレット」

「紫電一閃」

二人の攻撃が次々とガジェットを破壊していく。リミッターがあつても二人だけで殆ど破壊してみせるその姿は物語の英雄のようであり、強さを見せつけていた。しかしやはり突破してくるガジェットもあり、それをなのはが破壊していた。

「アクセルシューター」

無数の魔弾がガジェットを破壊していき、都市への被害を抑えていた。

「ごめんなのは、助かったよ。」

「とにかく今は集中しなきゃ、考えるのはそれから、ね。」

「うん。」

「ああ。」

戦闘は続く、地上で起こっている事件を知らずに・・・

B・S、8 クロノとヴェロッサとレポート

「……800年前のグリード騒動？」

クロノ・ハラウンは手元にあるレポートを読み、持ち主であるヴェロッサに問い掛ける。

突然、このクラウドディアにやってきてにへらにへらと笑いながら執務室にて聞きたい事があると言うこの風来坊さは相変わらずのようだ。

しかし、コーヒーを持ってきた局員をそうそうと追い出す限り、よほど大事な話らしい。

「そうだよ。ちょっと気になる事があってね。君は何か知らないかい？」

知ってるも何もあれば有名——勿論、悪い意味で——な事件だ。管理局でこの事件を知らない者はいないだろう。

クロノは自分が知っている事を机の前のソファで優雅に座っているヴェロッサに端的に述べる。

「管理外世界に現れた”ヤミー”とか言う生命体の調査中に調査隊と護衛隊、それと視察に当たっていた上層部の何名かが惨殺、あるいは行方不明になる。結果クストースには古い遺跡群しかなく生態系はとうの昔に絶滅していた、とかの話だろう？」

生存者はゼロ、一部の上層部は有能無能含めて突然いなくなったた

めに混乱状態になった、後味の悪い事件だ。

当初は原住民の仕業とも言われていたが生命体の反応は虫一つなく、遺跡の調査も管理局とスクライアの合同調査が行われ、先月の時点で終了している。

「大体、あれだって詳細が不明でこちらには詳しい情報は回っていない。むしろ君の方が詳しいんじゃないか？」

「——生存者がいるみたいなんだよ」

「……なに？」

「しばらく後にわかった事なんだけど、行方不明になった何名かのうち上層部の一人と調査隊の一人が目撃されてた見たいなんだよ」

出されたコーヒーに口を付けず、カップを回しながらしかも、と続ける

「その内の調査隊の一人は戦闘機人開発に関わっていた容疑がある。……この最後のレポートにかかれている二人がそれだ」

渡されたレポートの最期のページをみるとそこにはとある二人の人物について簡単に説明されていた

「——管理局地上本部所属、イオリア少将とアルマーク技術士官、か」

嘆息し、コーヒーに口を付ける。

クロノに出されたコーヒーは、既に冷め切っていた

B・S、9 紫とヤミーと半分こ怪人

???

「本当にいいのかい・・・えつと”W”の片方？」

「ああ・・・”オーズ”、君はそのままだと「とても危険」だ。僕が”紫のメダル”少しの間、預かるよ。」

ミッドチルダ・首都クラナガン西部・廃墟

「無駄な抵抗を止め、今すぐに出頭しろ！今ならまだ罪は軽くなる！」

陸士隊が投降を呼び掛ける説得をするが、犯人グループには効果が無いらしい。

この事件の発端は些細な出来事だった。早朝パトロールの警備隊が不振な男達を発見。

その事情聴取の際に男達の一人がデバイスを使用。警備隊員二名に軽症を負わせ逃走。そして、今に至る。

この事件の問題は“一般人によるデバイスの使用”だ。犯罪組織に加担している者でも、一部の人間しか持っていないデバイスを男達

は全員所持している。

勿論、男達は犯罪組織には加担していない。言わばチンピラのような者が、デバイスを持っている事になる。

それも、全員が同じ形のデバイスを持っているというのは、事件の事例としては珍しい部類に入る。

「隊長、中に攻撃を。このままでは犯人グループの思いつぽです。」

「待て。そろそろ……来たな。四課二番隊。」

そう隊長が部下に告げると、一台の黒い大型のバンが横滑りしながら現場に到着した。

「彼ら……ですか？しかし、我々でも……。」

「お前の言いたい事は分かる。しかし、彼らは現場のエキスパートだ。この状況では、彼らに任せるのがベストだろう。」

隊長は隊員に対して冷静な口調で話す。隊長自身も陸士の力は知っている。

しかし、屋内等の限られたスペースでは、逆にその力を持て余してしまう。

「さて。お手並み拝見だな。」

黒い大型のバンから出て来た四人を見て、陸士の隊長は呟いた。

―同時刻、ミッドチルダ・首都クラナガン西部・廃墟5F

「くそっ！一体どうなってやがる！」

物陰に隠れている数人の男達の一人が、手にしたデバイスを見ながら言葉を発する。

「このデバイスはすげえよ。あの警備隊員だって、結構強かったぜ。それを、一撃で……。」

「兄貴、どうしてこのデバイスはいきなり……。」

彼の舎弟が言葉を繋ごうとした時、兄貴と呼ばれた男とは別の男が言葉を発した。

「馬鹿野郎！陸士隊まで出てきやがったんだ。俺達に勝ち目はねえ。おい！投降するぞ……。」

兄貴と呼ばれた男は立ち上がると、ゆっくりと歩き出した。次に舎弟の男も動く。

「それに……俺達の仕事はこのデバイスを運ぶ事だった筈だ！」

兄貴と呼ばれた男はもう一人の男に凄味を利かせた。その時、

「その欲望・・・解放するんだ・・・！」

『欲望』・・・。そんな声が聞こえた。

チャリン・・・！

一瞬、男達は何かに縛られるような感覚に襲われた。

男の頭部とデバイスには、自動販売機やゲームセンターのゲーム機にメダルやコインを投入する様な穴が。

「あっ・・・。」

『兄貴!!』

2人の舎弟の男が何か叫んでいる。

しかし、男には何も聞こえない。

彼の頭に響くのは・・・メダルかコインがぶつかりあう音だけ。

そして、気付いた時には・・・、

「殺戮ヲ。殺戮ヲ。血ヲ我ニ与エヨ。」

この兄貴と呼ばれた男は心の中で普通の人間の常識を遥かに超える力を手に入れ、『何かを派手に壊したい』と思っていた。

男とデバイスからの欲望を具現化した半身の物体が、彼の体とデバイスをこじ開けて現れ一つにくっ付いた。

”欲望の怪人ヤミー”とは違う・・・”欲望の半分子怪人形のヤミー”が・・・。

「あ、兄貴い！何だ、こいつは!……うああっ!」

舎弟の男が立ち上がった瞬間、ヤミーは男達のデバイスを奪い・・・喰った。

「っ!?!コイツ、デバイスを喰いやがった!?!」

突如、現れた白いミイラのような怪人・・・その名はヤミーという。

「殺し合いの始まりだなあ。くつくつくつ……。」

グリードと呼ばれる怪人が、人々の欲望を利用し、セルメダルから創り上げた怪人だ。

ヤミーはただ一つの言葉・・・『殺し合い・殺戮』という言葉だけを一心不乱に叫び、男達の周りをうろつく。

決して満たされる事の無い和葉の欲望の塊であるヤミーは、向こう側のにいる局員を見るとそのままノロノロと向かって行ってしまうた。

その怪物の姿を見・・・男達は啞然ボーゼンと立っていた。

ミッドチルダ・首都クラナガン西部・廃墟

陸士隊がまだ成長しきっていないヤミーへと飛び掛る。

「この化け物め!!」

接近戦用のストレージデバイスがヤミーへとぶつかる。

しかし・・・、

「なっ!？」

なんと、成長していないはずの白ヤミーが・・・接近戦用のストリージデバイスを片手で受け止めた。

ビクともしない。

さらに、ヤミーはもう片方の腕で隊長の首元を掴み、他の隊員達の下へと投げ飛ばした。

「ぐあっ!」

『隊長!!!』

ジャラジャラジャラジャラッ!!!

隊員達から奪ったデバイスをすべて喰らった瞬間、ヤミーからそんな音が聞こえた。

何枚何十枚ものメダルがぶつかり合う様な音・・・。

ヤミーが成長する時に発生する音だ。

あの・・・男の欲望から生まれたヤミーは成長しようとしている。

「グルラアアアア!!!!!」

絶滅種及び想像上の動物、即ち本来現世には「存在しない」生物系のヤミー・・・”キマイラヤミー”は上空に向かって叫んだ。

B・S、10 キマイラと槍とプレストキャノン

―六課内―

いきなり鳴り響くアラート

慎太郎達は一斉に顔を上げた。

「なんだ!？」

「このアラートって・・・」

「一級警戒体制!？」

エリオ達が騒ぐ、

「グリフィス君!!状況は？」

『はい!出撃要請です!』

はやての言葉にグリフィスは返事する

「ハードな出撃やけど・・・皆いけるな!？」

「「「はい!」「」「」

「任せろ!」

メンバーたちと慎太郎の返事にはやては頷き、宣言する。

『ほんなら、機動六課フォワード部隊・・・出動!!』

「そつえば後藤さん知ってますか、ミイラ男の噂？」

「ミイラ男？」

エリオの言葉に反応する・・・まさか、と思った。

「なにそれ、都市伝説？」

スバルがそう聞くと、答える。

「いえ、本当の話なんですよ。なんでもそのミイラ男が歩く度チャリンチャリンと音がして、成長すると、怪物に進化して・・・。」

エリオ達は目の前に突然、現れた”キマイラヤミー”を見るとしばらく沈黙が続いた

「グウウウウ・・・!!!!グルラアアアアアアア!!!!!!」

「でたあああああああ!!!」

キヤロ除く、メンバー3人はこんな反応をしていたが慎太郎は、

「ヤミー?!なんでこの世界に?とにかく早く倒さないと」

後藤はすでにバーストライバーを腰に巻きつけており、ドライバーにメダルを投げ入れ、

「変身ッ!!!」

”キマイラヤミー”に向かって走りながら叫んだ。

『カポーンッ!』

後藤は仮面ライダーバースへと姿を変えると、”キマイラヤミー”に殴りかかり、右手に持ったバースバスターで更に追撃。

しかし、相手は普通ではないヤミー……並みの攻撃はきかない。

「ちっ……!!なんだこいつ……!!」

「ぐるあああああああ!!!」

やはりパワーはヤミーの方が圧倒的に上。

口から吐く火炎で、バースは怯む、そこに山羊の角でさらに追撃。

「ぐあつ!?!」

「慎太郎さん!?!・・・このおツ!」

蒼い魔族の魔槍や某少年の武装錬金を彷彿させる” 槍型アームドデバイス、ストラーダ” を巧みに使い、エリオはキマイラヤミの動きを食い止め、

「いんです!」

「ああ。モンディアル!下がれ!!」

『ブレストキャノン』

新たにセルメダルをバースドライバーへ投入し、胸に 『ブレストキャノン』 を装備。

さらに新たなセルメダルを投入し、バースはブレストキャノンを両手で押さえる。

『セルバースト』

「はああ!!!」

ブレストキャノンにエネルギーをチャージしそれをキマイラヤミに放つ

キマイラヤミは爆発しセルメダルへとなる・・・そして再び、バースはメダルをセットし、グリップアクセラレータを回すと、

『クレーンアーム』

クレーンアームで一気にセルメダルを回収し、リュックに貯蓄した。

『みんな！無事か！？』

通信機からはやての声が響いた。

「ああ・・・。」

『私達も大丈夫です。』

だが、フェイトが通信に入ってきた。その声の明るさにメンバーたちは胸を撫で下ろす。

『そうか』

とだけ返し、フォワード達の方を向く。

「帰るぞ、みんな。」

誰の反応も確かめずに彼は歩いた。

メンバー3人が首を傾げるなかティアナだけはバースの後ろ姿をしっかりと見つめていた。

B・S、11 アグスタとミスとクレーンアーム

ホテルの正面。

「コーヒー、よかつたら飲みます?」

「ああ、ありがとう。」

ティアナからコーヒーを受け取ると、ティアナは慎太郎の隣の席に座る。

今日の任務は”オークション会場”の警備。六課に警備依頼が廻ってきたのは、”対ガジェット”対策のためだ。

今、地上本部の部隊で”対ガジェット”対策の訓練を受けているのが、108部隊ぐらいだから、六課に依頼が来るのかもしれない話。

問題は内部の警備という名目で指揮官である、なのは、フェイト、はやての三人が取られたことだろう。今、三人はドレスを着てオークション会場だ。

出動分隊はスターズ、ライティングと協力者の慎太郎のバースで、残りは六課隊舎で後詰だ。転送装置を使う以外の、人体の転送がミ

ツドチルダでは禁止されているので、後詰の部隊の出番はない。

《皆さん。ガジェット、来ます!》

エリオから警告。その場で、空間モニターを複数展開させてロングアーチのシステムと同調させる。

FW陣に防衛線を張らせて、シャマルを除くヴォルケンズで打つて出るというわけらしい。

「六課では分隊の括りは忘れた方がよさそうね。ティアナに指揮官教育するよういわないと……」

『前線各員へ。状況は広域防御線です。ロングアーチ1の総合管制と合わせて私、シャマルが現場指揮を行います』

通信を聞いていた全員はずっこけそうになった。

「フェイト。俺の聞き違いか？ 指揮権のない医務官のシャマルが現場指揮を取るって聞こえたけど……」

慎太郎が聞く。

《いえ、聞き違いではありませんよ》

このやり取りの間にも、各員から『了解』という返答が…… □
ングアーチからも、何も異論が出ていない。

少なくともスバルにティアナは、災害担当とは言え陸士部隊出身だ
が気が付いていない。

『ちよつと待て！ それはどうかと思う。現場指揮はシグナム、おまえがやってくれ』

一番いいのは、部隊指揮の経験があり階級の高いシグナムが指揮を取るのだが……シグナムもヴィータも、すでに最前線で、ガジエットとの戦闘に入っていた……。

『無理です。現場指揮は私が取ります。ティアナ、情報を送ります。FW陣の指揮はあなたよ。グリフィス君。さっきの発言は記録から削除してくれる』

指揮云々は別として、ヴォルケンズが次々とガジエットを落としていく。純粹に戦力と見た場合、彼らは好きに動かせた方がいい。それは分かると全員は思う。

海の次元航行部は執務官を中心に動くことが多いので、執務官を中心としたチーム内であれば、医務官であるシャルが現場管制、指揮を取ることも許される。あらゆる意味で自由度が高い。

しかし、陸はそうじゃない。指揮権というものを重要視する。医務官には指揮権が与えられない。海の地上部隊も部隊行動中は同様だ。

たとえば、シャルが医務官として三佐の地位にあり、シグナムが三尉であった場合でも、指揮権は

シグナムにある。シグナムも陸で指揮官教育受けているので、知っているはずである。

その辺りのルールを無視した部隊運営を続けると、レジアス中將だけでなく、他の部隊の上層部からも目の敵にされとのこと。

バースはメダルをセットしグラップアクセラレータを回す。それを合計で六度繰り返す

『クレーンアーム』

『ドリルアーム』

『キャタピラレッグ』

『ジョベルアーム』

『カッターウイング』

『ブレストキャノン』

その六種類の武装はバースの各装備所へ装備されバース最強のフォーム。バース・ディとなる

バース・ディは足のキャタピラで前進、キャタピラレッグで蹴り、クレーンアームと合体しているドリルアームを鞭のように叩き最後にドリルアームで貫く

そしてバース・ディはカッターウイングで空中へ飛び上がるとブレストキャノンにエネルギーをチャージしそれを放つ

いい感じでガジェットを落としていった。

「ふう、終わったな」

《みなさん、召喚反応です》

「召喚師の下にサーチャーを飛ばして」

キャロとロングアーチ、シャルも感じたらしい。どんな手を売ってくるのだろうか？と、

効果はすぐにでた、急にガジェットの動きが良くなる。有人操作に切りかわったかのようなめらかな機動。

ガジャットの動きが良くなって召喚師が居るという事は……と気づいた者も多い

『ヴィータ、防衛ラインまで下がって。ザフィーラはシグナムと合流』

《リイン曹長が召喚師の方へ向かっているようです》

『リイン。召喚師の下へはサーチャーを送り込んでいる。無理はするな』

と、やはりホテル前にガジェットが召喚される。一型十機に、三型一機。

『ティアナ、足止めで構わない、ヴィータが戻るまで持たせろ』

『いえ、全部落とします』

「その意気はいいが……。まあいい、訓練の成果を見せてもらうことにする。」

《マスター。リイン曹長が》

落ちてはいないが、護衛の召喚虫に迎撃されたようだ。

『シャーリー。リインを引かせろ、誘導も頼んだ。それからシャマル。シグナム達の管制を頼む』

「銀色の召喚虫…… 無機物操作……」

イアナ達に動きがあった。エリオとキャロを下げて、スバルとのツートップ。

「ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ちぬけるんだって！」

……ティアナの呟きが聞こえた。兄のことを引きずっているようだ。

『クロスファイヤー…… シュート……！……！』

次々に落とされていくガジェット。

（・・・不味い！？）

バースはメダルを1枚セットしグリップアクセレータを二度回す

『セルバースト！』

機械音のあと、クレインアームの先端を目に見えない速さで飛ばしスバルを自分側に引っ張る。

「ひいひい！？」

そのまま、引っ張られ・・・バースの所で着地する。

「いたたあ・・・何するんですか？慎太郎さん」

「危なかったな、あのまま突っ込めば・・・クロスファイヤーシートに当たっていた。」

「あ・・・。」

慎太郎の言葉にスバルはボーゼンとする。

「エリオ、キャロ。ヴィータ副隊長の援護に入れ。スバルとティアナは、ホテル前のガジェットを叩こう。ヴィータ、エリオとキャロを頼む」

下がってくる二人を見ながら、全体の状況を確認する。残りのガジェットが十機を割っている。

「エリオ。召喚師の行方は？」

《すみません。逃げられました》

「わかった……」

スバルとティアナの二人が、目の前に立っていた。

「二人とも怪我はないな？・・・よし、二人ともホテル周囲の警戒に付いてくれ」

「「はい」」

「すごいね、慎太郎さんって！」

「うん。さすが、ライドなんとかの隊長をやったただけあるね！」

二人は、ホテルの裏手にはしっていく

B・S、12 模擬戦と実力とクロスファイアシュート

ホテル・アグスタの任務が終わって数日、なのは達は隊長陣に残ってもらって別の話し合いをすることにした。

「なのは、話っているのは？」

「うん、実はティアナの事なんだ」

話し合いの内容はティアナの事だ。

「やっぱティアナの過去が原因なんかな……」

と、はやて。モニターに映るのはティアナの経歴と一枚の写真。

「ティード・ランスター、ティアナのお兄さんで逃走中の犯罪者を捕まえようとした際に反撃にあつて、傷を負いながらも犯人に手傷を負わせることは出来た、……けどティードさんはその傷のせいで殉職、その時の上官はティードさんの事でかなりひどいことを言っていたみたいなの」

ティードの最終的な経歴も表示される。彼は所謂エリートで将来的には執務官に志望だったらしい。

「ひどい事？」

「うん、死んでも犯人を捕まえるべきだった、とか役立たずとかね」

「身を危険にさらして戦った者に送る言葉ではないな」

「ティアナはショックやったろうな、自分の兄の死が無意味なんて言われたんやから」

みんなが静かに怒っている、慎太郎も拳を握る。

「ティアナが執務官を目指してるのはその兄貴の影響か？」

「うん、だから今回は無茶をしたのかもしれない。けどこんな危険な事をしていたらいつか取り返しのない事になっちゃう」

「それこそ、仲間を撃ってしまうような事態になるかもな」

「慎太郎さん。」

そこへ、現れる慎太郎。

「ここは俺に任せてくれ。」

そう言うと彼は外に出る。

自主訓練をしていたティアナは4時間以上もやっているから疲れが

出たのか、休憩している。隣に彼女の訓練に付き合ってるスバルの姿が見えた。

「お前達…こんなところでまだやっていたのか？」

「もう4時間もやってるんだぜ、いい加減倒れるぞ」

慎太郎とヘリパイロットのヴァイス陸曹がティアナに声をかける。

「慎太郎さん……ヴァイス陸曹……見てたんですか？」

「ああ。途中からな。彼は結構見てたようだがな。ヴァイス陸曹、ヘリの整備の途中なんだろう？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

そう言うつとヴァイスはその場を去る。

「さて、ティアナ。」

慎太郎はバースバスターを渡す。

「これは……バースバスター？」

「……それを、撃ってみろ。」

彼にそう言われ、ティアナはバースバスターの引き金を引く……が、

ドオン！

「キヤアアアアッ！」

「ティアッ！」

反動が強く、尻餅をついてしまった。

「なんなのよッ！これッ！？」

「最初はライドベンダー隊で鍛えたはずの俺でさえまったく、使いこなせなかった。」

ティアナが反動の強さに驚くと、慎太郎は答える。

「君は兄の夢をかなえたいから強くなりたいそうだな？」

「はい。聞いたんですね？」

ティアナが答えると、慎太郎は続けて言う、

「ああ、だが・・・それだけじゃ、ダメだ。」

そう言うと、メダルの入ったリュックを置く。

「それで暫らく、射撃の練習をするといい・・・メダルなら、この間たくさん稼いだからな。」

かつて、伊達が自分にそうしてくれたように慎太郎はバースバスターを渡し（あくまでも貸し）、早速ティアナは射撃訓練を始めた。

ドドンッ！

「ちょっと、スバル！しっかり私を抑えて！！」

「だってこれ「何！？」・・・なんでもありません。」

「やれやれ・・・。」

彼女達を見ていると”火野とグリードのアंक”の事を思い出す。

――数日後――

いつも通りの練習風景・・・だった。

「さーて、じゃあ午前中のまとめ、2001で模擬戦やるよ！まず

はスターズからやろうか。バリアジャケット、準備して！」

「はい！！！」

「エリオとキャロはあたしと見学だ」

「はい！！」

スバルとティアナが並び構える

「いくわよスバル！」

「うん！」

模擬戦が始まってしばらくすると、

「もう始まつてるのか？」

慎太郎が遅れて到着した。

『慎太郎さん！』

「私も手伝おうと思ってたんだけど・・・」

「・・・今はスターズの番」

ヴィータはため息交じりでフェイトを見、現在の進捗状況を伝える。

「・・・ホントはスターズの模擬戦も引き受けようと思ってたんだけどね」

フェイトは模擬戦を行おうとしているなのはを心配そうに見る。

「ああ。なのはもここんところ訓練密度濃いいからなあ・・・少し休ませねえと」

ヴィータも最近のなのはのオーバーワークは気になってたようだ。険しい顔でなのはを見ている。

「なのは、部屋に戻ってからずっとモニタに向かいっぱなしなんだよ。」

訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形見たり」

「なのはさん・・・訓練中も、いつも僕達のこと見ていてくれるんですよね・・・」

エリオは普段の訓練でのなのはの心配りを感慨深げに語る。

「ほんとに・・・ずっと・・・」

キヤロもエリオに賛同するように嬉しそうなのはを見る。

ヴィータはそんな二人を微笑みながら見つめる。

「おっ、クロスシフトだな」

ヴィータがティアナの戦闘陣形を見てつぶやいた。

ティアナが意識を集中し、自分の正面に魔力スフィアを四つ生成する。そしてそれらを一つに纏めていく。

「クロスファイア……シュート！」

ティアナは魔法弾をなのはに向けて発射する。

クロスファイアは、飛んで回避するなのはの後ろを追尾し続ける。

そこへ、なのは目掛けて、スバルがりボルバーナツクルを突き出しながら突進してくる。

「レイジングハート！」

『Protection』

レイジングハートがなのはの目の前に魔方陣の様な円形の障壁を展開し、スバルの一撃を力点をずらして受け流す。

「わわっ！？」

攻撃を受け流されたスバルはその勢いを止められずに、バランスを崩して転倒した。

「アクセルシューター！」

『Accelerate shooter』

なのはは自身の周囲にピンク色の魔力弾を四つ発生させ、追い討ちとばかりに転んでいるスバルに向けて発射した。この体勢なら、

普通、直撃していただろう。

「うわっと！」

だが、スバルも格段にレベルアップしている為、咄嗟に起き上がって回避に成功した。

「いい一撃だよ、スバル！でも、あんまり突撃ばかりっていうのも良くないよ！」

「はい！すいません、なのはさん！」

なのはに諫められ、その部分を反省するスバル。そして再びなのはに一撃を喰らわせるために、カートリッジを一発ロードしてからはなのはに向けて走り出す。

リボルバーナックルに環状魔方阵が現れ、その中に水色の魔力が収束する。だがなのはも同様に、レイジングハートの先端にピンク色の魔力が収束している。

「一撃必倒！」

「全力全開！」

『ディバイイイイイン…バスタアアアアア！！』

スバルとなのはは同時にディバインバスターを発射し、お互いの魔力がまるで刀同士のパワーの如くぶつかり合う。

「おりゃあああああー！！」

「うつ…凄い気迫だね…でも、まだ甘いよ!」

「模擬戦はここまで。今日は二人とも撃墜されて終了」

なのはの声が、静かに告げる。

ヴァイスが訓練室に着いた頃には、既に模擬戦が終了した後だった。

エリオの話によるとなのは放ったクロスファイアシュート（威力も段違い）が、ティアナを打ち抜いた後、ほんの一瞬油断したスバルの隙を見逃さずに、なのはがディバインバスターを撃ち込んだらしい。

B・S、13 クウガ（小野寺）とディエンドとキバーラ

”破壊者”と離れ離れになってしまったその仲間達は、新しい世界へ着いたことを確認し、ドアを開け外の様子を確かめた。

見てみるとそこはある施設の中のようなだった。

写真館は施設内の喫茶店として置かれているようである。

「ここが新しい世界かあ」

青年”小野寺ユウスケ”は自分の手の中にある親友”破壊者”から、預かった”バース”のカードを見てつぶやいた。

「そうみたいだね。てかユウスケくん、その格好何だい？」

「大樹さんもそうだろう？」

「あつ。ほんとだ・・・夏メロンまで!？」

「・・・夏海です!なんですかねその服、軍人っぽいですけど?」

周りを見てみると皆同じような服を着ている。

軍と言うより警察か何かのようだ。時々色違いの服も見かけたが階級が何かで色が違うのだろうか?

ちなみに彼らの保護者（笑）光夏海はウェイトレスの格好になっていた。

「あ、胸のところに名札みたいなのが付いてますよ。ええと、私はこの店のウェイトレスみたいですわね。」

「なんか俺はバイトの施設内清掃員だつてさ。」

「僕のほうは、『第八資料倉庫 整理係』だとき。なんだかパツとしない仕事だね。」

そう言つてぼやいていると後ろから声が聞こえた

「おい！お前らそんなとこで何サボつてんだ！！さつさと持ち場に
戻れ」

声が聞こえたほうを向いてみると・・・

「だれも・・・」

「いませんね」

「空耳かな？」

「下だ！下！！」

という声が聞こえユウスケ達は目線を下げてみると小さな女の子が
チヨコンッと立っていた。

「わっ！？」

「わぁ〜かわいいですね！なでてもいいですか？」

「どこの子だろうね？」

と、ユウスケ達の態度に怒りを抑えるヴィータ。

「おまえらな～上官をおちよくるのもいいかげんにっ・・・ってそうかお前ら新入りとアルバイトか。

なら知らないやつがいてもおかしくないか・・・。

そうだな一応自己紹介しとこう。あたしの名前はヴィータ。お前らの上官だ覚えとけよ。」

「こんな子供が上官かい？生意気だね。」と大樹は思っていた

ヴィータと名乗った少女は、次はお前たちだぞ。と言ってきた

「え！えっと小野寺 ユウスケです。」

「ひつ光 夏海です！」

「小野寺に光か。次はお前だぞ！そのドライでキザで偉そうな態度のやつ」

ヴィータは大樹のほうに目をやった。

「（どつちが偉そうなんだか）僕は海東 大樹。覚えておきたまえ、オチビちゃん」

大樹はヴィータのほうにニッコリ目線を送った。それを見たヴィータはドスの効いた声で

「何か不満でもあるのか？爽やか野郎！」

と鋭い目つきで大樹をにらんだ。

「ああ、あるね。まず第一に・・・むぐつ！？」

いきなりユウスケが大樹の口を塞いだ。

「すみませんヴィータさん！！この人には後で俺がよく言ってますんで。それじゃあ俺達は持ち場に戻るんで失礼します！」

「すっすみません！！！」

「お、おう。次からはサボンじゃねーぞ」

「はい！わかりました！」

大樹を抱えそそくさとその場を立ち去る雄介たちであった。

「ちょっと、何するんだい？」

「ここじゃあ年齢とか関係ないんだって。へんな事してゴタゴタになるより今はこの世界のことを調べるのが先だろ？」

「ふん、しょうがないな」

その頃雄介たちの居た廊下ではヴィータが一人難しい顔をしていた。

ヴィータは思っていた、さっきのあいっからは妙な感じがした。

今まで感じたことのない妙な感じそれが気がかりだったのだ。

何か起こるのかもしれないとヴィータは直感的に感じ取っていた。
すると後ろから声が聞こえた。

「ヴィータ副隊長、皆さんもう集まっていますよ。」

「ああ、スバルが今行く。」

これは自分の勘に過ぎないまだ話す必要はないだろうそういつて
ヴィータは会議に足を運んだ。

B・S、14 六課とバイクと大暴れ

会議の場には、機動六課部隊長「八神はやて」に呼び出され集まった慎太郎と機動六課の隊員達とモニターごしにだがクロノ・ハラオウンの姿もあった。

「皆に集まってもらったのは他でもない、この頃色々な都市や街で起きている事件のことなんや」

はやての後にクロノが続けた。

「近頃発生している妙な事件。その事について機動六課にも手を貸してほしいというわけだ」

「その事件の事なら噂くらいは聞いたことが在ります。たしか服だけ残して人が消えたり、死体がコンクリートの壁や木にうまってみつかったことですよね？」

「グリード、ヤミーか？」

ティアナと慎太郎の問いにはやては黙ってうなずいた。

「慎太郎さんが話してくれた、グリード、ヤミー・・・私等もレリックの事で色々あるけどこっちの方も問題になってきとるんや」

「なにせ、この頃立て続けにこの妙な事件が起こっているんだ。見過ごすわけには行かない」

皆の中に妙な沈黙が流れた。皆何か変わった事がなかったか思い出しているのである。その沈黙を破ったのはヴィータの発言だった。

「あのさ、あたしちょっと気になることがあるんだ。」

「何なんヴィータ？」

「なあ、スバル。あたしがさっき誰かと話してたのおぼえてるか？」

「あ、はい。確かに、話してましたね。それがどうかしたんですか？」

「その”話してた3人”に妙な力を感じたんだ。」

皆がヴィータの方を見る。

「それ、どう言うことなのヴィータちゃん？」

「いや、あたしの思い過ごしかもしれないけどな。まあ会ってみればなのは達にもわかると思うぜ」

数日後……。

「ふう……」

ため息をつきながらモニターに向かいデータを打ち込む大樹がいた。

ただただ書類の情報を画面に打ち込んでデータ化する。

書類のままにしておくのと盗難される危険性がある・・・ためデータに変換しておく

それが大樹の仕事である。盗難、彼が一番やりそうだが・・・。

「はぁ・・・。」

もはや口からはため息しか出ていないのである。夏海やユウスケはというと・・・

「夏海ちゃん。ランチセットAできたよ」

「はい！今行きます！」

ウェイトレス姿が局員の男性陣に好評らしく

厳ついおっさんや数人のシェフたちととても楽しそうである。

ユウスケはというと清掃員のおばちゃんやアルバイトのほかの女性ととても楽しそうに話しながら仕事をしている。

（何で僕だけこんな狭い資料庫でずっと画面と向き合わなきゃいけないのかな？）

そう思いつつも黙々とデータを打ち込んでいく。

この世界に来て五日……。僕達もずいぶんとなじんだもんだ。などと大樹が考えていると。

「よう」

ドアが開き見知った顔が現れた。

「君は、あの時のオチビちゃんかい？」

「グイータ三等空尉だ。上官の名前と階級ぐらい覚えとけ。」

「ごめんごめん、で僕に何のようだい？」

「ああ実は・・・『ビービービー！！..!』」

その時、アラートが鳴り響いた！

「なんだ・・・一体？」

「第一級警戒体制！？」

ヴィータの顔に緊張がよぎる

「ちっ！おいっおまえっすぐ戻って来るからちよつと待ってる！」

「警戒体制・・・と聞こえたけど。」

「おい大樹さん！大変だ！！」

ユウスケと夏海があわてて走ってきた。

「君達、仕事は？」

大樹はスカした顔で疑問を口にした。

「そんなことより。今、怪人、ヤミーとガジェットとか言うのが街で暴れてるらしいんです！！」

ヴィータの顔を思い出し、そういう事かと大樹は思った。

「さて、僕達も本業に移るか！」

「ああ！」

「はい！」

その頃、機動六課の隊員達は、前線でたたかっていた。

「スターズは街の東地区、ライティングは西地区の敵を排除して！」

シャリオ・フィノー二通信主任から通信を受け、皆「了解！」と答える。

「くそっ！民間人のいるところで好き勝手に暴れるなんて！！ティアナ、スバル！いくぞ！！」

「ハイ！慎太郎さん！」

（ガジェットの数はそう多くはない。だが、あの化け物はなんだ？）

シグナムは敵に接近しながら始めてみるヤミーと異なる怪物に疑問を感じていた。

だが今はそんなことを考えている時ではない！

「エリオ、キャロ！おくれるなよ！」

「はい！」

「わかりました！！」

『さて、お手並み拝見といこうか。機動六課諸君。ククク・・・』

建物の後ろで、何者かが立っていた。

「シュワルベフリーゲン！」

掛け声とともに放った鉄の球は残りのガジェットたちを打ち落とした。

「よし。お前ら！今からライティングの応援につー！？」

「グロロロ〜！！」

ビルの上から緑色の蛹のような怪物がヴィータめがけ落ちてきた。反応が送れヴィータは地上へと引きずり下ろされてしまった。

「きもちわりい〜んだよっ！！」

グラーファイゼンを腹部めがけふり上げ、怪物を弾き飛ばした。

「くそっ！なんだコイツは！」

怪物の方を見るとみるみる体が赤くなっていく。

そして外の皮が剥がれ中から甲虫のような怪物が姿を現した。

「何これ！孵化！？いや脱皮！？」

すると突然怪物が姿を消した。

「なっ！？どこに！？」

「うあっ！」

「スバルッッ！！」

「あ！？…！！」

「スバル！」

スバルが気付いた時にはもう遅く、駆け寄ろうとした二人の背後から、黒い影が迫った。

その時だった

「うおりゃああああああ!!」

一筋の金色の閃光が走り、スバルはその時の轟音に驚き、目を開ける。

二人を飛び越え一台のバイクが怪物を跳ね飛ばした。

「おっおまえは!!」

声のしたほうを見ると。

「大丈夫? 君達!!」

そして目の前には赤と金色の戦士・仮面ライダークウガが居た

B・S、15 ペガサスとワームと怪盗

ガジェットを一掃したヴィータ達は、街の西地区にいるライトニングの応援に向かおうとした。

しかしその時、ビルの上からワームが襲い掛かった。

「うおおおおりやあああつ！」

脱皮しクロックアップしたワームは、ヴィータ達に襲い掛かろうとしていた。そのときヴィータ達の前にユウスケの変身した”仮面ライダークウガ”が現れたのだった！！

「おつ、おまえ・・・だれだ！？」

下半身は黒いが、胴体は赤い装甲、頭部は大きな複眼と角がある。

「説明は後。合流ポイントまで後退したらどうか・・・ヴィータちゃんだったかな？」

「ちゃん付けするな！それよりお前、どうすんだあんな怪物を。」

「まあ、見えて。」

クウガは、バイクからあるものを取り出し、叫んだ。

「超変身！！！」

赤の装甲は変化し、緑の物にかわった。緑のクウガ、クウガペガサスフォームだ。

そして、手に持った物・・・エアガンはモーフィングパワーで形を変えた。緑色のボウガン、ペガサスボウガンに。

「かわった!？」

ワームは立ち上がり。またクロックアップで姿を消した。

「また、消えやがった!」

「落ち着いて・・・」

クウガは精神を集中した。そして!

「・・・っ」

ボウガンから二射発射される。すると、

「グロオオオオ・・・」

発射された空気弾は見事にワームに命中、封印エネルギーを受け、ワームはうめき声と共に爆発した。

クウガはボウガンを元に戻し、

「さあ、俺達も戻る・・・」

見ると自分の鼻先にはグラーフアイゼンが向けられていた。

「お前の力を見せてもらった・・・が、あれは危険だ。だから、お前を連行させてもらうぞ！」

「…抵抗は無駄なだけ・・・か。投降するよ、ハハハ（俺ってこればかり・・・。）」

クウガは変身を解いてユウスケに戻り、大人しくその場に膝をついて両手を頭の後ろで組んだ。

同時刻、街西地区

「くっ！敵が多すぎる！」

シグナム達は、ガジェットを全て倒したものの五体ものヤミーに囲まれていた。

「ヤミーがこんなに・・・うわっ！」

シグナム達がヤミー達に囲まれているのを遠くの物陰から見つめていた。

「やれやれ、見に来たのはいいけど・・・」

物陰から見ていたのはシアンカラーが基調の1人の仮面ライダーだ

った。

右手には銃型のドライバーが握られていた。

「エリオくん！危ないっ！！」

「仕方ない・・・ちょっと手助けをしてあげよう。」

そう言いつとカードを1枚取り出す。

「世話が焼けるね、全く。」

そついうと1枚のカードを銃型のドライバーに差込み、銃身を伸ばすようにスライドさせた。

「カメンライド！オールダークライダー！」

「行つてらっしゃい！」

そしてドライバーをヤミー達の方へ向け、引き金を引いた。

「えっ！？」

ディエンドの繰り出したオールダークライダー軍団により、あっという間に怪人軍団を片付けてしまった・・・。

「貴方はいつたい？」

「とりあえず、話し合おうよー！」

その言葉を聞いたフォワードはディエンド達を案内した、

B・S、16 保護とライダーとこれから

『ミッドチルダ 機動六課 部隊長室』

ヴィータは任務中にユウスケを保護(?)し、そのあとライトニング隊のエリオとキャロは大樹を案内した。慎太郎は今任務を終え、機動六課に戻るとはやてに呼ばれたので今、4人のライダーが部隊長室にいる。今、部隊長室には慎太郎とユウスケと大樹、そして夏海の前にははやてとリンとシグナムの姿がある。はやては3人に先ほどの任務でどうして戦っていたか聞いていた。

「えっと・・・光夏海さんに、小野寺ユウスケさん、海東大樹さんですね。先ほどの任務でフォワード達を救ってくれてありがとうございます。でも、どうして割り込んで来たか・・・教えてくれませんか？」

「・・・あんまり、見ていられなかったからさ。」

「俺も、子供達エリオとキャロのことが襲われてたから変身して、助けたんだ。ほっとけないしね！」

3人は包み隠さず話した。この世界とは別の世界から来たこと、自分達は”ライダーと何の関係もないこの世界”に来たということ。

はやては3人に理由を聞くと念話でリインとシグナムに話しかける。

「『3人と同じ理由やな……。慎太郎さんと同じ“次元漂流者”やな。』」

「『主はやて、この者達をどうなされますか？』」

「『この3人も慎太郎さんと同じ“仮面ライダー”やし、このまほつとくのもあかんから機動六課で保護になるか、民間協力者になるかもしれへんな……。』」

「『皆さんのバリアジャケット―（“仮面ライダー”になった姿のこと）ってなんか……。もしかしたらはやてちゃんが昔見てた特撮かなんかみたいです！』」

「『リイン……。そんなことは多分ないと思うで。』」

リインは内心でドキドキしながら言っていたが、はやては苦笑しながらも念話を切り、3人の方へ顔を向ける。

「お前達も仮面ライダーか？見たところ火野、Wやアクセルとも違

うが……。」

慎太郎が質問する。

「……まあ、結構いますから……。」

「じゃあ、僕と士の事は？」

「伊達さんに聞いたことがある……だが、今回の俺の”この世界への転移”はお前達が原因じゃないんだろう？」

「そ……そうなんですけど……。」

キツパリと、答える慎太郎に少し怯む夏海。

3人はここが異世界とわかっていてもあまり驚いた様子ではなかった。理由として、世界を渡り歩く力を持つ”破壊者”と旅したり“シンケンジャー”と名乗る別世界の戦隊とめぐり会っているからだ。はやては話を続けた。

「・・・皆さん。悪いんやけど・・・機動六課こくに協力してくれへんか？」

「協力・・・？」

「はい。実はこの機動六課は人手不足なんです。3人の力をぜひ借りたいんやけど・・・いいですか？」

「「よろこんで！」」

「僕も別に構わないよ・・・。」

3人は協力に関しては不満な様子は特になかった

「質問は・・・もうないですか？」

「・・・ないようだな。」

「じゃあ私から質問してもいいですか？今回の任務でいきなり現れた“未確認生命体”について何か知っておりますか？」

はやてが言う“未確認生命体”と言うのはヤミー以外の怪人のことを刺している。はやてはもしかしたら未確認生命体について知ってるんじゃないかと思って、聞いてきた。

「・・・長くなるけどいいよね?。」

大樹は包み隠さず話した。『大ショッカー』の怪人等、全て。大樹の話を聞いて、はやて達は啞然とする。

「とある脅威?」

「はい。俺達と同じ、他の世界を救うために動いているライダーが今も戦っている。」

「今僕たちは、とある脅威から守るためにいろんな世界を旅している。そして彼”ディケイド”・・・士達も同じ理由で他の世界を旅している。僕達は世界を救いながら、幾つも回って。」

「・・・本当なら信じられない話なんだが。不思議とお前達と話していると思ってしまうな」

シグナムは微笑みながら言った。

「・・・質問はこれだけかい？」

「はい。以上です。ご協力感謝します。皆さんの新しい部屋の案内させてもらいます。シグナム、ええか？」

「わかりました。主はやて。」

3人はシグナムの案内で隊員用の寮に案内してもらったことになった。

「下水道」

下水道では、5、6歳くらいのぼろぼろの服を着た女の子が左手首に鎖で繋がれた2つのレリックケースを引きずりながら辛そうに歩く。途中でレリックケースが何処かにぶつかってその反動で女の子が膝をつく。だが女の子はすぐに立ち上がる。

「…行かなきゃ」

そう言って女の子は再び歩き出す。

B・S、17 休日とヘリとオッドアイ

早朝、フォワード陣はなのはと模擬戦をしてそれが終了するとなのはが話し始める。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様！それで、なにげに今日の模擬戦は第2段階クリアの見極めテストだったんだけど、どうでした？」

なのははフェイト、ヴィータ、慎太郎に聞く。

「合格だよ」

「「早！」」

「ま、こんだけみつちりつて、問題あるなら大変だ」

ライトニングはヴィータの評価に苦笑いをする。

「慎太郎さんは？」

と、今度は慎太郎に向き直る

「・・・合格、だな」

慎太郎の言葉に4人は表情を明るくする。

「バランスも良かったし、俺は良いと思う。」

「私も皆良い線いってると思うし。じゃあ、これにて2段階終了!」
なのはの言葉にフォワードの4人は嬉しそうにする。

「デバイスリミッターも一段解除するから、あとでシャーリーのところに行つて来てね」

「明日からはセカンドモードを基本提にして訓練すつからな
と、ヴィータ。

「くくくはい!」「くくく」

「え?明日つて…」

キャロが疑問を言葉にする。

「訓練再開は明日からだよ、今日は私たちも隊舎で待機する予定だし」

となのは。

「それと、ティアナはいつも通り明日からこれで特訓だ。」

慎太郎がバースバスターを見せると、

「うえゝ……。」

辛そうな顔。

「あ、あはは・・・」

「じゃあ、今日はその記念と言うことで一日お休み！街にでも遊びに行っておいで」

「・・・はい！」「」

4人は嬉しそうに頷き、解散して一目散に隊舎へと戻っていった。

「じゃあ、私達も戻ろうか」

「そうだね・・・慎太郎さんも」

「ああ」

と、3人も隊舎へ歩き出す。

「それにしても4人とも、強くなっただね」

その日の午後、

ミッドチルダ首都クラナガンのF23地区

「エリオ君？」

「キャラ、今何か聞こえなかった？」

偶然、近くにいた慎太郎はエリオとキャラに会う。

「ああ。ゴトツっていった感じだったな」

「「慎太郎さん！」」

3人は近くの路地裏に駆け出す。エリオとキャラはそれを追う。3人が見たのは左手首にレリックケース2つが繋がれた鎖を持って、ぼろぼろの服を着た金髪の女の子が倒れていた。

「酷い……」

「キャラ、レリックの封印……というのはエリオに任せて、この子の手当ては俺に任せてくれ。その間に全体通信を！」

「わかりました！」

「キャラから全体通信？」

マツハキヤリバーに通信が入ってクロスミラージュにも通信が入る。

『こちらライトニング4。緊急事態に付き、現場報告をします！クラナガンのF23地区にてレリックと思しきケースを2つ発見。ケースを持っていたと思われる小さな女の子が1人』

『女の子は怪我を負って意識不明です。怪我の手当では慎太郎さんがやってくれました』

『指示を頼む！』

六課メンバーは突然のことに驚く。なのははティアナとスバルに指示を出して、女の子が見つかった現場に向かうように指示をした。

非常召集が掛かり司令室に向かうと、エリオとキャロが、レリックを持った女の子を保護したとの事だった。しかも状況からレリックは女の子の持っていた分だけでなく、複数あった可能性が高い。

「隊長二人と、シャマル、ユウスケさん達にも現場に出てもらおうか。間違いなくガジェットが出てくるやろっし、仮にスカリエッティが関わっているとしたら、女の子も狙われる可能性がある、前線から手札を護衛にまわすこともないやろ？」

『確かに』

はやては考える素振りをして、笑みを漏らした。

「なら、お願いなー。」

『保護された女の子が、何か鍵になる気がする。』

なのはが、ヘリに女の子を運んできた。金髪の可愛らしい子。でも着ている服はボロボロだ。シャマルの診察では特に異常はないらしいが、人造魔導師かもしれないとの事。

「どうした、なのは？」

寝かせた女の子を、なのはが見つめていた。

「にゃ、なんでもないよ」

「そんな風には、見えなかったが？ シャマルの診察では一晩も休めば、目を覚ますそうだ」

『ガジェット来ました。地下水路に、数機ずつのグループで、総数十六、いえ、二十。海上、十二機単位が五グループ』

シャーリーからの報告が入る。ヴィータも戻ってこられるようだし、別件で動いていたスバルの姉、ギンガも協力してくれるようだ。

『ヴァイス君とシャマルもお願いな』

『おまかせあれ』

『しっかり守ります』

後は聖王教会の病院まで、何事もなければいいのだが……とヴァイス、

この少女の発見からのちにJS事件ジェイル・スカリエッツァと呼ばれる大事件が始まった。

B・S、18 幻影とヘヴィバレルとバース・デイ

まずい事に、敵の航空戦力ガジェット二型の増援、さらに幻影が混じっていて、視認でもセンサー類でも、幻影と本物を見破ることが出来ない。

苦戦するほどではないが、殲滅に時間がかかるという厄介な相手だ。

「みんな、幻影使いの居場所は探れないか？ヘリの半径一キロ以内をサーチャーで精密索敵。出来るか？」

《出来ますが、それ以上の距離からの攻撃に対処できません》

「その時は、俺が出る。」

と、慎太郎。なのは達は、フェイトと現場に残って、なのはとヴァイタをヘリの護衛に回すことで落ち着く。だが、そのためにはフェイトの限定解除が必要になる。

はやての指示で、なのはとフェイトがヘリの護衛、ヴァイタとツヴァイがFW達への増援、クウガとキバーラの二人がはやての直掩に付くことに決まった。

後は敵さんの出方しだい。ヘリに向かってくるのが、ガジェットなら問題なし。他の戦力がくるのなら、その時に考えるとのこと。

そのころ、廃ビルに2人の女性が居た。そのうち1人は布に巻かれてはいるが、大砲らしきものを所持していた。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

ディエチと呼ばれた女性は伊達めがねを付けている女性『クアット口』に答える。

「ああ。遮断物もないし空気も澄んでるからよく見える」

ディエチが言ったとおり、彼女の眼には空中に浮いているヘリが映っていた。

「でもいいのか、クアット口？ 撃っちゃって。ケースは残せるだろうけど、マテリアルの方は破壊しちゃうことになる」

「フッフ。ドクターとウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよ」

クアット口の話の聞き終わるとディエチは大砲を包んでる布を取って大砲を露わにする。

へりでは通信が入る。

『市街地にエネルギー反応！大きい！』

『そんな……まさか！』

「確かに・・・エネルギーが俺たちを狙う可能性があるな」

「たしかに、その可能性は十分……慎太郎さん、もしエネルギーが来たら相殺できますか？」

「可能性はな。だが、ブレストキャノンで相殺できるかできないか……」

「でも賭けてみようフェイトちゃん。逃げられる可能性もあるから」

「うん。行こう、なのは！」

なのはとフェイトはセットアップしてへりのデッキが開くと外に出て辺りを警戒する。

慎太郎もバースドライバーにセルメダルを入れるとグループを回す

「変身！！」

『カポーン』

慎太郎はバースへ変身するとデッキの前に立ちバースはメダルを二枚セットしグループを二度回す。

『ブレストキャノン』

機械音の後バースの胸部にブレストキャノンが装備される

廃ビル、ディエチが大砲…イノームスカノンにエネルギーをチャージして限界までチャージする。

「インヒューレントスキルIS、ヘヴィバレル発動……！あと12秒。11、10、9……」
発射時間が0になる。

「発射」

ヘヴィバレルから巨大な集束砲が放たれる。

「……来た……！」

バースはヘヴィバレルから集束砲が放たれるのを見る。するとバースはセルメダルを二枚連続で入れる

『セルバースト』

電子音の後、プレストキャノンにエネルギーをチャージしそれが放たれ、集束砲とぶつかる。激しいぶつかり合いの後、同時に爆発してディエチの攻撃が相殺された。

「……………相殺できた……………」

「相殺された……………」

ディエチは自分の攻撃が相殺されたことに驚く。

そこにバースバスターのメダル弾と金色の魔力弾がクアットロとディエチに放たれる。しかし、2人はジャンプして攻撃を避ける。

「見つけたぞ！」

「とらえた！」

ディエチとクアットロの後ろにはバースとバルディツシュ・ザンバーをハーケンフォルムにして構えてるフェイトがいた。

「早い！」

『カッターウイング』

バースはカッターウイングを装備し、

2人はすぐに逃げたがそれでもバースとフェイトはクアットロとデイエチを空中で追いかける。

「止まれ!!」

「市街地での幻魔法使用、および殺人未遂で、逮捕します!」

フェイトは周りに魔力弾を生成してバースは2枚のセルメダルをスロットしグラップを回す。

「今日は遠慮します!」

クアットロはまだ抵抗しようとする。

「……IS発動。シルバーカーテン!」

クアットロがつぶやくとデイエチとともにその場から消える。

「くっ……慎太郎さん、行ける?」

「了解!位置は大体把握している!」

バースは近くのビルに止まるとメダルを5枚セットしグラップを回す。それを合計で5度繰り返す

『クレーンアーム』

『ドリルアーム』

『キャタピラレッグ』

『ジョベルアーム』

『ブレストキャノン』

その六種類の武装はバースの各装備所へ装備されバース最強のフォーム。バース・ディとなる

『セルバースト』

電子音が鳴ると、クアットロとディエチが姿を現したところに衝撃波が繰り出される。

「衝撃波…！でも魔力反応がなかった」

2人は何とか空中にジャンプして避ける。

「なのは、フェイト、今だ！」

フェイトは足元に魔方阵を展開して魔力スフィアを手に集中させる。なのもエクシードモードとなつて足元に魔方阵を展開させてレイジングハート・エクセリオンを構え、砲撃を放つ準備をしている。バース・ディももう1度『セルバースト』を再び、放とうとする。

「ディエチ、クアットロ、じつとしてろ！」

クアットロとディエチは2人は聞き覚えのある声を聞いてその通りにする。

「IS発動。ライドインパルス！」

「トライデント……」

フェイトに応じてカートリッジを2回ロードする。

「スマッシュャー……!!」

魔方阵から3方向に巨大な金色の魔力砲が放たれる。

「エクセリオン……」

レイジングハート・エクセリオンはなのはに応じてカートリッジを1回ロードすると狙いを定める。

「バスター……!!」

レイジングハート・エクセリオンから桜色の巨大な魔力砲が放たれる。

『セルバースト』

バース・ディから衝撃波が放たれてフェイトの放ったトライデントスマッシュャーとなのはが放ったエクセリオンバスター、バース・ディが放った『セルバースト』がクアットロとディエチに直撃して爆発する。

「やった…?」

『ビンゴ!』

「じゃない!避けられた!」

「直前で救援が入ったのか?」

「アルト、追って!」

『はい!』

B・S、19 レリックと少女とオッドアイ

キヤロたちはギンガ・ナカジマ陸曹、ヴィータと合流。下水道内をキヤロのナビゲートでレリックの反応に向かって進む。

途中で出現するガジェットも、三型はスバルとギンガ陸曹が叩き潰され、一型はエリオとティアナ、フリードが叩き落していく。

姉妹だけあつてギンガ陸曹とスバルのコンビネーションは流石だった。

「ありましたー」

キヤロの声が響く。と同時にこちらに向かってくる音。エリオがキヤロを抱きかかえ真横に飛んだが、レリックのケースがキヤロの手から離れて転がる。

直後に昆虫のような外骨格を纏った生物が現れ、エリオがストラダを構えて立つ。

「じゃま」

「そうはいかないよ」

『ATTACK RIDE…… GIGANT!』

そこへ、現れたのは、肩で担がねばならぬほど大きなミサイル兵装。

と同時に、耳を劈く爆発音と、目が開けられないほどの閃光が私
たちを襲った。

抑揚のない少女の声と共にキャラの聲がして、真横から衝撃が襲
う。キャラは気を失っているが、あのまま下水道の支柱に叩きつけ
られていたら、ただではすまなかったかもしれない。ディエンドは
その隙に後方に跳びすさった時だった。先程のディエンドの放った
ギガントの衝撃によって、地下水路内の強度の限界を超えてしまっ
たらしく、崩落が起き始めていた。

「まずい、このままじゃ全員生き埋めだよ！」

「スバル！さっき、通ってきた天井にウイングロードを展開させる
！それで外に出るぞ！！」

「了解！ウイング・・・ロード！！」

ヴィータはスバルに指示を出すと、スバルは拳を地面に叩きつけ
ると魔力で作られた道が空中に出現し、螺旋状になって天井に伸び
ていく。

「スバルとギンガは先行してくれ！！」

『了解！！』

「どうやらここから脱出するのが先決みたいだね！！」

ディエンドはそう言うで一足先にウイングロードに乗って地上に
向かって駆け出した。その後にスバルとギンガが続き、キャラも続
こうとすると、ティアナがキャラを呼び止める。

「まったく、大樹さんは……。キャラ、レリックの封印処理、お願いできる?。」

「あつ、はい」

その後、クアットロとディエチの反応はロストして、そのままヘリで一度六課の隊舎に戻って聖王教会

の医療病院にシグナムとなのはで女の子を連れていくことになった。

そして……。翌日、なのはと慎太郎はシグナムの車で聖王教会まで乗せていつてもらっていた。

「すみませんシグナムさん。車出してもらっちゃって」

「なに、車はテストロツサからの借り物だし、向うにはシスターシヤッハが居らっしゃる。私が仲介した方がいいだろう」

そのあと、女の子は人造魔導師素体…人工的に作られた魔導師であり、その子は機動六課で引き取るという話をした。

その直後、聖王教会からシャッハ・ヌエラというシスターから通信が入って女の子が部屋から逃げたという話を聞いて、シグナムは車を聖王教会に急がせる。

〔聖王教会 医療病院〕

聖王教会の医療病院に到着した2人はシャツハ・ヌエラと会う。

「申し訳ありません！」

「状況はどうなっていますか？」

なのはがシャツハに状況を冷静に聞く。

保護した少女が消えたのだという。シャツハによると移動魔法の反応がないしまだ子供だから外には出られないとシャツハは言う。

「俺は外を探す。なのは、シグナムは中だ」

地理を考えれば、建物の構造を知らない慎太郎は外を探すのが無難だ。こうして搜索が始まった。広い病院をさがして10分ほどのこと。慎太郎は中庭を歩いていた。すると、その遠くで小さな女の子が歩いているのを見つけた。

「あれか？」

その金髪の少女はウサギのぬいぐるみを抱え、トテトテと歩いていた。

「世話が焼ける」

ため息をついて近づこうとすると、閃光が走る。そこには先ほどのシスター、シャッハ・ヌエラがいた。何故か武装をし、少女に構えていた。それを見た少女は怯えている。この瞬間、慎太郎は衝動的にバースバスターで牽制し、少女を抱きかかえて距離を取っていた。

「ふえ・・・？」

一瞬、何が起きたかわからない少女。そして驚きながらも、慎太郎を睨みつけるシャッハ

「何をするのです！」

「それはこちらのセリフだ・・・幼い少女に、何をしているんだ？」

「黙りなさい、その子は人造魔導師素体！どんな危険があるか・・・！」

人造魔導師素体。慎太郎ははやて達から聞いたことがあった。それはフェイトだ。フェイトも”アリシア・テストロッサ”を媒体に作られた人造魔導師素体だ。慎太郎は少女を抱えながらもシャッハを睨みつける。

「管理局・・・いや、聖王教会の人間は非武装であろうと、子供であろうと、人以外なら生命を奪うというのが普通なわけか・・・人として恥ずかしくないのか？」

慎太郎はこんな幼い子供に武器を向けるシャッハに怒り、声を低くして言う。

「でもその子供は危険があります…」

「2人ともやめて下さい。慎太郎さん、シスターシャツハ、やりすぎですよ」

そこへなのはとシグナムが駆けつける。

「こんにちは」

なのははしゃがみ、少女に笑顔を見せる。

「怖かったねー、大丈夫？」

「あ……」

「お名前、言えるかな？」

なのはの言葉に、少女はもじもじと答える。

「……ヴィヴィオ」

少女、ヴィヴィオは短く答える。

「ヴィヴィオ……良いね、可愛い名前だよ。」

「……ほら、慎太郎さんも。」

「ああ、悪い」

そう言つと慎太郎はヴィヴィオに近づいてヴィヴィオが落としたぬいぐるみを拾つて渡す。

「ヴィヴィオちゃん、ごめんな。怖かっただろ」

と、ヴィヴィオの頭をそつとなでる。

B・S、19・5 白夜の必殺技！

時の列車デンライナー次へ向かうのは過去か未来か…。

<・・・デンライナー・・・>

「わーい！！！」

「小僧！てめえ、よくも俺のプリンを！！！」

「うるさい！ バカモモ！」

騒ぐモモタロスとリュウタロスが五月蠅い為…ハナがモモタロスを飛び蹴りで制裁する。

ドオオオオン！

「があああああああああああ！！！！！」

モモタロスはデンライナーから落ちてしまった

——ISアリーナ——

『……！？』

黒髪で容姿が整っている少年は、「一夏」白を基調とした装甲を身に着けている。

「なんだ！？」

長髪の黒髪の少女は「箒」。

「一夏！今はそれどころじゃないだろう！？」

そして、金髪を首の後ろで束ねているのは「シャルル」、長い銀髪、右目は赤色で左目の方には黒い眼帯をしている少女は「ラウラ」である。

「！？ せんぱーい！」

「モモの字がデンライナーから落ちてしもった…。」

二人のイメージが喋っていると、オーナーがやってくる

「困りましたねー、他のライダー」と早く合流し、ミッドチルダにむかわなければならぬのに…。」

「バカモモのせいでとんだ、道草よ!」

「モモタロス、どこに落ちちゃったのかな…。」

「この下はIS学園。 ISアリーナが近くにあるみたいですね・・。
」

ハナとウラタロスが話していると、オーナーが答える。

『ISアリーナ?』

「あんなところに、モモタロスが!?」

ナオミが下を指す。

「あついた!?!先輩!」

モモタロスは丁度、アリーナの所で落ちていた…。

ラウラという少女に異変が起こり、観客席で見ていた人達は反射的に動いた。

ラウラのIS「シュヴァルツェア・レーゲン」は急に溶け始め、彼女を飲み込んで、全く別のISの形となっていた。

「何じゃこりゃ?!」

「…わっ!?!」

「!?! なんだ?この赤鬼…。」

一夏とモモタロスの目が合い、互いに驚く。

「一夏、何があつた? ラウラのあの姿は?」

驚くことに、異形の姿になった「シュヴァルツェア・レーゲン」の手には一夏の持つ「雪片式型」と呼ばれるのと、よく似た刀があつた。

「みんな、大丈夫か!?!」

「一夏! うん、大丈夫だよ」

シャルルと箒が応え、一夏は悔しそうな表情をする。

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉ものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ!」

どうやら今のラウラの力は現役時代の千冬らしい。

「みんな、手を出すな。俺がやる……。」

「織斑先生、一夏は自分自身の手で決着をつけたんです。やらせてあげてください。」

『……良いだろう。一夏が望むならそれを尊重する』

「俺を信じるよ、みんな。心配も祈りも不必要だ。ただ、信じて待っていてくれ。必ず勝って帰ってくる」

（ああっ！まどろっこしい！！俺にやらせろ！！）

一夏は白式を起動させる。

箒達と話し終えた一夏は「相手は千冬姉じゃない…けど、零落白夜の奥義を使ってみるぞ」と、雪片式型を構えようとするが…

ザァッ！

「おっ！これ、結構軽いな…いくぜえ！！」一夏（えっ、えっ？なんだあ？）

「一夏……って、いつの間にメッシュを？」

「一夏……お前いったいどう…」

箒とシャルルが雰囲気が変わった一夏に驚く。

一夏に憑依したモモタロスは…

「変身！」

《ソードフォーム！》

零落白夜がついたまま、電王・ソードフォームに変身した。

「なっ！！」

「俺、参上！クライマックスでいくぜえ！！」

デングァッシャー・雪片弑型モードに全てのエネルギーを消し去る絶対無効の刃が現れる。

その瞬間、電王・ソードフォーム（一夏）の姿が消えた。

ドン！

すると、「シュヴァルツェア・レーゲン」の周囲に複数の電王・ソードフォーム（一夏）の姿が現れた。

「シュヴァルツェア・レーゲン」は偽雪片で切り裂くが、複数の電王・ソードフォーム（一夏）は霧のように消え去る。

「コンチキショウ！（いたいなんなんだ）」

ガッ！

そして、「シュヴァルツェア・レーゲン」の背後に電王・ソードフォーム（一夏）が現れる。

（急に零距离戦に・・・！）

《フルチャージ！》

「いくぜ！俺の超必殺技、零落白夜バージョン！」

気合いの一声と共に、雪片式型で黒いISを断つ。

「幻桜陣・100万年早いんだよ斬りiiiiiii！！」

ドオオオオン！

黒いISの切り口からひどく消耗したラウラが出てきた。

眼帯が外れて金色の左目が露わになり、目線が合い、電王・ソードフォーム（一夏）はラウラを抱き抱える。

「おゝい、モモタロス〜！」

「・・・。」

「なんだ・・・ん？オデブか。」

「みんなが待つてるぞ。」

「おう、わかった。」

カチャッ…

変身を解除すると、元に戻る。

「あつ、戻った。」

「織斑、一夏……？」

「ラウラ、大丈夫か？」

「ああ……」

ラウラはゆっくり目を閉じ、身を一夏に預け、意識を手放そうとする。

（何だろ……凄く心地よい……悪くないな……）

「……えと、誰だか知らないけど。ありがとう！」

「おう、邪魔したな、小僧！ あばよ！」

ザアアア…

「俺にとり憑いてきたような気がしたけど？…気のせいかな…」

時の列車デンライナー次へ向かうのはミッドチルダか…。

B・S、20 泣く子とカンドロイドと危ないドクター

慎太郎となのはが聖王教会の医療病院からヴィヴィオと一緒に戻ってきて数時間経った頃、フェイトとはやてはあること……

「いつちやうの……？」

機動六課設立理由を話すためになのはを聖王教会の騎士カリム・グラシアの許へ連れて行こうと、なのはに通信をすると画面にヴィヴィオが泣いている姿が映った。

「うん、すぐ帰ってくるから……「びええええええっ！」ええ！？」

「ほらほらー！いないいないー……ばあー！」

「……うああああああん！！！」

ユウスケがあやすが……意味がなかった。

「……そんなはずじゃあ……そうだ！夏海ちゃんの笑いのツボで……」

「何いつてんるんですか！？ユウスケ、そんな事したらヴィヴィオちゃんが笑い死んじやいます！」

『それじゃあ、士と俺（僕）達はどうなっても言いように聞こえるんだけど！？』

ユウスケと大樹の意見が珍しく合った。

「やだあ！ いっちゃやだあ！」

他の者がヴィヴィオを必死で慰めるが、それでも泣き続け、必死にひつつくヴィヴィオ

（そういえば、何体かカンドロイドがあっただな・・・？）

慎太郎はそう思い出し、リュックからカンドロイドを取り出すと、変形した。

『タカー』

すると、ヴィヴィオは自然と泣き止み、目を輝かせ、タカカンをつと小さな指で突つついた。

「・・・気になるの？」

タカカンがゆつくりと体を向け、ヴィヴィオがそのタカカンをそつと撫で始めた。

「うん」

『タカー』

再び指でつつくと、今度は撫でられたタカカンは、ヴィヴィオの頭上に浮いたり、飛び回ったりと動きを始める。

「うわぁ・・・。」

暫らくすると、慎太郎のリュックから別のカンドロイドが一斉に飛び出す。

「あ！待って待って〜！」

と、追いかけるヴィヴィオ。もはやなのは達のことは忘れて遊ぶのに夢中だ。それを見たフォードメンバーはある意味すごいと思ったり、フェイトは自分の出番がないとブツブツ言っていたりとかそんなことが今の瞬間であった。

こうして、はやて達は聖王教会へと向かうことになった。

数時間くらい経ったろうか、ヴィヴィオは遊び疲れて寝ていて、大樹は土から預かったカメラでヴィヴィオの寝顔を写真に写す。

「やっぱ、子供って可愛いですね」

そんなことを呟きながら夏海は笑みを浮かべると、ヴィヴィオをベツドまで抱いて毛布をかける。

一方 スカリエッティのアジト

スカリエッティは目の前にいる男を見る。

「・・・さて、こうして合うのは二度目だね？」

スカリエッティの前に立ちはだかる男、恐竜メダルを取り込み紫のグリードへと近づいている天才科学者（？）”真木清人”かつてバースシステムやカンドロイドを開発した天才科学者であるが、現在は組織を離反。

今ではグリードの勢力に属し、実質リーダー的な存在となっている男だ。

「また、君ですか・・・」

やれやれ、といった風に視線をスカリエッティの方に向ける真木

「やれやれ、”グリードになりかけている”とはいえ、君にはもう

少し人間らしさが欲しいね」

「そう言う君はもう少し忍耐力を身に付けた方がいいのではないですか？」

真木はいつもの如く、左腕に乗せた人形に向かって喋る。

「はぁ・・・。」

スカリエッティはため息をつき、真木の肩に乗った人形通称“キヨちゃん”をはたき落とす

真木はそれを奇声を発しながら慌てて拾い上げ、呟く

「¥@■ 〒「μ、YAMERO!・・・ッハア！ スカリエッティ君、君という男は・・・」

「∴それはこっちの台詞ですよ、ドクター真木。私に君のような特殊な趣味はないのですがね・・・。」

意味不明な言い争いを広げる2人に見兼ねたウーノが溜め息をつく、

B・S、21 朝練と親子とパンツ男のコトバ

訓練場

朝の訓練を終えて、なのははフォワードを呼び集める。

「はい、集合！」

「それじゃあ、今日の朝練はここまでだ！だいぶ動きがよくなったが・・・まだ速くなる。体の動き、状況の判断を的確に速くすることを心掛ける」

と、慎太郎。

「あ、ありがとうございました！」

変わったことと言えば、ヴィヴィオが機動六課で保護されることになったくらいだ。

「今日は目立ったミスもなく、良い感じでした。今後もこの調子でね」

「ありがとうございました」

「慎太郎さん、ありがとうございます。接近戦の教導は少しだけ大変なので・・・」

「無理もない。砲撃ばかりやる奴が接近戦など無理だ」

と、慎太郎となのはが話す。なのはも教導官なので出来ないわけではない。だが砲撃手のなのはよりも、バースになる為の特訓や実戦で力をつけ、バランスよく戦える慎太郎が格闘家を指導したほうがものになるいうものだ。

フォワード陣が声をそろえて挨拶をすると訓練場を後にする。そのあと、慎太郎となのはは隊舎に戻ろうとすると散歩をしているフェイトとヴィヴィオを見つけると、なのははフェイトとヴィヴィオの方に駆け出す。

「ヴィヴィオ〜」

なのはの呼ぶ声にフェイトとヴィヴィオは声がした方に振り向く。ヴィヴィオはなのはを見ると駆け出す。

「おはようヴィヴィオ。ちゃんと起きられた？」

「うん!」

ヴィヴィオはなのはの問いに笑顔でこたえる。

「おはようフェイトちゃん」

「そっいえば、ヴィヴィオの受け入れ先はどうなんだ？」

慎太郎が聞く、

「ああ、そのことですけど・・・」

「私か・・・もしくはなのはが見ようかなって」

そのあとなのは、フェイト、ヴィヴィオは手を繋ぎながら隊舎の食堂に向かって歩いていく。

食事が終わった後、慎太郎はヴィヴィオと一緒に部屋に戻って、寮母のアイナに洗濯物をたたむように頼まれて、ヴィヴィオは慎太郎に手伝ってもらいながらやっている。

「できた？」

「上手だな」

慎太郎はヴィヴィオを褒めて、ヴィヴィオのガードに着いているザフィーラもうなずく。

その数時間後、フェイトと一緒になのはは自室に入る。そしてなのはは自分が保護責任者、フェイトが後見人になるという話を始める。

「ヴィヴィオ？どうしたの？」

ヴィヴィオはなのはとフェイトの顔を見ながら言う。

「えっとね、なのはママと、フェイトママがママがいい！」

「「いいよ、ママでも」」

本日最大の我がままである。

「えへへ、ママ達！だい好き！！」

「はは・・・。」

この様子に慎太郎も流石にこれはたじろく。

―― 手が届くのに、手を伸ばさなかったら死ぬほど後悔する・・・
それが嫌だから手を伸ばすんだ。

「火野、俺はこの世界で自分にできることがあるか不安だ・・・」

慎太郎は静かにそう呟いたが、その静かに流れる平和を楽しむことにした。

B・S、22 強気とAとオーブの戦士

慎太郎が起きた瞬間、外で爆発音のような音が聞こえて彼はずっこのける。

「痛ッ……！とりあえず外に出るか」

私服に着替え終わると慎太郎は音が鳴った方向に向かう。そして見たのはウイングロードでスバルに彼女と同タイプのデバイスを使っている女性が白いリボルバーナックルでスバルに寸止めで攻撃を中断していた光景だった。

「慎太郎さん、おはようございます」

「ああ・・・む？」

「ギンガ・ナカジマです。初めましてでもないですね。一度お会いしましたし」

と、敬礼するスバルの姉、ギンガ

「さて、みんなには紹介したし、さっそく朝の訓練始めるよ」

「……はい！」「」「」

こうしていつも通り、朝の訓練はスタートした。

訓練が終わり、

「さてと、朝ごはんいこうかフェイトちゃん」

「そうだね、慎太郎さんも行こう?」

「ああ、そうだな」

と、話していた。そこへ・・・

「なのはママー！フェイトママー！慎太郎さん！」

「ヴィヴィオ」

ヴィヴィオがトテトテと走ってきていた。

「危ないから転ばないでねー」

とフェイトが注意するが・・・

——ベシヤ

「あうっ！」

その直後に見事こけた。

「ああ！大変！」

「待つて」

フェイトが向かおうとするが、なのはがそれを止めた

「ママ・・・」

ヴィヴィオが顔を上げ、助けを求める。するとなのはがしゃがみこみ、ヴィヴィオを見る。

「ヴィヴィオ、ママたちはここだよ？一人で立ってみようか」

「うん・・・」

だんだんとヴィヴィオの目から涙が零れ出す。

「もう、駄目だよなのは！ヴィヴィオは子供なんだから！」

「あ、フェイトちゃん！」

フェイトが駆け出し、ヴィヴィオを抱き起した。

「フェイトママ・・・」

「・・・ちゃんと言うこと聞いてね？ヴィヴィオが怪我したらなのはママや私だつて泣いちゃうよ？」

「ごめんなさい・・・」

「もう、フェイトちゃん甘すぎ」

「なのはママは厳しすぎです」

慎太郎がヴィヴィオを見る。

「・・・次は、一人で立てるようにな、ヴィヴィオちゃん。」

「うん!」

慎太郎の言葉にヴィヴィオは強く頷く。

「さ、ご飯行こう」

ヴィヴィオは、3人とフォワードも歩き始める。

それから2週間が経っただろうか、慎太郎を含めた前線メンバーは部長室ではやてから地上本部での公開意見陳情会の警備にこの後すぐからなのは、ヴィータ、フォワードたちが現場に、はやて、フェイト、シグナムは明日の早朝に現場まで向かう。慎太郎達”仮面ライダー”はもしも機動六課が狙われた時のためにザファイラ、シャマルたちと六課で待機ということになった。

くへりポートく

慎太郎はヴィヴィオとともになのはの見送りに来ていた。ヴィヴィオは寂しそうな顔でなのはの顔を見つめる。

「あれ、ヴィヴィオどうしたの？此処は危ないよ」

「ヴィヴィオ、やっぱりなのはの見送りに来たかったみたいでついな」

「ほな、機動六課を頼むな、慎太郎さん」

「ああ、」

「もう、ダメだよヴィヴィオ。慎太郎さんに我がまま言っちゃ」

「ごめんなさい……」

「ヴィヴィオちゃん、君のママはすぐに帰ってくるから心配ないよ」

慎太郎はヴィヴィオに心配はないと告げるように言う。ヴィヴィオは泣きながらもうなずいてそのあと、慎太郎と2人でヘリを見送った。

機動六課内の廊下を歩く2人の男女。

「ここだな？」 平行世界”（フィリップの話によると）の俺が世話になったと言う、ミッドチルダは？」

男は逆向きのハートが背中に描かれた赤い革ジャンを着た男『照井竜』。

風都を守る仮面ライダーの一人。

「竜君、新婚旅行のつもりが、変わったところに来ちゃったね?」

もう一人が妻の照井亜樹子。

「ああ、ここにはバースがいるらしい・・・。」

（地上本部）

地上本部の内部のメインコンピューターに何者かがハッキング、クラッキングを行う。そして次々にモニター画面が消える。そして、外ではルーテシアによってガジェットが遠隔召喚される。さらにはディエチのヘヴィバレルで襲撃が始まる。

それに気が付いたフォワードやヴィータ達はすぐに迎撃を開始する。上空ではゼストと古代ベルカの融合騎『アギト』が現れてリインとユニゾンしたヴィータがゼストと戦闘を始める。

そして場所は変わって機動六課。ガジェットが大量に現れて、その数10000。

——ドオオオオオッ！

「「！？」」

突然、機動六課の正面の玄関の方で爆発が起きた。慎太郎は急いで駆け出し、六課の屋上へと壁蹴りで飛んだ。そしてそこで見た光景

「なんだ、これは・・・！」

それは一面が火の海、機動六課の壁に穴が空いている光景であつた。ガジェットが進行する。残った局員たちが迎撃をはかるうにもまるで歯が立たない。ザフィーラたちも迎撃に出ているが、それでも数がたらない。

「チイツ！」

慎太郎はそこから飛び下り、ガジェットをバースバスターで打ち落とした。

「非戦闘員は下がれ！避難用のシエルターへ逃げろ！」

まだ進行は少ない。慎太郎はバースバスターを構える。

「ザフィーラ、シャマル、ここは俺が抑える。ヴィヴィオちゃんを頼む」

そこで慎太郎がもう一度言った。頼むと……。それはザフィーラは重く感じた。

「・・・承知した、必ずヴィヴィオを守る」

そう言つて人型になるザフィーラ。シャマルも頷く。

「無茶したら駄目ですよ。私達がはやてちゃん達に怒られるんですから。」

「ああ、分かっている」

そう言つて慎太郎はガジェットの大軍を見た。

「数で押せば勝てるとでも思つたのか？甘いな」

慎太郎はガジェットが見えるとバースドライバーにセルメダルを投げ入れる

「此処から先は行かせない！変身！」

『カポーン』

とグラフプを回し、慎太郎はバースへ変身する

B・S、23 鳥と猫と敗北

ガジェットがほぼ全滅したが、それで終わりのはずがない。その遠くに見える1つの影。そこにいたのは見慣れた顔だった。

「お前は！ア…アंक！？」

「……………」

アंकは何も喋らずにバースをじっと見つめていた。

だがよく考えれば今のアंकの状態はおかしい。

アंकは泉 信吾の身体に憑依してこの姿を成していたはず。

だが、泉 信吾の身体は今、”向こう”だ。

だとしたらここにいるアंकの身体は…

「アंक…その身体は…？」

「後藤…ちよつと付き合ってもらっぜ？」

そう言ったアंकの身体がセルメダルに包まれていく。

そしてアंकの身体は、両翼を広げた鳥系グリードへと変化していった。

・・・アंकは対峙する。後ろには戦闘機人”トーレ、オットー、デイド”の姿がある。

「・・・お前らはマテリアルとやらを・・・奴は俺が抑える！」

「ふっ・・・任せるぞ、アंक」

「ああ。」

そう言つてトーレ達が飛び立つ。バースがそれに反応してクレーンアームを使おうとするが、そのクレーンアームは左翼からの羽根手裏剣に邪魔された。

「アंक・・・お前！」

「あいつ等の邪魔は許さん・・・悪いが後藤、お前を倒す」

バースは覚悟を決めたのか、それ以上は何も言わずにゆっくりと構えた。

「はぁ！」

同時に駆け出す二人。

そしてパンチとキックの応襲。

2人とも、避けては攻撃、防いでは攻撃を繰り返している。

バースはアंकの正面に立ちセルメダルを一枚取り出しバースロツトに入れグリップを回すと中央のセルリアクターが開き輝きを放ち

機械音を発音する

『ドリルアーム』

そして右腕のカプセルオーブから様々なネジ等が出現しバーズの右腕にドリルが装着される

「はっ！」

右腕のドリルアームをアंकに向け殴りかかる、

「ちっ！はああああ！！！」

アंकは両腕から炎を噴射し、バーズの追撃を阻止する。

「ぐああああ……」

炎をまともに喰らうバーズ。

「さて・・・お前に悪い情報を教えてやる・・・マテリアルは俺達がもらった。ヴォルケンリッターとやらは瀕死・・・俺達の勝ちだ」

「何っ！？」

ヴィヴィオの拉致、そして仲間の瀕死・・・その言葉が、バーズの一瞬の隙を与えた。

「目的は達成した・・・あばよ！」

アंकは赤い旋風を起し姿を消した

「待て！」

バースはそれを覆うとしたが

「逃げられたか。」

数時間前、バースとアंकが戦っているころ、隊舎の内部には無数のガジェットが居て、シャマルとザフィーラが居た。ビートチェイサー2000に乗って中心まで来たユウスケはシャマルとザフィーラの許に駆け寄る。

「2人とも大丈夫か!？」

「ユウスケ君……！」

「スマン。守り切れなかった……」

「そんなことは良い!それより、今の状況を何とかしないと……ヴィ
ヴィオちゃんや他の人も心配だ」

「もう1人増えたか」

声の方にユウスケが振り向くと、そこにいたのはスカリエツティが
製作した戦闘機人のナンバー8『オットー』だった。

「1人増えたところでもう終わり。僕のIS、レイストームの前で

は抵抗は、無意味だ」

オットーの手に現れた緑色の球体が閃光を放つ。

「クラールヴィント、防いで！」

シャマルは魔力盾で、オットーの放った閃光を防ぐ。 ユウスケは、
アークルを出現させ、両手を動かしながら叫ぶ。

「変身身！！」

クウガへとその姿を変え、ザフィーラと同時にオットーに向かって
攻撃をしようとするが、オットーが何者かを呼ぶ。

「デイド」

すると、ザフィーラの近くに双剣を持ったデイドと呼ばれる戦闘
機人が現れる。

「IS、ツインブレイズ」

その瞬間、ザフィーラの胴に2つの魔力刃が直撃して墜ちる。シャ
マルとクウガにザフィーラが落ちてきてぶつかって弾き飛ばされる。
それと同時に魔力盾が消えて、隊舎に閃光が放たれる。そして巨大
な爆発が起こる。

「さようなら」

オットーがそう言うときシャマルとザフィーラに閃光が放たれて大怪
我を負って倒れる。

「シャマルさん！ザフィーラ！お前ら……許さない！！」

クウガは周りを見渡し、近くのデバイスを手に取った。

「超変身！！」

クウガはデバイスを手に取り、手首にあるハンドコントロールリングから発せられるモーフイングパワーで青いロッド、ドラゴンロッドに変えた。

赤かった部分が全て青に変わり、装甲は形を変えた。青のクウガ、クウガドラゴンフォームだ。

シャン…

クウガがロッドを降り、構えると同時に、鈴が鳴るような音がした。

「……はっ」

まず、目の前のオットーとディードを狙い『スプラッシュドラゴン』を放つも、避けられてそのまま逃げられてしまう。

「クッ！！隊舎のみんなは！？」

クウガは火の海と化した六課の隊舎にビートチェイサー2000を駆って突入する。

「ヴァイスくん、大丈夫かい!？」

「なんとか……」

ヴァイスと合流したディエンド。そのとき、突如、建物の影から出てきたのは、一体の化け物。
猫科の動物を思わせる顔で、黒い鎧…だった。

『!?!』

「邪魔、ちよつと下がちなよ」

と黄色い竜巻を放ち、

「がああああああああつ!」

とそのまま攻撃を食らうと同時に吹っ飛んだ。

ディエンドは倒れると変身を解除され、ヴァイスと共にその場で気絶する。

そのとき、召喚獣のガリユーが現れ、すぐにヴィヴィオはガリユーによって気絶させられる…。そして、ルーテシアを連れて素早く移動する。

「待……て……」

彼らが最後に見たのは気絶したヴィヴィオを連れさったガリユーとルーテシアの姿だった。

管理局と地上本部、そして機動六課は今日、その次元犯罪者の作品達「ナンバーズ」とグリード達に敗北をした。

B・S、23・5 桃、金、銀、大暴れ！

これまでの平行ライダー世界の3つの出来事。

1つ「世界の破壊者」である事を受け入れてしまった仮面ライダー
デイクイド（オリジナル）Ⅱ門矢士は、「ライダー大戦」を勃発さ
せた。

2つ、1971年の世界でアंकが落としたセルメダルがショツカ
ーに回収されたことがきっかけとなり、とある世界で「仮面ライダ
ー達」は誕生しないことになった。

そして3つ、ある「キバの世界」で何者かが歴史の改変を行った。

これにより、一部の時空が歪んでしまった。

*

「メズールウウ！」

「ただいま、ガメル。それと皆から借りたコアメダル…返すわね。」

青のメダルのグリードメズールは、仲間のグリード達にメダルを返
す。

「遅かったねメズール。さっそく遊んで来たの？」

と、黄のメダルのグリードカザリ。

「・・・未来に行って、リアクター「シュトロゼック」に会ってきたわ。」

「へえー・・・それで、どうしたの？」

「：「シュトロゼック」のお譲ちゃんにちょっとした細工をしたの。」

どうやら、未来に行ってある人物にあっただらしい。

「なるほど・・・俺たちのコアメダルの代わりにそいつを、ベースにしたわけか？」

「・・・如いて言うなら、「リアクターヤミー」かな？ 面白いものができたね。」

ガン！！！！

「お前は黙ってろ、全てが終わったら…奴等を叩き潰す！」

「ウヴァ・・・かなり焦ってるね。」

ウヴァの様子にカザリは「いつもの事だと」手を振る、

「仕方ないわ・・・彼等にはコアメダルを何枚も持ってかれてるんだもの・・・行きましょ。」

「まってー、メズル〜。」

そして同じ頃、

『ショッカーの怪人…いいえ、何者かが「飛空挺フツケバイン」から、飛び立ちました!』

『皆、気をつけて! 彼らの反応、まだ消えてないわ…さてここからが本番ね。ねえ、準備はいい?』

「はい、もう現場に着きます」

「安心してるところ悪いが時間がないぞ。今はあくまで気絶させられているだけで、何の処置にもなっていない。このまま目覚めればトーマって奴はすぐにでも暴れ出す。だから早くさっきの黒い奴の情報とフツケバインを拘束できる場所か物を用意するんだ。俺の言うてることはわかるな?」

そう言って男は、椅子に座り込む。少女はデバイスを通信モードに切り替えると、すぐに情報収集を始めるのだった。

「いきなりイチャモンつけられるのはもう慣れっこだな。どの世界に行っても、俺は「世界を破壊する悪魔」だって言われてるんだ」

「世界を破壊する悪魔？貴方も」あの人”みたいに？」

「まあ俺は慣れてるからな。だがどの世界の奴らも、根はそんなに捻くれた奴らじゃなかった。まあそれなら今回俺にイチャモンつけてきたお前ら管理局もそんな悪い奴じゃないと思ったただけだ」

『???? ???? ??:??』

ここは真つ暗な空間でいくつものモニターが中心を見るように集まっっていて、その中心にバダンの幹部「アポロガイスト」がいた。この三つのモニターは組織の中心人物が通信で会話をするため設置されている。このバダンの幹部が集まり、会議をする理由はこれまでの戦いについてだ。

「我々の作り出した、闇の書のヤミーというのが暴れたらしいな・・。」

「で、その闇の書のヤミーを排除したというのは怪傑ズバットとかいうさすらいのヒーローか。」

「奴め、闇の書のヤミーを「ズバットアタック」などというふざけた技で倒したそうだ・・。」

「しかし現に別の世界で魔女を倒している。あの鞭の様な物を使つてな……。」

彼らが言っているさすらいのヒーローは怪傑ズバットのことを指している。

「加えて、奴等の戦闘能力も伊達じゃない。進化している奴等のライダーシステムも厄介なもの、今は手に出さない方が良いでしょう。」

「仮面ライダーの存在しない世界の怪人を我らの管理下に置きたいのだが、難しい話でもあるな。せめてインキュベーターの技術”魔女や魔獣”だけでもデータが欲しい。」

「ならばまずは情報を集めよう。情報が手に入り次第「バラロイド」に作らせればいい。」

「そうだな。まず、ノヴァの情報採取を任せたぞ！「ゾル大佐」。」

「……御意。」

「（……そろそろ、ここにいるのは飽きたな。）」

連中に利用されている者達は複雑な感情を抱きながら地上に戻つ

た。

- - - ISの世界。

旅館の一番奥の宴会用の大座敷で専用機持ち達と教師陣が集められた。

証明を落とした薄暗い室内に大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつた『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

軍用ISの銀の福音は攻撃と起動に特化した機体であり、専用機持ち全員で色々と意見を出し合っていく。その時、

「イヤッホー！　ここは私の出番だね！」

その後、箒の姉「束」は紅椿が作戦の適任と言い放ち、能力を説明し、第四世代型ISの『展開装甲』と呼ばれる束作成の能力に一夏達は啞然とする。

「確かに、その方が効率がいいかもね。だけど……………」

時刻は十一時半。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

砂浜で一夏と箒はISを纏う。

しばらくして、2人が到達地点に到着すると、銀の福音を発見した。

「いた。一夏集中しろ」

「ああ、」

銀の福音が翼を広げると、そこには砲口があった。

「やばい。箒、」

「分かってる。」

一夏たちは回避行動を取ろうとした瞬間、銀の福音の翼から無数の光弾が放たれた。その光弾がISアーマーに当たった瞬間、一瞬で爆ぜた。

（ダメージの量も凄いが……………一番やばいのは、アイツの連射の

速度だ。)

連射速度が早く、さらに命中率が悪いが当たればかなりのダメージを食らうほどの力を銀の福音は持っていた。一夏と箒は左右から同時に攻撃をしようとしたが、相手に加速され避けられた。

「一夏。私が奴の動きを止める。」

「ああ。」

箒は二本の刀で銀の福音に激しい攻撃を仕掛けた。さすがの銀の福音も防御を使い出した。

銀の福音はさっきまで銀色の翼……スラスターが銀色の光を放ったと思った瞬間、箒が海に落とされた。

「箒!」

「な、何が……」

さっきまで箒の紅椿と同じくらいの速さだったのが、眼でその姿を確認できないほどの速さに上がった。

—ヒュウウッ……バシュウッ!—

『えッ?!』

箒のもとへと向かおうとした一夏の身体に光の球体が入り込み、それと同時に一夏の身体から砂が零れ落ち、髪型は逆立ち一部に赤いメツシュが入り、瞳も真っ赤になっていった。そして一夏は険しい表情になったと思いきや、笑いながらベルトを腰に巻き、バックル横の赤いボタンを押してパスを構える。そして…

「変身ッ！」

《ソードフォーム！》

「俺！参上！！」

電子音声と共に一夏の身体に黒いアーマーが装着され、その上から更に赤いオーラアーマーと赤いデンカメンが装着されていた。零落白夜がついたまま、電王・ソードフォームに再び変身した。

「う…くう」

銀の福音は翼を広げた瞬間、銀色の光が箒に目掛けて降ってきた。だがその時……

変身した一夏が間に入り攻撃をデンガツシャー・雪片式型モードで銀色の光を全て弾いた。

「も、もしかしてまた…！？」

腕を二、三回回し…変身した一夏はデンガツシャー・雪片式型モードを振り回しながら銀の福音に向かって刃先を向けていく。

「うつしゃあ！いくぜいくぜいくぜえー！！」

（えええ？また！？）

「オラオラオラアッ！」

―ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！―

電王はデンガツシャーを振り回しながら銀の福音を圧倒していく。だがそれは戦いというよりは喧嘩みたいな戦い方をしている。そして電王は銀の福音を吹っ飛ばすと、再びパスケースを取り出しそれをバツクル部分へと当てていく。

「いくぜ、こん畜生！」

《フルチャージ！》

電子音声が響くと電王はパスを投げ捨てデンガツシャー・雪片式型モードを構え、その刃先を飛ばし銀の福音へと向けてデンガツシャー・雪片式型モードを振っていく。

「必殺！俺の必殺技…」

―ザシュウッ！ザシュウッ！ザシュウッ！―

「…コンチクショオオッ！！」

―ズガガガガガガアッ！！―

荒れた電王の必殺技を受け、銀の福音は停止するだった……。さっきまでフリーズしていた『銀の福音』が見る見るうちに姿を変えていった。

「まさか、ラウラの言っていた『セカンドシフト第二形態移行1』か。」

箒がそういった瞬間、銀の福音の姿が消え、気づいたときには箒の目の前にいた。

「まずい。こいつは……………」

銀の福音は『銀の鐘』を放った。箒は至近距離で喰らってしまい、箒はIsごと海に落ちていった。

『箒ッ?!』

銀の福音がオレンジ色のエネルギーブレードで電王に切りかかる…が。

「お前は何しとんねん！ちよと退きや——」

「バシユウツ！——」

変身した一夏の後ろに金色の光が現れるとそのまま変身した一夏へと突っ込んでいき、なんと変身した一夏の中へと入っていったのであった。そして……

『イテテ…何しやがるコラァ!』

ードシンツ！ー

モモタロスが離れ、今度は金色が基準のオーラアーマーにマサカリをイメージしたデンカメンの電王アックスフォームへと変身を完了していった。

銀の福音はエネルギーブレードを展開させるが、

ーガキイッ！ー

「フンツ！そんな攻撃やったら簡単に止められるで！」

銀の福音の剣撃は電王^{アックス}に受け止められた。

（私は……………ここで終わるのか。すまない。一夏……………一夏。
）

電王^{アックス}と銀の福音が戦っている中、箒はまぶたを閉じた。

ーバシユウツ！ー

「……………いくぜえ！」

『…え、ええ！？』

モモタロスは箒の中へと入り込んでしまい、箒は先程の一夏のように

な髪型と瞳になっていった。

「箒まで…?!」

「……少し、胸の辺りが重いが、もんだいねえな!」

『…余計なお世話だ。』

M箒はデンオウベルトを取り出し腰に巻きパスを取り出す。

「変身ッ!」

《ソードフォーム!》

「俺参上!!うりゃあッ!」

パスをバツクルにセタッチし、M箒は電王^{ソード}へと変身しすぐに決め台詞とポーズを取り銀の福音に向かって突っ込んでいった、すると、銀の福音が体制を整え攻撃してきたが。

《《フルチャージ!!》》

「いくぜ!熊公、俺たちの必殺技!!」

「行くでえ。桃の字、ダイナミックやあ!!」

K一夏とM箒はデンガッシャーを構え、接近してくる銀の福音に狙いを定めた。

「てめえの命運は尽きたぜ斬りいいい」

二人が同時にデンガツシャーを振った瞬間、紅色と金色の斬撃が銀の福音を斬りつけ…その瞬間、操縦者がほり投げられた。

「作戦完了だ、よくやったな！お前たち。」

『はい』

<・・・デンライナー・・・>

「おかえり〜」

「ゴルア、元と言えば…てめえがまた俺のプリンを！」

「僕じゃなくて「鳥さん」だよ？」

「手羽先！てめえ！！」

「美味であつた！」

「喧嘩しないでよ。俺がまた作ってあげるから。」

時の列車デンライナー、いつになったら「デイケイド」と合流し、ミッドチルダに行けるのか…。

B・S、24 航空艦とゆりかごと騎士ヤミー

「次元航空艦・アースラ」

襲撃から数日が過ぎた、機動六課のメンバーの戦闘要員のほとんどが回復し、次元航空艇アースラにその身を写した頃にはやてや隊長2人の意見などを聞いて方針はスカリエッティに囚われたヴィヴィオとギンガの救出に決定して、それぞれ待機命令が下された。

慎太郎ははやてと一緒に会議室へ向かって行った。

「会議室に着いたぞ。」

会議室に入ると、隊長たちとティアナにキャロ、ヘリパイロットの制服に身を包んだアルトがそろっていた。そして、二人の来訪者がやって来る。

「元気そうだな。バース」

「みんな、大丈夫？」

突然の来訪者に慎太郎達の動きはピタツと止んだ。

「き、きみは!!」

「あ!!」

「アクセル!!」

照井竜が来たこと（嫁付）に慎太郎達は驚きを隠せなかった。

「アクセル、お前、どうやって……」

「フィリップに送り込まれて気がついたらミッドチルダにいた。と言っても、ついたのは昨日だな」

照井は壁に寄りかかる。

そしてそこへジェイル・スカリエッティから通信が入った。

『やあ、時空管理局の諸君』

「ジェイル・スカリエッティ！」

フェイトが声を荒げる。自らの存在を作り出したその存在をフェイトは睨みつける。どうやら今回の通信は機動六課のみに送られているらしい。

『君たちに見せたいものがある。これを見たまえ』

そこにあるのはヴィヴィオが玉座らしき場所で眠っている様子だった。なのはが思わず声を上げる

「ヴィヴィオ！」

『つくつくつく・・・どうかね？これこそ君たちが忌避しながらも求めていた絶対の力』

そこにあるのは巨大な船。“ゆりかご”と呼ばれた世界の終末を導く絶対の兵器だった。

玉座の間、

そこにはコンソールパネルを操作しているディエチとクアットロ、玉座に拘束されているヴィヴィオが居た。

「クアットロ、正直な感想言っている？」

「自由に」

クアットロは適当な言葉で返す。

「この作戦、あまり気が進まない…」

「あゝら、どうして?」

「こんな小さな子供を使つて、こんな大きな船を動かして……そこ
までしないといけないことなのかなあ……技術者の復讐とかそんな
のつて……」

「ああ、あれ。あんなのドクターの口先三舌。あんなのでたらめよ」

「そうなの?」

「ドクターの目標は始めから1つだけ。生命技術操作の完全なる完
成、そしてそれができる空間作り。このゆりかごはその為の船であ
り、実現のためのちから。ま、今回の件で何千人か死ぬでしょうけ
ど。ドクターの研究は皆を救うための技術ですもの」

ディエチはクアットロに聞いても納得できない。

だが、スカリエッティの行動はこれで終わりではなかった。

「あれが、ゆりかご……」

『旧暦の時代……一度は世界を席卷し、そして破壊した古代ベルカの悪夢なのだよ』

「さて、こちらの状況はこんなものでいいだろう。……おや、真木君が見当たらないようだ？」

急にスカリエッティはドクター真木を探し出した。

「ああ、もう外に出たみたいだ……。ん？」

「スカリエッティ！」

フェイトが徐に前に出る。

怒りの表情で、スカリエッティを再び、睨んだ。

「おやおや、これはこれは」

スカリエッティはおもちゃを見つけたかのように目をキラキラさせた。

「どうしたかね？生みの親である私にお礼かな？」

「くっ、貴様ああっ！」

フェイトは今にも飛び掛からんばかりに怒りをあらわにした。だが、そんなフェイトをスカリエッティはただケタケタと笑っていた。

『ふっ・・・まあ、今回回線を送ったのは君たちにいいモノ見せようと思ってね・・・』

ヴィヴィオは依然眠ったまま。そしてスカリエッティはそれを言い終えてから短く笑っていた。

「なのはママア！」

ヴィヴィオは泣き叫んでなのはの名前を呼ぶ。

「（『奴ら』から預かったショットカーメダルで・・・）おいガキ！
！」

アंकは一枚のメダル…『ショットカーメダル』を1枚取り出す。

「ひいつ！？」

アंकはヴィヴィオを無理矢理立たせ、

「お前を実験台に、使わせてもらっ」

「え…？」

突然、ヴィヴィオの後頭部に『投入口』が現れる。

アंकはその『投入口』に取り出した『ショットカーメダル』を入れる。

すると…

「あ、ああ、あああ…!?!」

ズル、ズ、ズルル…

ヴィヴィオの腹部から、『オッドアイの騎士型』の成長したヤミーが出てきた。

「ひひひひひっ!?!」

「ハハハハ、こいつは傑作だ!!チッ!お前は用済みだ!」

「ひっ!」

アंकはヴィヴィオを玉座に座らせる

「いけっ!?!」

「…ウガアアアアアアアアアアア!?!?!?!?!?!?!?!」

騎士型ヤミーは背中に翼を生やし、ゆりかごの外へ出ると、次元の彼方に飛び去った。

B・S、25 突入と内部と我武者羅攻撃

次元犯罪者ジェイル・スカリエッティがついに聖王の遺産『聖王のゆりかご』を天空へ浮上させる。その同時期、スカリエッティの手下『ナンバーズ』がクラナガンの各地へ攻撃を開始する。そして機動六課のゆりかご攻略戦も始まろうとしていた。

はやて達はゆりかごから続々と射出されるガジェット群と先行して戦っている武装局員達と合流、指揮権をはやてに移行し、それぞれの指示を飛ばす。

先行していた武装局員達は、機動力の高いガジェットに苦戦していた。

なによりAMFがあるため魔法の威力が弱まってしまう。

しかし、はやて達ガジェット戦闘経験者の的確な指示により戦局は若干取り戻した。

はやてはなのは達にゆりかご突入まで、それぞれ現在待機中の武装局員の指揮をするよう指示し、ガジェットに向かって行った。

はやては砲台となり、無数に飛び交うガジェットを落とし、武装局員には各個撃破を命令、なのはやヴィータもゆりかご進入までは臨時に指揮をとりガジェットを落としていく。

そして、バースははやてのサポートとして細かく武装局員に指示する。

「二時の方向、3編隊接近、前衛は攻撃後退避、後衛は右回りで攻

撃」

「ななめ上55度、2編隊接近、回り込んで攻撃」

的確に、すばやく指示する姿に、はやてはほろりと感嘆の声を上げた。

その時、ヴィータがゆりかご内部へ続く道を発見したという。

「なのは、ヴィータ、行くぞ！」

「うん、ヴィヴィオを助けなきゃ」

「なのは、慎太郎、行くぞ」

3人はその場から飛翔する。

「ゆりかご内部」

ゆりかごの中へと進入すると、高濃度のAMFが張り巡らされており、なのはやヴィータも阻害を受けているよう集中してゆっくりと着地、バースはカッターウィングを解除し、ゆりかご内に着地した。

その時、ガジェットが現れて3人に魔力弾を発射する。

「此処は任せろ!!」

そう言うとき、ヴィータはグラーフアイゼンを構えて一撃でガジェットを葬り去る。さらにデカブツのガジェットが現れたが、シュワルベフリーゲンを放って一気にガジェットを破壊する。

「ヴィータ!大丈夫か!」

「ヴィータちゃん……あんまり飛ばしすぎると……」

「ウルセエよ……!センターや後衛の魔力温存も……前衛の仕事のうち何だよ……」

すると3人にゆりかごの駆動炉と玉座の位置のマップが贈られる。

「逆方向……」

「なのは、此処からは別行動だ」

ヴィータは二手に分かれて行動しようという。

「ヴィータちゃん!」

「駆動炉と玉座にいるヴィヴィオと……片っぱし止めたら止まるかもしれないし止まらないかもしれないんだ。こうしてる間にも外は危なくなってる」

「でもヴィータちゃん、此処までの消耗が……」

「激しすぎるんだから無茶は……」

「だからあたしが駆動炉に回る。お前らはさっさとヴィヴィオを助けに行つて来い」

ヴィータは笑いながらバースとなのはにヴィヴィオを助けるように言う。

「でも……！」

「あたしとアイゼンの一番の得意分野、知ってんだろ？破壊と粉砕。鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン。砕けねえ物なんぞ、この世に無え」

肩にグラーファイゼンを携えながらヴィータは告げる。

「わかった。」

「サンキュー。一瞬でぶっ壊してお前らの援護に向かってやる。サッサと上昇を止めて、表のはやてに合流だ」

「ああ。約束だからな」

「当たり前ーだ！」

「皆で無事に」

そして、3人は自らのやるべきことをするため、走り出す。

それぞれの戦場へ向かうために。

『ゆりかご、軌道ポイント到達まであと2時間16分』

時間は少し遡る。

フェイト、シャツハ、キバーラの一行はスカリエツティアジトの中を突き進む。

突入前にディエンドと、キバーラと合流。

そこで作戦を練ろうとしたがディエンドは別行動を取ると言った。そして、ディエンドはキバーラに向けて一言

「じゃあ、頑張ってくれたまえ「夏メロン」」

と言って別れた。

フェイト、シスターシャツハ、キバーラはお互いの顔を見て、小さく、決意ある頷きを返した。

ただキバーラは、ディエンドの去り際の「夏メロン」が気にいらなかったが。

「はあああああつー！」

フェイトが気合いと共にバルディッシュユザンパーを振り下ろす。

狭い穴蔵のようなアジト内で、巨大武器であるバルディッシュユザンパーを振り下ろすということは行動制限がなされるのだが、フェイトはそんなものお構い無しとばかりに、天井に当たるバルディッシュユザンパーを振り抜く。

ガリガリと音をたて天井が削れる。

同時に、振り下ろされたバルディッシュユザンパーは目の前のガジェット群を粉碎していく。

それを見たシャッハは「お見事です！」と言って感動していたが、キバーラはその攻撃によってアジトが崩落しないか冷や汗をかいていた。

どうもフェイトはスカリエッティに関わると精神が不安定になり、判断力が鈍るようである。

今も、AMFが充滿するこのアジト内で後先考えずバンバン魔力使ってるし、そのせいで肩で息をしている。

そして厄介なのはシスターシャッハである。

近代ベルカを使う、バリバリの近接戦闘に特化したスタイル。

「烈風一迅!!」

シャツハはそう叫ぶと神速の歩方を駆使しヴィンデルシャフトを繰り出す。

高い切断、破砕能力を持つヴィンデルシャフトは、シャツハの歩方と相まって恐ろしい戦闘力を披露するように、次々と群がるガジェットを粉砕していく。

確かに戦闘力は高い。シグナムの紫電一閃にひけをとらない威力だろう。

「やりますね、シャツハさん。私も・・・笑いのツボ!」

キバーラも負けずと、群がるガジェットを「笑いのツボ」で次々と粉砕していく。

「それガジェットにも効くんだ……まあいつか。」

B・S、26 鉄槌とダディとギルス

そのころ、ヴィータはデカブツガジェットを破壊していた。

「まだ、カートリッジは残っているな・・・!?」

ザシユツ……!!

その時、ヴィータの胸をステルス状態で見えない何かが刺した。ヴィータを刺した何かはステルス状態を解く。ヴィータはそれを見ると怒りが収まらなくなる。それは8年前になのはを刺して彼女にとつもない怪我を負わせたガジェットと同タイプだったからだ。

「あの時なのはを墜としたのはてめえらの同類か……!!」

ヴィータは自分の血で染まった体を起こすと怒りを込めながら言う。

「ッざけんなよ……!!一機残らずぶっ壊してやる!!」

ヴィータはギガントフォルムのグラーファイゼンを振り上げ、ガジェットを複数薙ぎ払う。

そして、ヴィータはゆりかごの中心部、動力炉の前まで到達した。

動力炉は巨大なクリスタルで、相当の魔力を内包しているのが見てわかる程、部屋の中は濃密な魔力で支配されていた。

後は、この動力炉を破壊すればゆりかごの大気圏到達を阻止できる。

ヴィータはグラーフアイゼンを杖代わりにし、無理矢理立ち上がる。

「あたしは・・・」

ヴィータはゆつくりとグラーフアイゼンを両手で握りしめ、腰を落とす。

「あたしはああああっ!!」

ヴィータはダンツと勢いよく地面を蹴り上げ、飛び上がる。

そして、グラーフアイゼンはカートリッジをロードし、姿を変える。

それは、グラーフアイゼンのリミットブレイク・ツェアシュテールングスフォルム。

小さな鎧は、ヴィータ自身より大きな大槌となり、攻撃する側の先端には全てを貫かんばかりの螺旋、ドリルが空気を巻き込んで回転しうねりをあげ、後には噴射口が並べられていた。

「あたしははやての所に帰る!!」

ヴィータの叫びに呼応するかのように噴射口から炎が吹き出し、クラーファイゼンは推進力を得て動力炉に向かう。

「あたしは仲間を護る!!」

動力炉とクラーフアイゼンが接触し、火花が散る。

「おりゃあああぁっ!!」

しかしヴィータの蓄積されたダメージが大きく、有効打とはならず、反対にヴィータが動力炉の内包する魔力に圧されはじめた。

クラーフアイゼンにヒビが走り、これ以上無茶をすれば、クラーフアイゼンが壊れてしまう。

「ぐうつ・・・もう・・・もう・・・!!」

ヴィータはもうダメかと呟いたが、次の瞬間、目の前にいる人物が彼女の動きを止める。

—突然現れた”男”によって—

「誰だ!!」

「・・・よく頑張った!!後は俺に任せろ!!」

そう言つて”男”はバックルを取り出し、腰にベルトが巻かれ、待機音が鳴り響く。

”男”は開いた手を握りしめて叫んだ。

「変身!!」

『ターンアップ!』

光の壁が放出され、男はそこに向かって駆け出した。
そして彼が壁を通り抜けた瞬間、体は鎧に包まれる。

――『ブレイドの世界（原典）のライダー”仮面ライダーギャレン”』

ギャレンはトレイを開き、『ラウズカード』を取り出した。

『ドロップ』

『ファイアー』

『ジェミニ』

『バーニングデイド！』

「ザヨゴオオオオツ！！」

ギャレンは叫ぶと上空に飛び上がる！・・・そして、

分身し、空から炎を纏った爪先蹴りでクリスタルにヒビが入り、動力炉が爆発した

――思わぬ助っ人によって、見事撃破したのだった。

その頃、アギトの世界、

短めの髪をブロンドに染めた青年、彼の名は、葦原 涼…かつて『仮面ライダー』の一人として、Unknownと呼ばれる未確認生命体と戦った経歴を持つ。

ガコン…

彼が眠りに就こうとした時、部屋の扉の郵便受けから音がした。

「…ん？」

気になり、ベッドから身を起こすと、静かに玄関先へと足を運んだ。

そこに置かれていたのは、一通の封書…切手もなく、住所も書かれていない。

ただ、『葦原 涼様』と宛名だけはしっかりと書いてあった。

裏面を見ても、差出人の名前すら書かれておらず、封すらされていない。

中を見ると、一枚の便箋に…

『新たな脅威が迫っています。是非、貴方の力を貸して頂きたい。なお、貴方の身にも危険が迫る筈です。お気を付け下さい』

『新たな脅威…』

この文字を見た瞬間、Unknownの姿が脳裏に浮かぶ。

そうなれば『力を貸して頂きたい』の『力』とは、やはりギルスの事だろう。

『葦原涼がギルスである』事を知っている人物は、限られている。

全く意味の解らない手紙だった。便箋の一番下に書かれている『海東大樹』と言う名前にも、覚えがない。

顔をしかめ、自室の扉を開いたその時だった！

『うわあああああ！？』

オーロラに飲み込まれ、葦原涼はその場から消えた。

『クレーンアーム、プレストキャノン』

バーズは2つの武装のフルパワーを使い、目の前の敵を蹴散らす。それでも2人が進んでもガジェットがその道をを阻む。

「いちいち相手してられるか。なのは！」

「わかった慎太郎さん！レイジングハート！」

『了解』

レイジングハート・エクセリオンから応答の合図が来ると銃状の部分から魔力の槍が現れて、ブースターから桜色の対翼が出現する。

「ACSDライバー！」

『了解しました。突撃』

するとなのはは勢いよくガジェットに突進する。バーズは再びバースロットにセルメダルを入れグリップアクセラレータを回し中央のセルリアクターを開き輝きを放ち機械音を発音させる

『シヨベルアーム』

左腕のカプセルオーブから再び様々なパーツが出現しバーズの左腕にシヨベルの先端が装備され両腕で殴りつけて、なのはは一気にガジェットを突き抜ける。一閃、2つの閃光が消えるとガジェットは

全機爆発する。

そのまま、なのはは周りに魔力弾を生成、レイジングハート・エクセリオンから玉座の間まであと少しだと言われて2人はスピードを上げる。

「よし、なのは、このまま突っ切るぞ」

「うん。ヴィヴィオ、もう少しだから頑張ってね」

ゆりかごの廊下でディエチがイノームスカノンのエネルギーチャージをしている。ふと、モニターを見るとバースとなのはが映っていた。

「あの小さい子のお母さんだっけ……あんたたちには恨みはないけど」

一瞬ためらおうとしたが、砲撃を撃とうとする。

「5、4、3、2、1」

砲撃を撃とうとしているディエチに気づいてバースはメダルをセットしグリップを回す。

『ブレストキャノン』

ブレストキャノンにエネルギーをチャージし、

「エクセリオン……」

バースもセルメダルを二枚連続で入れる

「0」

「バスタアアアアアッ！！！」

『セルバースト』

同時にブレストキャノン、エクセリオンバスター、を打ち出す。

「ブラスターシステム……リミット1、リリース！」

『BLASTER SET』

「ブラスター…シュート！！」

なのははブラスターシステムの解除をしてエクセリオンバスターに魔力を送り込んで威力を上げる。

そしてエクセリオンバスターとセルバーストがディエチの放った砲撃を弾き飛ばしてディエチもエクセリオンバスターを喰らって吹き飛ばされる。

「ガハッ！」

ディエチはその場に倒れる。

なのはは、ディエチをバインドで拘束する。

「じつとしてなさい。突入隊が貴女を確保して、安全な場所まで護送してくれる」

同時にレイジングハート・エクセリオンがイノームスカノンをバインドで縛る。

「この船は……俺たちが停止させる！」

2人は逆方向に飛翔する。ディエチはただ黙って見ているしかなかった。

「なのは、大丈夫か」

「平気です。レイジングハート、ブラスターモードはこのまま維持。急ぐよ、慎太郎さん、レイジングハート」

「ああ。」

2人は廊下を滑空する。

ゆりかご近く、

「デコイー！！！！行けッ！！」

『た、ターゲット1が未確認の攻撃パターンを繰り出しました！！』

『くっそヤベエな…こいつあたしより力が強え…』

「…デコイツ！もう一丁いくぞ！！」

攻撃の通らない相手に管理局の魔道士達は悪戦苦闘していた、その瞬間だったふと背後からの声がしたかと思うと次には

「下がっていなさい！」

男はベルトを装着、ポケットからイクサナツクルを取り出す。

そしてイクサナツクルを拳に当てる。

『Ready』

「変身！」

ベルトに縦方向に装着

『First on』

その電子音と共に男はイクサセーブモードに姿を変える。

ガジェットは容赦なく光弾を飛ばす。

キーン！

イクサはそれを受け止め、蹴り飛ばす。

「相手にならない」

イクサはイクサカリバー・ガンモードを構えガジェット目掛けて連射する。

ドン！ドン！

容赦なく放たれる弾丸は確実にガジェット達を追い詰めていく、イクサはクロスシールドを開いてバーストモードに切り替える。

「終わりだ！」

イクサはカリバーフェッスルを取り出し、リードさせる。

『IXA、Caliber，rise，up』

イクサカリバーをカリバーモードに移行、眩い光を纏う

「はあっ！」

そのままガジェットの大群を両断する。

ドオオオオオン！

ガジェットは次々と爆発する。

「さて、俺も行こうか・・・。」

イクサは変身を解除、その場を後にする。

B・S、28 クワガタと姉妹とありがた迷惑

東京タワーの下

ZECTとワーム・ネイティブの戦いから一年、”仮面ライダーガタック”

加賀美新は一息吐いて色々考えていた。

「ふう。平和だな。皆は何してんだろ。」

あの戦いで生き残った人間もいたし、死んだ人間も沢山でた。

「おっと、感傷に浸ってる場合じゃないな……」

すると、懐かしい飛行音が聞こえてきた。

「この音は……まさか……」

彼の予測は当たっていた。ガタックゼクターだった。

「ガタックゼクター……何で……」

しかし、ガタックゼクターは何も答えず外に飛び出してしまった。

「おい！待てって！」

仕方なく追っ新……すると、彼の周りを光が包んだ。

「！？っわあああああ！？」

そして、加賀美 新は消えてしまった。

彼は別の世界へ行ったのだ。『ミッドチルダ』へ…

ミッドチルダ クラナガン

「地上本部部隊！巻き返しいや！」

「航空隊！掃射を急いで！」

ミッドチルダの首都クラナガンで、上空から指示が飛ぶ。それは八神はやての指示。そして武装隊達の指示。様々な手を使い、そのヤミーを潰していく

「行くわよエリオ！キャロ！」

「「はい！」」

フォワードが連携でヤミーを叩き潰す

その頃、

空中はウィングロードが張り巡らされ、青い迷路のような景色だった。

スバルはリボルバーナックルを構え、姉であるギンガを見据える。

周囲には自分とギンガ以外は誰もいない。

朽ち果てた道路の上で、スバルは最愛の姉、ギンガを顔を苦痛に歪め見、防御する。

いつもの朗らかな笑みは無く、人形のように無表情に、攻撃に躊躇するスバルを余所に、致命傷を負うほどの攻撃を躊躇無く仕掛けてくる。

ギンガは容赦無く攻撃をする。

その一撃、一撃が、人を簡単に撲殺できる程の威力を持つ拳を、蹴りを、家族であるスバルに向ける。

スバルは思い知った…これは戦闘なのだと。

いつも姉と行っている組み手ではないのだと。

スバルはギンガの放つリボルバーナックルの攻撃をバックステップで避け、ギンガとの距離を取る。

そして、深く深呼吸をした。

私は覚悟していたハズだ。

ギン姉とこうなることを。

今、この場には私とギン姉だけ

ならば…私がギン姉の…目を醒まさせる！

スバルの瞳に確固たる決意が宿り、足を肩幅に広げ腰を落とし、拳を腰に構えた。

ギンガが突撃し、リボルバーナックルを振り抜く。

スバルもリボルバーナックルを突き出し、応戦する。

リボルバーナックル同士がぶつかり、二人の間にリボルバーナックルの打撃音と、火花が散る。

まさに力と力の勝負である。

「うおりゃああああっ！」

競り勝ったのはスバルだった。

スバルはリボルバーナックルを振り抜き、逆にギンガは吹き飛ばさ

れる。

「……え？」

困惑の声をあげたのもスバルだった。

スバルは違和感を覚えた。

己の拳を見ながら思考の海に潜ろうとしたとき、またギンガが攻撃を仕掛けてきた。

幾分気持ち落ち着いていたスバルは、ギンガの動きにまた違和感を感じた。

（……遅い？）

スバルにはギンガの動きが遅く見えた。

そして、事実ギンガの攻撃を難無く回避できた。

ギンガは足を止め、スバルに連撃した。

無数の拳と蹴りがスバルに襲い掛かるのだが、しかしスバルはそんな連撃もいとまたやすく避けた。

スウェー、ダッキング、パーリング、スバルはギンガの攻撃を尽く避けるか、たたき落とし、受け流した。

「……ギン姉、本気でやってる？」

スバルが困惑の表情でギンガの攻撃を捌きながら呟く。

これには洗脳されているギンガもカチンときたようだった。

「・・・っ!!」

ギンガが腰を溜め、リボルバーナックルを振りかぶる。
ナックルスピナーが回転をあげ、高音を鳴らす。

その攻撃は、まともに頭部に喰らえば、ほおずきのように一瞬で弾け飛ぶような凶悪な攻撃だった。

しかし、そんな攻撃をスバルは難無く掌で受け止めた。

「・・・!?!」

ギンガの表情が驚愕に染まる。

「はあっ!」

ギンガが気を反らしているスキに、スバルはミドルキックをギンガに浴びせた。

「——くっっ!!」

腕でガードしたが、その腕がメキメキと悲鳴をあげた。

苦悶の声をあげたギンガは、威力を吸収出来ないと判断し、そのまま攻撃に流されるように吹き飛び威力を殺した。

スバルはいつもの前傾姿勢のファイティングポーズをやめ、足を肩

幅に広げ左足を前に出し、右足を後ろに引いて重心を乗せる。

体を斜めに構えつつ、姿勢は真っ直ぐに、そして右腕を腰に構え、左腕を軽く前に出した。

大きく深呼吸し、息を吐ききったスバルはギンガに言った。

「行くよ！！ギン姉！！」

そこからはスバルの独壇場だった。

もとのスペックは大差無かった二人だったが、それゆえコンディションはとても重要なのだ。

生まれて以来感じたことが無いほどベストコンディションのスバルに、スカリエッティによって洗脳されコンディションが万全か計りかねるギンガ。

そして、なによりメンタル面である。

自信が確信に変わったスバルに対し、焦り、心を乱すギンガ。

この差が顕著に表れたのだ。

スバルはギンガの攻撃を尽くを捌き、一撃を放つ。

スバルはできれば一撃でギンガを救いたかったのだが、そこは流石ギンガといったところなのか、スバルの急所攻撃を僅かにずらし致命傷を逃れていた。

結果戦いは長引き、ギンガは体中に傷を負い、致命傷はないが、蓄

積されたダメージは相当である。

途中、ギンガの手が突如回転し始め、ドリルのような攻撃を仕掛けてきたときは驚いたが、しかしそれだけだった。

ギンガの攻撃はもはやスバルのプロテクションすら碎けない程低下してしまった。

「・・・ハアー・・・ハアー・・・」

大量の汗と、荒い息遣いをしながらもギンガは戦意喪失することなく、体力の限界によって重くなった腕を尚もあげ、ファイティングポーズを崩さなかった。

そしてギンガの瞳に決意が宿る。

スバルはギンガの瞳を見て理解した。

——次の攻撃が最後だ——

スバルは小さく息を吐き、リボルバーナックルを腰に構え、ギンガを待つ。

「——ふっ——」

ギンガはスバルに向かって走る。

ブリッツキャリバーのローラーが己の限界速度を無視するかのよう
にホイールから火花が出る。

脅威のスタートダッシュは、ズドンという音と共に地面を破壊する
が、もうその場にギンガはいない。

ブリッツキャリバーの底力と、ギンガの覚悟は、スバルの元へ一瞬
で近付けた。

捨て身覚悟の特攻

普段のギンガならばそんな無謀な事はしないだろう。

いや、これしか活路が無ければするかもしれない。

しかしそこに小さな奇跡が起こった。

ギンガの左腕に装着されたリボルバーナックルが、周囲の空気を巻
き込む。

ナックルスピナーが高速回転し、もっともつと空気を回転させる。

そして、いつしかギンガを中心に螺旋の渦が巻き起こる。

少し離れた場所、ガタツクゼクターが飛んできて新の手に収まる。

「人が襲われている！？変身！」

【H E N S I N】

「キャスト・オフ！」

【C A S T O F F】

【C H A N G E S T A G B I T T L E 】

新はすぐさまマスクドフォームからライダーフォームに移行。そして、右の腰を押す。

「クロックアップ！」

【C L O C K U P】

Z E C Tライダー特有の超高速移動クロックアップを発動。

ハリケーンのような暴風を纏ったギンガは、渾身の一撃を放った。

それは、魔法と、力と、風が一体となった一撃。

名付けるならば 『風の拳』

奇しくも、その一撃はギンガの知る最高の一撃、ギンガとスバルが

追い求めていた『一撃必殺』

——母クイントの得意とする技だった

そんな一撃を、スバルは目をキラキラさせて見ていた。

（やっぱりギン姉はすごい！！）

改めてギンガに尊敬の念を抱くスバルだったが、それでもスバルの自信は揺るがなかった。

「でも！私は倒れない！」

目にも止まらぬ閃光のごときスバルの一撃は

ギンガに頭に当たる前に

ギンガのリボルバーナックルのフックによって

”横から”攻撃され、スバルのリボルバーナックルは軌道をずらされた

「まずい！」

『！？』

いきなり、彼女達の戦いに割り込み、ガタツクは連続パンチをギン

ガに浴びせる。怯むギンガ。
そして、ゼクターの横のボタンを押す。

One two three

「ライダー…キック…！」

【RIDER KICK】

タキオン粒子が全体を駆け抜け、ホーンから右足に溜まる。ギンガに渾身の回し蹴りを放つ。

「はああああ！」

ガタツクの一撃は、見事ギンガにヒットした。

「ギン姉！」

スバルは叫ぶ。

「大丈夫だった？…って、お姉さん!？」

ガタツクのありがた迷惑だった…。

―その頃、未来のミッドチルダ―

『キイイーーーー！！』

「ノーヴェ、アインハルトさん、ルールー、ショッカーが来たよ！
！！」

「はい、行きます！」

「ええ！」

「アサルトシューター！！！！ ファイアッ！！！！」

「霸王流…『旋衝破』！！」

「リボルバースパイク！！」

”ヴィヴィオ”と呼ばれた少女達がショッカーの軍団と戦っていた。

「アクセルスマッシュ！」

「くそつ、キリがないな！」

「・・・あの『鳴海 壮吉』という方の言うとおり、動き始めたみたいですよ。・・・！？ ヴィヴィオ、危ない……」

「霸王…空破断！！！！（仮）」

”アインハルト”という少女の霸王空破断（仮）により、ヴィヴィオに襲い掛かってきた戦闘員を纏めて吹き飛ばした。

「ありがとう、アインハルトさん。」

「まだまだ来るぞ！油断するなよ、お前ら！」

『はい！』

——戻って現代のミッドチルダ

「おのれ、仮面ライダーと魔道士！だが、こうはいかん……この私が」

ザッ…

「そうはいかない、いくぞ！マモル君」

「はい、猛さん！！」

「なんだ？貴様らは！？」

2人は男の質問を聞いておらず。

「♪かゝいわれ巻き巻き、ねゝぎトロ巻き巻き、巻いて巻いて、手巻き寿司……」

「大丈V（2）！」

『とオっー！』

2人は変身ポーズをとることによって、ベルトの風車に風力を与えて、正義の戦士に変身した。その姿は、巨大な耳が特徴。また視覚的に鼻の穴がかなり大きく見える、彼らは『仮面ノリダー』と『ノリダーV2』である。

「！？ 聞いたことがあるぞ、貴様らも別世界から来た「イレギュラー」だな！？」

「ぶつとばすぞー！！」

「悪の動きはこの福耳がキャッチ！悪の匂いはこの鼻が嗅ぎ分ける！それが！仮面ノリダー・ブウーイ・ツー！」

男も姿を変える。ファイズの世界の怪人アークオルフェノクに・・・。

「やれっ！」

アークオルフェノクが指を弾くと、オーロラから怪人軍団が現れる。

ザッ…

「！？」（囲まれた……下手に動かない方がいいな）

「高くジャンプするんだ！」

（えっ？）

「ノリダーフェスティバルッ！」

「ぐあっ！」

「あ、あれはなんの攻撃だ！？」

「だが、あまりにもダサイぞ！」

「よし・・・これでー！」

仮面ノリダーV2は背中ギターから、刀を取り出した。

ズバッ！

「ギャッ！」

「後ろから狙ってきたつもりか？」

怪人達は全て倒されアークオルフェノクのみとなった。

「残るは……」

ガッ！

「お前だけだ！」

「おのれっ！」

ノリダー達はアークオルフェノクを追い詰めた。

「一気に決めるぞ、マモル君！」

「ええ！」

ノリダー達は同時にジャンプする。

『トオツ！ノリダー！ダブルキイイイック！！』

「ぐがあ！？」

アークオルフェノクは爆砕した。

「さて、後は彼らに任せるか。」

「はい……戻りましょう……」

2人のノリダーと名乗った男達は自分たちの世界に帰って行った

B・S、29 闇討ちと烈火とロード

シグナムとディエンドはゼストを追うため地上本部の廊下を疾駆していた。目指すはレジアス中将の部屋。

もうすぐでレジアスの部屋にたどり着く。

そう思ったとき、小さな少女が防壁を張り、行く手を塞いでいた。

彼女は古代ベルカのオリジナル融合騎、アギトである。

アギトはその小さな体を目一杯広げ、何人も通すまいと必死だった。

「ここから先はいかせねー！」

悲痛なる叫びがシグナムの足を止める。

「旦那は・・・旦那は・・・ただ昔の友達と話をしたただけなんだ
！！」

アギトは、ただ叫び続ける。

「旦那の邪魔をすんじゃないー！！」

『アタックライド！ブラスト！』

アギトの叫びは、しかしディエンドの攻撃によって防壁ごと碎かれた。

アギトに絶望の色が張り付く。

だが、ディエンドは防壁を砕くとディエンドライバーをジャグリングした。

「元よりそのつもりだよ」

ディエンドの言葉にアギトはビクツと震える。

「我々は彼に話を聞きに来たのだからな」

フツと微笑むシグナムに、アギトは見惚れていた。

地上本部の総司令、レジアスはある男と対面していた。

その男はゼスト・グランガイッ。

ルーテシアと行動を共にしていた男で、元は管理局の人間だったが、八年前のある事件で一度死に、スカリエッティによって蘇生させられた。

そして、事件の真実を確かめるべく、親友であつたレジアスの元に来ているのだ。

「レジアス、八年前……俺と、俺の部下たちを殺させたのはお前の指示で間違いないか？」

「ゼスト……」

ゼストとレジアス以外にその場に1人の女性がいた。

一人はレジアスの娘で秘書をしているオーリス・ゲイス。

——全員は、忍び寄る影に気付いていなかった。

（・・・さて、もうこの男も用済みね。要らないことを口走らない内に始末しないと）

影はレジアスの背後に回り込む。

レジアスは気付かない。

正面にたっているゼストも気付かない。

オーリスも死角になっていて確認できない。

絶好のポイント

絶好のチャンス

忍び寄る影は、指から不自然に伸びる長く鋭い爪を構えた。

（さようなら、レジアス中将）

心の中で別れを告げ、影はレジアスに襲い掛かろうとしたその時・

・。

【カメンライド…リュウガ！】

キン！

金属特有の衝突音が響いた。

影は右手の爪でディエンドの呼び出した”リュウガ”の斬撃を受け止めた。

「まさか……私のIS、偽りの仮面ライアーズ・マスクを見破られるなんてね……」

ドゥーエの姿が一瞬揺らぎ、顔の形が変わり、ピンク色の髪から金髪になり、管理局の制服からナンバーズの戦闘服になった。

ドゥーエのIS・偽りの仮面ライアーズ・マスクは自身の姿形を変える偽装能力である。

この能力で時空管理局でスパイ活動をしていたのだ。

「ふんっ！」

ドゥーエはリュウガを切り裂き、リュウガは消滅した。

「あなた……何者？」

突然現れた青い戦士。

「僕に質問する権利なんてない」

ズキユウウン！！

「がつ・・・！？」

『？！』

ディエンドはドゥーエの至近距離に飛び込み腹部を正確に撃ち抜いたその衝撃で後ろの本棚に体を強打し、崩れるように倒れ、意識を失った。

その光景にそこに居る者は誰もがおどろいた

「貴様等！ 何だ！ 許可もなく窓から突入するとは無礼にもほどがあるだろう！」

レジアスは怒鳴るがシグナムはレヴァンティンを向けた。

「黙れ、道を踏み外した愚かな男。貴様の全ては私の仲間が調べ済みだ。貴様がスカリエツティと裏で取引をしていたこともな」

「…言い訳はせん…。直接手を下した訳ではないが、間接的にそういう結果になった。だが、最後の忠告を無視したのはお前だゼスト！それに現状を見る！人手不足による犯罪の増加！衰退していく地上本部！地上を守る為には必要な犠牲だった！」

レジアスの言葉を聞いたディエンドが言う。

「滑稽だと思わないのかい？」

「何！？」

レジアスはディエンドの言葉に怒り気味に反応する。しかし、構わずディエンドは言う。

「だってそうだろう？友も、仲間も守れない人が、地上を、ましてや他人を守る？ははっ！滑稽を通り越して、哀れだよ。今のあなたは哀れな道化だ。自分の意志も貫き通せない…ね…。」

ディエンドにそう言われ、レジアスは何も言えなくなる。

「やはり……そうだったのか……」

ゼストは拳を握りしめた。

「……シグナムさん、その人を連れて出ようか？」

「……ああ」

シグナムはドゥーエを担ぎ、二人は部屋を出た。

「何だよ！今の音は！」

外に待機していたアギトが現れた。

「ダンナは……ダンナは無事なのか？」

「心配ない。今、レジアス中将与話をしている」

「そうなのか……？ よかった……」

「とりあえず僕達は話が終わるまで待機していようか」

しばらくするとゼストが部屋から出てきた。

「シグナム。頼みがあるアギトのロードになつてくれないか？」

『！？』

「なっ！ ダンナ！ 何言い出すんだよ！！」

「アギトの能力に一番ロードとして相性が良いのはあなたしかいない。頼む……」

ゼストは頭を下げてシグナムに頼んだ。

「……承知した。騎士としての頼みなら断れない」

「感謝する」

「な、何言つてんだよ！ あたしは旦那とずっといるんだ！！」

アギトの瞳から大粒の涙が流れるが、ゼストはアギトに触れた。

「アギト、お前は俺と一緒にいたら幸せになれない。だから、シグナムと一緒に行くんだ……頼む！」

ゼストのその言葉にアギトは頷いた。

「わかった。烈火の剣精アギトは、騎士シグナムと契約を交わし、騎士シグナムをロードとする」

アギトは恭しく俯き、シグナムに向かい契約を交わそうとした。

「・・・いいのか？」

シグナムはアギトに尋ねると、力強く頷いた。

「ああ、これは旦那の言葉じゃなくて、あたしの選んだこと、あたしの意志だ」

アギトの目に灯る力強い炎を垣間見たシグナムは、ひとつ息を吐いた。

「・・・そうか」

そう短く言うと、シグナムは右手を差し出した。

アギトは首を傾げた。

そんなアギトに、シグナムは優しい笑みを浮かべこう言った。

「ならばアギト、お前は私の家族だ。そんな契約などしなくても、手を取るだけでいい」

シグナムの言葉は、アギトが求めていた言葉で

アギトはシグナムの手を取った。

「ゼスト、あなたは どうする？」

「…… 作戦に参加させてくれないか？ …… 頼む」

「もちろん、私もお前と行く！ 私のロードになるに相応しい器か
見てやるんだ！！」

アギトはシグナムをジッと見る。

「構わない。行くぞ！」

「ああ！」

「さて、最後の 一仕事をしてくるかな・・・」

シグナム、ディエンド達はスカリエッティのアジトへ向かった。

B・S、30 玉座と聖王と大人モード

「玉座の間」

部屋には拘束されているヴィヴィオとモニター画面を見て高笑いしているクアットロがいただけだった。

「なーんだ、ブラスターシステムなんて名前が付いてるからどんなハイテクかと思ったら、馬鹿らしい。ねえ陛下、貴女ママはそうとうおバカさんですよ」

クアットロはヴィヴィオを撫でようとする。すると、扉が桜色と粒子砲が扉を貫く。出てきたのはなのはと『ブレストキャノン』の『セルバースト』を使って扉をぶっ放したバースの姿があった。ブラスターバーストは消える。

クアットロはいつも通りな感じで「いらっしやうい」と2人に言う。

「お待ちしてました」

「大規模騒乱罪の現行犯で、あなたを逮捕します。すぐに騒乱の停止と武装の解除を・・・」

バースとなのはは揃ってクアットロを睨みつける。

「こんなところまで無駄足御苦労さま。さて、各地で貴方たちのお仲間は大変なことになってますよ」

すると、フォワードたちやフェイト、はやて、ヴィータ、仮面ライ

ダー（サブ）達の戦闘映像がモニターに映し出される。

「仲間の危機と自分の子どものピンチにも顔色一つ変えずにお仕事ですか。いいですね。その悪魔染みた正義感。それと、異世界の英雄さん・・・あなたはこの世界で何を望むのかしら、何故戦うの？正義？名声？それともただの気まぐれなのかしら？」

「・・・俺は、正義の味方でもなければ、配達屋でも、石でもない・・・目の前に敵が現れたなら・・・撃つまでだ！」

言いながらバースバスターを構えるバース。

「慎太郎さん……！」

そして、バースはバースバスターを、なのははアクセルシューターをクアットロに放つ。しかし、実態じゃなかったのか、クアットロの幻影らしきものは消える。

「でもー、これでもまだ平然としていられますう？」

クアットロがそう言うのと玉座に電流が流れてヴィヴィオが苦しみます。

「ヴィヴィオ!!」

「貴様ツ！」

いつまでも電流がヴィヴィオの身体に流れて、2人が助けに行こう

とすると虹色の魔力光に吹き飛ばされてしまう。

「良いこと教えてあげる。あのときバースだっけ？あなたが相殺したデイエチの砲、たとえそれが直撃しても陛下は死なない。それが古代ベルカの王族が持つ固有スキル『聖王の鎧』。レリックとの融合を経てその子は力を完全に取り戻す。古代ベルカの王族は、自らの身体を作り変え究極の生態兵器・レリックウェポンとしての力を」

「なのはマア！」

「ヴィヴィオ！」

バースはヴィヴィオの方に駆けよつとするが、虹色の魔力光に吹き飛ばされる。

「くっ！」

「甘いわね！」

フィールドに、入ることは許されなくなった

「すぐに完成しますよ。私たちの王が、ゆりかごの力を、無限の力を受けて究極の戦士を此処に」

ヴィヴィオの背後に現れたアंकがヴィヴィオの体内へ無理やりレリックを押し込んだ。そしてヴィヴィオが悲鳴を上げる。

「あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああああああ
あああっ！」

「ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオの悲鳴が上がる。そしてヴィヴィオの身体が恐るべきスピードで変化していく。肉体は異常な速度で発達し、真っ黒なのはと同じようなバリジャケットがヴィヴィオの身体に纏われる。漆黒の光が消えるとそこにいたのはヴィヴィオではなく、聖王ヴィヴィオだった。

「あなたなんか……ママじゃない！」

「ヴィヴィオ、違うよ。私だよ！なのはママだよ！」

「……………」

聖王ヴィヴィオはなのはを拒絶するような表情になる。

「ヴィヴィオのママを……返して!!」

白い古代ベルカ式の魔方陣を展開すると、虹色の魔力光が突風のように吹く。するとモニターが現れてクアットロは不敵な笑みを浮かべる。

「さあ、親子で仲良く殺し合いを……」

クアットロの言葉なんか聞かず、バースは武器を構える。

「下がれ、なのは……お前たちに殺し合いなんかさせない！」

「慎太郎さん!？」

バースがバースバスターを撃つが、全て弾かれる。

「ママを…返して!」

なのはと似た収束の砲撃が放たれる。間一髪で避けるバースだが、明らかに反応が悪かった。かすってその場に倒れる。

「ヴィヴィオちゃん…やめるんだ……!!」

「私の名を…気安く呼ぶな!」

「ぐっ……」

聖王ヴィヴィオは構えた。その右腕に宿る莫大なエネルギー。直感でバースは感じた。あれはまずいと。あれだけは喰らってはいけないと

「あっちに行け!」

「ぐっ……おおおおおおおおあっ!」

「慎太郎さん!？」

すると、聖王ヴィヴィオの手に虹色の魔力スフィアが生成されるとバースに放たれ、衝撃によってバースはゆりかごの外へ投げ出され

B・S、31 心と乱入とストライカー（前書き）

特別出演

B・S、31 心と乱入とストライカー

聖王の間

ヴィヴィオの足元から灰色のオーラが部屋を覆い尽くす。

「もう……来ないで……！」

ヴィヴィオはなのはに静かに告げる。なのはの足元にミッドチルダ式の魔方陣が展開される。

「わかったの私。もう、ずっと昔の人のコピーで……なのはマ……なのはさんも……フェイトさんも……本当のママじゃ、ないんだよね。この船を飛ばすためのただの力ギで、玉座を守る生きてる兵器……！」

「ちがうよ……ヴィヴィオ……！」

「ホントのママなんて、元から居ないの。守ってくれて、魔法と戦闘のデータ収集をさせてくれる人……探してただけ！」

ヴィヴィオは涙を流して自身の気持ちをなのはに伝える。

「違うよ！兵器なんかじゃない！」

「違わないよ！悲しいのも、痛いのも全部偽物の……作りもの。私は……！この世界に居ちゃいけない子なんだよ！」

なのはは首を横に振ってヴィヴィオの言葉を否定する。

「違うよ。生まれ方は違っても、今のヴィヴィオは…そうやって泣いてるヴィヴィオは偽物でも作りものでもない！」

そうだ！

「誰！？」

『フラッシュインパクト！！』

～最深部～

クアットロはピアノ型のコンソールパネルを操作している。

「どの子も使えない子ね……」

するとメガネを外して、髪止めも外したその時、

——ドオオオン！

「壁抜き！？ま、まさか、そんなばかげたことが……！」

クアットロはモニターで何者かが桜色の光を纏った拳でがゆりかご内部の壁を貫いて聖王の間まで壁抜きをし、部屋に到達したのを見た。

再び、戻って聖王の間

「シャルル、ここか？」

『うん、間違いないよ。』レリック”の反応がする・・・僕にはわかるからね。』

コンバットスーツを纏った何者かが・・・聖王の間に現れたのだった。念話で誰かとはなしているようだ・・・。

「・・・あなた、誰！？」

「！？ 母さ・・・違った。確か”エースオブエース”だったな・・・。」

コンバットスーツを纏った何者かは「しかし、若いなあ・・・。」と言いつつ、ヴィヴィオの方へ人差し指を指した。

「・・・まあ、いいか。さて、お前の”レリック”貰うぞ！」

「.....あなたが誰なのか知らない・・・けど！」

聖王ヴィヴィオが自身の意志と反してコンバットスーツを纏った何

者かに攻撃をする。

「チッ！やるな！」

ヴィヴィオはステップを取りながらコンバットスーツを纏った何者かに次の攻撃の拳を繰り出すが、何者かはそれをガードする。

それから何度もヴィヴィオは拳を繰り出すが、何者かはそれを全てガードする。

ヴィヴィオは何度か拳を繰り出し、さらにはローキックを繰り出すが、何者かはそれを避けた。そんな中何者かは……

（まっすぐに技、きつとまっすぐに心だ。だけどこいつは、俺が戦う相手じゃない……。）

ヴィヴィオの拳を避け、何者かはヴィヴィオに掌底を食らわせるとヴィヴィオは後ろへと吹き飛ぶと、痛みで苦しそうにするがヴィヴィオは……

「わたし、ダメなの…もう止められない！だから私から離れて！」

ヴィヴィオは泣きながら喋る。何者かはヴィヴィオの腕をつかみ、投げ技を使い地面に叩きつける。だが、ヴィヴィオは上手く受身を取り、蹴りを繰り出す。

「自分で止められないなら、俺が止めてやる！！」

そう言う何者かは、携帯電話のような物を取り出し、ボタンを押す、

《エクシードモード》

音声を発したあと、何者かは何かのツールを構える。

「セットアップー!」

2つのツールを接続。

《エクシード・セットアップー!》

何者かはその叫びと共に、虹色のフィンに包まれ、光を発する。

「!？」

眩い光に、ヴィヴィオは目を塞いだ。

それほどの、極光。

「あれは!？」

装甲が何者かの体へと纏われ、直視できないほどの輝く光を浴び—
——姿を変える

光り輝く虹色の装甲と眼の戦士がここに降臨した。

「はああああああつ!」

ヴィヴィオが攻撃を放つが、何者かは右手で防ぎ、ヴィヴィオを殴った。

「ヘッ、もうおわりか？」

何者かはフィンが付いたレッグに力を流す。

「な、何！？」

何者かは突撃しながらヴィヴィオに拳を食らわす。ヴィヴィオはそれを何とか防ぐが、何者かは追撃にもう一度パンチを繰り出す。ヴィヴィオは顔面に喰らってしまった。何者かはなおも攻撃の手を緩めなかった。ヴィヴィオは何とか攻撃を防いだり、避けたりした。

「はあっ！」

ヴィヴィオは何者かの懐に入り込み、強力なパンチを繰り出し、何者かはそれを受け、少し動揺した。さらにヴィヴィオは接近し何度かパンチを繰り出すが、何者かはそれを防ぐ。そして隙について、何度かヴィヴィオにパンチを繰り出す。だが、ヴィヴィオはカウンターで何者かの顔面にヒット・・・

「甘いッ！」

・・・しておらず、それは”フェイクシルエット”のようなものだった・・・そして、ヴィヴィオの息は上がっていた。彼女の疲れはよっぽど激しい戦闘がおこなわれていたことを物語っている。

「・・・全力全開でいくぜ！」

携帯電話型に再び、ツールを接続、2つのツールのシステムが起動

し始めた。

やがて、何者の姿が光り輝き、銀、蒼、虹色の粒子を纏った光の矢へと姿を変える。

《Drive Ignition! Accelerate Charge System Driver!》

何者かは全身にエネルギーを纏い上空へ飛び上がると、同時に叫ぶ。

「A・C・S・ドライバアア!」

——ドオオオン!

：周囲のヴィヴィオが放ったスフィアを破壊しつつ加速! 攻性フィールド生成によるフレームを全展開し、突撃! 目の前のヴィヴィオは防御出来ず・・・激しい光が、聖王の間を突き刺した。

「2つか・・・、あと——つだな?」

そして、ヴィヴィオの体から排出される”2つのレリック”を何者かが掴むと粒子化し・・・腰のツールに吸い込まれる・・・そして、倒れているヴィヴィオの許に駆け寄ろうとする。

「おい。大丈夫か？」

「来ないで！一人で立てるから……！」

ヴィヴィオが立ちあがると、一目散になのはの下へ向かう。

「あなたは一体何者なの……今は名乗れない！」……！？」

「時間だ。その子を大切にしろよ……『お母さん』……！」

その時、突然現れた”7色のカーテン”のような歪みに飛び込み・
・この場から去っていった。

「なんだか不思議な人だったな……。」

そう言ってなのはは、はやて達と合流すべく、ゆりかごの外へと向かった。

B・S、32 ゼロとナイトとかーなりつよい！

「これでゆりかごによる地上攻撃は阻止された」

モニタでゆりかご内の一部始終を見ていたスカリエッティにフェイトは、皮肉めいた言葉を吐く。

しかし、スカリエッティは別にどうとも思っていないのか、フンと鼻を鳴らした。

「まだまだ甘いね」

「・・・なんですって？」

シャツハが眉を潜め睨む。

スカリエッティは大仰に肩を竦めヤレヤレと首を横に振り、再びあのいやらしい笑みを浮かべた。

「動力炉破壊、起動キー喪失、その程度でゆりかごが止まると思っているのかね？」

その言葉にギクリとしたフェイトとシャツハは、様々な場面の映るモニタの中でゆりかごを外から映しているモニタを探した。

そして見つけだし、驚愕する。

「ゆりかごが上昇を止めない!？」

「そんな馬鹿な!？」

焦るフェイトとシャツハとキバーラだった。

「確かに動力炉を破壊すれば多少上昇速度は緩めることはできるだろう。けど、根本は違う。そもそも君達はゆりかごという存在を理解していない」

スカリエッティはケタケタと笑いフェイト達を嘲る。

「ゆりかごとは、『あれ自体がデバイス』であり、意思をもつ『個』でもある。ゆりかごという巨大なデバイスを起動させるには膨大な魔力が必要になる。そしてそれを可能にしたのは天空に浮く二つの月によるものだ。つまり、ゆりかごは起動と同時に常に月から無尽蔵の魔力を供給される無限動力を手に入れている。動力炉はその補助にすぎない」

「・・・ゆりかごを沈黙させるには、ゆりかごそのものを破壊しないとダメってこと?」

スカリエッティの言葉に続くように語るフェイトは、醒めたような表情で淡々と事実を口にする。

それに対し、キバーラとシャツハは顔を青ざめさせた。

「じゃ、じゃあ・・・今までしてきた事は無駄なんですか・・・」

キバーラの眩きに、フェイトは首を横に振った。

「大丈夫。ゆりかご到達地点前にクロノに今出せるだけの次元航行艦船と僚艦を配置させてアルカンシエルの発射準備させているから。ヴィータのおかげで上昇速度は減速した。それはこちらに対処の時間を与える、とても重要な事。」

つまり、作戦通り、ということだ。

フェイトのその言葉を聞いたキバーラとシャツハは、ホッと息をついた。

一方、”仮面ライダーナイト”こと、蓮は『ゼロライナー』に乗っていた。

「何で俺をこの”列車”に乗せた？」

「……………ええと、話は後で、」

数時間前、

キイイイイン

突如として頭に響くような音がどこからか鳴りだした。

「……………何だ！耳鳴り……………？」

耳を塞ぎたいような大きさの音にもかかわらず、蓮はまるで気にしていないかのようにしている。

「まさか……………俺だけに聞こえているのか？」

「その通りだ」

すぐ側のショーウィンドウに男の姿が映る。

しかし、周りに男はいない。

「まずは……………思い出せ」

男は1つの箱のような物を蓮に見せる。

すると蓮の頭にある情景が浮かびあがる。

恋人を救うため、紺色の蝙蝠の騎士に変身し、全てのライダーに勝利する蓮

「っ……………これは……………思い出した、これは俺が経験したことだ、”ライダーバトル”をやるうと言うのか！？」

蓮はミラーワールドの住人、神崎士郎を睨み付ける。

「安心しろ、ライダーバトルは行わない……………しかし、ライダーにな

ってもらわなければならない事態になった」

「どういうことだ？」

神崎士郎は言う

「“ミッドチルダ”と呼ばれる世界の秩序が崩れた。このままではこの世界も崩壊する」

「なんだと!？」

蓮の言葉に神崎士郎は問う。

「そうならないためにも仮面ライダーになってくれないか？」

「……決まっている。今、ある平和を壊させはしない」

蓮がナイトのデッキを握る。

戻ってゼロライナー、

「外に見えるのは。本当に荒れ地……こんな光景滅多に見られないな・
・不思議だ。」

蓮は『ゼロライナー』の外を見ながら、浸っていた。

ちなみに、ゼロノスこと”侑斗”は操縦中なのでここにはいない。

「乗せてくれたことには感謝する……お前たちも歪みの原因と戦う

のか？」

蓮は、真剣な顔つきで尋ねる。

「んー……何でだろう？」

「……。」

「ああ、でも侑斗が言うには……。」

「どこに移動するんだ？」

「戦場のど真ん中って……。」

「なんだと!？」

クロノの目の前にキューブ型の物体が現れる。

そして多数のモニタが展開されており、それに映っている人物達は、各艦の艦長達であり、皆一様に緊張していた。

真剣な面持ちで見つめるクロノの手には、鍵が握られていた。

・・・ゴクリ

だれかが唾を飲み込む音がした。

それが聞こえるほど静寂が支配している中、クロノは鍵をきつく握り締める。

「艦長、目標上昇を目視で確認。射程範囲に入ります」

オペレーターが若干上擦った声で報告する。
クロノはそれに頷くと、他の艦長達も頷く。

「ベルカの呪われた歴史が、今ひとつ終わりを告げる」

クロノは静かに喋る。

「この一撃の先に、輝かしい未来があらんことを」

艦長全員が手に持つ鍵をキューブに差し込み

「アルカンシエル、発射！」

鍵を捻った。そして、

アルカンシエルが発射される。火力をそのまま砲一ヶ所に集結させ、放たれたエネルギーの渦は、ゆりかごの中心部に直撃する、

B・S、33 ブースターとカードとファイナルアタックライド！

宇宙空間

「艦隊布陣、転回！」

「攻撃準備、完了！」

「なのは、フェイト、仮面ライダー達、脱出急いでくれ」

「ダメです！魔力結合できません！通信も！」

「じゃあない、歩いて脱出や」

「でも、なのはさんが」

「ハアハアハア・・・大丈夫、歩けるよ」

「ママ・・・」

「乗員は、所定の位置に移動してください。・・・繰り返しです。乗員は、所定の位置に移動してください。これより、破損内壁の応急処置を開始します。破損内壁、および非常隔壁から離れてください」

「出口へ急ぐんや！」

しかし、通路は塞がれてしまう……が、

『ドリルアーム』

塞がれた通路を微塵に砕く！

「慎太郎さん、無事だったんですね！？」

「ああ、アクセルに助けてもらった。」

その頃

「この子の護送を」

「はい、シスター」

「私は、フェイト執務官を助けに」

「シャッハ！その負傷じゃ無理だよ！僕が行く」

「ですが……」

「待ってください」

「えっ」

「こちらは自力で脱出できます。それより、この崩落を止めないと・
・ポットの中の人達まだ生きてるかもしれないんです。道連れに
させるわけにはいかない」

「ですが」

「止めます！シャーリー！」

「はい、フェイトさん！」

「あ、あれは？ヴァイス陸曹！」

「いいか？船の中、奥に進むほど強力なAMF空間だそうだ。ウィングロードが届く距離までくつつける。そいつで突っ込んで隊長達を拾って来い！」

「はい！」

「行くぜ、ストームレイダー！」

「あっ」

「前に言ったな。俺はエースでも達人でもねえ。身内が巻き込まれた事故にびびって取り返しのつかねえミスショットもした。死にたくれえ情けねえ思いもした。それでもよ、無鉄砲でバカつたれな後輩の道を作ってやるくらいのは出来らあな」

入り口が開いた

「あっ」

「よし、行け！」

「あ、はい！」

「ウイングロード！」

「GO！」

「小型航空機、地上に降下しています！」

「空戦魔導士、誰かいなか？」

「該当地点で今動ける人は・・・あつ、います！仮面ライダーアクセル、照井竜さんです！」

《アクセル！アップグレード！！》

「ここは俺に、任せてもらおう！」

《ブースター！！！！》

エンジン音が鳴り響くと、それは輝くように煌めく装甲と、全身にブースターを装備したようなその姿。仮面ライダーアクセルブースターがここに降臨した。

「はい！あれ？竜さんそのお姿は？」

「後で話そう。現在位置で迎撃する」

「はい！」

「気鋭48、まだ増える」

背中ユニットを吹かし、気鋭に向かって突っ込む。

「竜君がまた飛んでる、わたし聞いてない。」

啞然とする亜樹子。

「…3、2、1。来た！」

《メタル！マキシマムドライブ！！》

「おおおおおッ！！」

「き、気鋭50、一瞬で全機撃破」

「速いな、受けに回ったら止められない…ならば！！」

《ルナ！マキシマムドライブ！！》

「距離450、第二編隊来ます！」

マキシマムによる、伸縮自在のエンジンブレードで攪乱する。

《エンジン！マキシマムドライブ！！》

エンジンメモリに差し替え、エンジンブレードを構えなおし…ブースターを吹かしながら突撃する。

「…叩き潰すまでだ！！」

エンジンメモリ・改による、強力なマキシマムドライブで気鋭を破

壊する。

「エリオ君、フリード。地上の支援は私とヴォルテールが」

「うん」

「ケリュケオン、エリオ君とフリードにスピードブーストフルドライブ！」

「ハアハアハア・・・」

「無茶です、ヴィータ三尉」

「うるせえ！・・・ん？」

スバルとティアナが現れ、メンバーが合流した。

「なのはさんと八神部隊長、ヴィータ副隊長、」ご無事で」

「お待たせしました」

「うん」

「スカリエッティ本拠地振動停止！突入隊、及びライトニング1、

ライトニング3 脱出確認！巨大船内部に突入した二人、第一隊から第四隊まで退避。最深部の機動六課メンバー全員脱出確認！」

「ふう・・・さて、ここからはこっちの仕事だ！」

「はい！」

艦隊砲撃がゆりかごに与える衝撃はあまりにもすさまじかった。割れんばかりの轟音と激しい振動が起こる。だが・・・。

『何！？』

さすがに異変に気づき、ざわつきだすのは達だったが、突如展開されたモニターによって事態は緊迫する。

「砲撃がきかない！！？」

この一言で、一気に空気が変わった。

先程までの和やかなものから、ピンと張り詰めたそれになり、一同絶句していた。

そんな中、くくくと笑う声が聞こえる。

耳障りな、不快な気分になる笑い声が静寂の中鮮明に聞こえた。

「きははははは」

皆笑い声のする方を見た。

それは、スカリエッツィだった。

[illegible]

とうとう大声で笑いだしたスカリエツティは言った。

「だから言っただろう！計画通りだと！！」

スカリエツティの言葉に場がざわつくと、クスクスと笑い声が聞こえてきた。

それはクアットロだった。

「あなた達、私達が地上本部を襲撃したとき、まさか戦力誇示やパフォーマンスをしに来ただけと思ってたの？」

クアットロも笑みを浮かべている。

だが、なのは達は目の前の現実混乱しどういう意味か理解できなかった。

「……どういことですか、なのはさん？」

スバルがなのはを見る。

なのは蒼白だった。

震える唇で、絶望の未来を紡ぐ。

「・・・ゆりかごは止められない・・・」

スバルがなのはの口から最も聞きたくない言葉だった。

なのはの心が折れ、負けを認めてしまった言葉。

「慎太郎さんのブレストキャノンのセルバーストでなんとかできないの？」

フェイトが、無言で小さくなるゆりかごを見つめるシャーリーに聞いた。

フェイトの期待を皆感じ、一斉にシャーリーを見た。

しかし、彼女から返ってきた言葉は残酷なものだった。

「いいえ、”バースのマニュアル”のコピーを慎太郎さんから譲ってもらって調べたのですが・・・ゆりかごは内包する魔力に質量、その他もろもろと厄介なの。ゆりかごを完全破壊できるほどの出力は無いんです、現在の慎太郎さん達のライダーシステムでは・・・」

シャーリーの言葉に、愕然とするフェイト。

そして一縷の望みが消えてしまった事への絶望感が場を支配する。

そんななのは達を嘲笑うようにスカリエッツィは甲高い笑い声を發した。

「キハハハハッ！この私が全てを把握して作戦を立てなかったと本当に思っていなかったのか！？だとしたら私も随分軽く見られたものだ――！」

スカリエッツィはゆりかごを主軸としながらも、ゆりかごの戦力を過信することなく慎重に計画を練っていた。だから、スカリエッツィは言ったのだ。

「君達の勝利を確信した顔が絶望に染まる！私はこれが見たかった――！」

狂ったような笑いを止めないスカリエッツィ。

「言いたいことは、それだけかい？」

なのはやフェイト達はディエンドに違和感を感じた。

そしてそれをいち早く察知し、ディエンドに対し聞いたのがはやてだった。

「・・・大樹さん、あんたなんでそんなに落ち着いとるんや？」

はやては真剣だった。

よくよく思い出すと、ディエンドは今の今までこの場所で会話に参加していただろうか？

「僕はスカリエッツィが何か切り札を残し、こうなることはわかっていたからね」

「――なっ！？」

ディエンドの淡々と話す言葉に、はやては絶句した。

「・・・・・・・・・・はっ、気でも狂ったかい？・・・・君は私を馬鹿にしているのかね？」

スカリエツティは先程までのヘラヘラした表情から、不機嫌なものへと変わっていく。

「ここの”技術”では、アルカンシエルを超える破壊兵器は存在しない。それに、過去に遡ってもゆりかご程の質量を持った兵器を完全に破壊できる技術も、魔法も存在しない・・・・みたいだね？」

そして、いつの間にかディエンドの周囲にはなのはやフェイト、はやて達がいた。

「・・・・ゆりかごをなんとかする手があるんやな？」

はやての質問に、ディエンドは頷く。

「それで？一体どんな方法なの？」

なのはが質問すると、ディエンドはホルダーから何かを取り出すと言った。

「『ファイナルアタックライド』さ・・・・！」

そう言って、ディエンドは3枚のカードをみせびらかす。

B・S、34 最終決戦と超変身とファイナルカメンライド！

「よし、皆、出し惜しみせずに行くよ。」

『おう！！』

ディエンドはケータッチを取り出した。そして、順番に押していく。

『アルティメット、エクシード、サバイブ、キング、ハイパー、ライジング、エクストリーム、ディ。ファイナルカメンライド、ディエンド』

ディエンドはコンプリートフォームに、クウガはアルティメットフォーム（ブラックアイ）に、後から来たギルスはエクシードギルスに、ナイトはサバイブに、ギャレンはキングフォームに（ブレイドのように融合係数が高くないため、13体同時融合ではなく、カテゴリーKとのみ融合している本来の姿となっている。そのため、アソッドクレストはなく、ラウスカードはギルドラウスカードに進化しておらず、キングラウザーはギャレンラウザーを大型に強化したものとなっている。）、ガタツクはハイパーフォーム、イクサはライジングイクサへと変わる・・・そして、アクセルとバーズは・・・。

「これはどういうことだ！？」

「竜君がWになってる！？ 私聞いてない？！」

モニターで見ていた亜樹子が仮面ライダーWになった彼の姿に驚く。彼が仮面ライダーアクセルブースターから仮面ライダーWサイクロ

ンアクセルエクストリームに変わっていた！

「……WのCAX、ギャレンのキングフォーム、ガタツクのハイパーフォーム。今回だけのスペシャルサービスさ！！」

ディエンド・コンプリートフォームはディエンドライバーをジャグリングしながら、そう言う。

「凄いな！？」

「そう言う、お前も……それは重くないのか？」

一方、バースも大量のセルメダル無しでバース・ディに強化された。

「俺に質問しないでくれ。」

「俺の真似をするな。」

「私だけ……ない。」

「夏海ちゃんはいいいよ、俺なんか”ブラックアイ”だよ？」

4人があーだこーだ言っている横で、

「来い！デネブ！」「おう！」「」

『ベガフォーム』

ゼロノスもベガフォームに変わる。

「最初に言っておく！胸の顔は「今はそんな事どうだって・・・」
やっぱり飾りだあ！！」

「はいはい、御喋りはそこまで！みんないくよ！！」

デイエンドと8人のライダー（サブ）の最強フォーム。今ここに、
11人の仮面ライダー達が登場した。

『慎太郎さん！？』

「六課のみんな、よく頑張った！後は俺たち仮面ライダーに任せろ
！！」

バースはそう言つと他のライダー達と共に一斉にゆりかごに向けて
飛び立つ。

深緑の角と身体、真紅の瞳を持った戦士『エクシードギルス』。

「…ウオアアアアア！！」

奇声にも似た雄叫びを上げ、エクシードギルスは両腕に仕込まれた
金色の鉤爪を伸ばした。

「オアアアアアッ！！」

再び奇声を発したエクシードギルスは、ゆりかごに襲い掛かる。身
の軽いエクシードギルスはアクロバティックな戦い方が得意な戦士
だ。

ギルスクロウ
宙を舞うと、掲げた鉤爪を振り下ろし、ゆりかごから射出されたガ
ジェットを切り刻む。

「ハイパーキック！」

ガタツクHFも続いて、大型を次々叩き潰す！

そして、ギャレン・キングフォームはキンググラウザー（銃）を手
にカードをラウズさせていく。

「ダイヤ10、ジャック、クイーン、キング、エース」

『ロイヤルストレートフラッシュ』

「ザアヨおおおおおおおゴおおおおおっ！」

並ぶ五枚のカードに向かって引金を引き一発の弾を潜らせ、ゆり
かごを撃つ。それは彼が今まで放った中で最強の一撃だった。

―ドオオオオオオオンッ！―

激しい黄金色の光が沸き起こる。ゆりかごの一部の外壁に亀裂が
入り崩壊した。

「壊れなさい！」

イクサカリバー・ソードモードをかざし、イクサベルトにカリバー
フエッスルをセットする。

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・アツ・プ』

ライジングイクサは勢いよく駆け抜けて、エネルギーチャージしたイクサカリバーを振りかざし、まだ飛び出してくるガジェットに切りかかる。

続けて、イクサライザーのグリップから青色のフェッスル”ライザーフェッスル”を取り外しイクサベルトに読み込む。

最大稼働したエネルギーをイクサライザーへと集中させ、強力なエネルギー波を発射する。

「はあっ！」

威力と共に反動も極めて強いが、それを利用して跳び蹴りでゆりかごの装甲を剥してゆく。

【ブラストベント】

ナイトSVがブラストベントを使用し、ダークトルネードでガジェット達を錯乱する。

【FINAL VENT】

ファイナルベントによりダークレイダーがバイクに変化し、そのままゆりかごに突撃し、爆発させた。

「スゴイ!？」

「主砲はおるか、アルカンシェルが通用しなかったゆりかごの装甲

をいとも簡単に・・・。」

『驚くのはまだ早いよ！ゆりかごから何かが出てくる！』

そんな中、何やらスカリエッティが急に笑い始めた。

「ク…クク…ふふ、ふ…」

「何が可笑しい？」

「ククク…ふふ、ふははははは、君たちは本当に分かってないみたいだな。どうしてあの状況で我々がこうしてお前たちに立ちふさがったのか。」

彼が笑った瞬間、地面から真っ赤に燃え上がった巨大な仮面ライダーが現れた。

「こ、こいつは一体？」

「なんなの～！私、聞いてない！」

「さあ、楽しもうか。仮面ライダーども。」

今、究極の戦いが始まるのだった。

B・S、35 コアとエクストリームとファイナルスコーピオン！

「…なんだこいつは！？」

駆けつけてきたツカサ達だったが、ここにいる全員は何かを感じ取った。

「く、うくつ、こいつ」

ユウスケが何かに気がついた瞬間、大樹が答えた。

「まさか…Wとオーズが倒したはずの…そうか！ショッカーの技術を使って…」

ドオオオン！！

「グア！」

…何かのこつげきを喰らう。

「さて、どうするアクセル？」

「俺に質問するな、いくぞみんな……！」

『フルチャージ!』

ゼロノス・ベガフォームはゼロガッシャーをボウガンにしてグランドストライクを、放ち、しつこくゆりかごから出てくるガジェットを狙い爆発させる。

「はあああ!」

その声にまずキバーラがソニックスタップを放ち、ゼロノスが倒し損ねたガジェットを叩く。

「夏メロン!受け取りたまえ!」

『アタックライド!デンガッシャー!』

「夏海ですっ!?あれ、これって……まさか!」

「正解!」

『ファイナルフォームライド!ク・ク・ク・クウガ!』

「痛みは一瞬だ!」

アルティメットゴウラムになったアルティメットクウガに、

「や、止めて……」

『ファイナルアタックライド!デ・デ・デ・デンオウ!』

するとキバーラの持っているデンガッシャーがひとりでアルティ

メットゴウラムに迫る、

「ひいいいっ！」

見事にアルティメットゴウラムの尻に刺さってしまった。

「やってしまいたまえ！」

「ハイツ、ふんにゆうううううう！！！」

（……比奈ちゃんか？）

バース・デイの突っ込みをよそに

「うあああ！！！」

ぶんぶんと振り回すたびにガジェットとアルティメットゴウラム（
ユウスケ）にダメージが溜まっていき

「ぎゃあああ！！！」

最後の一撃でゆりかごに突き刺さりバリアのシステムを破壊。バリ
アシステムがあつた場所にクウガが倒れていた。

「俺ってこんなもったいなく……」

一方、その頃、

「俺の友人のおばあちゃんは言っていた。不味い飯屋と悪が栄えた

試しは無いと。」

ガタツクHFはそう言い、パーフェクトゼクターを構える。

僅かな隙を見つけたW（CAX）はマキシマムドライブを発動する。

《プリズム！マキシマムドライブ！》

W（CAX）は真っ赤に燃え上がった巨大な仮面ライダーの爆撃をビッカーシールドで防ぎながらビッカーソードの柄を強く握りしめる。

そして、真っ赤に燃え上がった巨大な仮面ライダーの間合いに入った瞬間、ビッカーシールドからビッカーソードを抜き、全身全霊で振り下ろす。

「おおおおおおあああ！！！！」

翠に輝く刃が真っ赤に燃え上がった巨大な仮面ライダーを肩から斜めに斬る。

W（CAX）の手には巨大な仮面ライダーを斬った手応えがあった。
・。
・。

だが、巨大な仮面ライダーはそれを受け止めた。

続いて、巨大な仮面ライダーの手がかかって来たガタツクHFの首を掴む。

ガシッ！

『ナメルナア！』

「「がつー！！」」

その衝撃で吹き飛び、W（CAX）とガタツクHFは壁に激突する。

「マエノ我ダトオモウナヨ。ブルアアアアアアアアアアア！」

巨大な仮面ライダーは口から赤いレーザーを放った。W（CAX）はそれを避けたが、今度は巨大な仮面ライダーは踏み潰そうと脚を伸ばし…

「グアッ！？」

倒れていたクウガが攻撃を喰らってしまった。

『又オオオオオオオオッ！！』

巨大な仮面ライダーは雄たけびをあげる。

「あの化け物と、どうやって戦う…ん？」

そんな時、ビートルフォンが鳴る。

ピッ！

『やあ！』

「フィリップ！？」

『…ようやく繋がったよ、みんな大丈夫？』

『大丈夫な訳あるか！！』

彼を知っている、仮面ライダー一同が叫ぶ。

『セルバースト！』

―ドゥシュウウウウツ―

「今、巨大な仮面ライダーと戦ってるんだが…あれは何だ？」

「ああ、それは「仮面ライダーコア」だね？」

『…やつに勝つには”バースのファイナルフォームライド”しかない。』

「バースのファイナルフォームライド？……試すか！」

『ファイナルフォームライド！バ・バ・バ・バース！！』

「痛みは一瞬だ！」

ディエンド・コンプリートフォームがディエンドライバーを撃つと、バースの体がありえない方向に変形し、CLAWS・サソリに似たバース・コーピオンに変形する。

『何だこれは！？』

「話してる場合じゃないよ！行こう！」

『応！！』

ディエンド・コンプリートフォームが言うと、ライダー達がそれぞれ散開する。

『グオオオオオオオオオオオオ』

ゴッ！

《メタル！マキシマムドライブ！！》

『ガアアアアアアアアアア』

「きかな・・・」

『何！？』

W（CAX）はメタルメモリでボディを強化、コアの攻撃を片手で受け止める。

「おおっ！」

コア『グアアアアアア！！』

そのまま、投げ飛ばす。

『…ありえないわ…。』

『……あのデカブツを投げ飛ばすなんて……。』

『仮面ライダーってのは何でもありますね……。』

モニター越しでフォワードがつぶやく。

「……俺に質問をするな。」

答える言葉が見つからず、いつもの台詞を言うW（CAX）

「そろそろ、決めるよ。」

仮面ライダーコアはぶっ飛ばされ、W（CAX）はゆっくりと歩き

ながら両手でエクストリームメモリに手を添える。

「いくぞ、ディエンド、バース！」

『ああ！』

《エクストリーム！マキシマムドライブ！！》

W（CAX）はエクストリームメモリを閉じ、再び左右に開くと、エクストリームメモリの中心にある小さな風車、『タービン・エクスタイフーン』が高速回転すると、巨大なVレーザーを発射し、コアの動きを止める。

『ファイナルアタックライド！ディ・ディ・ディ・ディエンド！バ・バ・バ・バース！』

バース・コーピオンが尻尾のドリルの先端から七色の光線を乱射、ディエンドは強化ディメンションシユートを放つ。

ドガアアアアンツ！

『オ、オノレエー！！』

W（CAX）はフィリップから預かった、T2エクストリームメモ

リ・改をエンジンブレードに込めバース・コピーオンに跨る――

《エクストリーム！マキシマムドライブ！！》

「振り切るぞ！バース！！」

「ああ、しっかり捕まれアクセル！！他の奴はゆりかごから離れろ！！」

ブオンツ！

「おおおおおおああああああ！！！！！！」

W（CAX）とバース・コピーオン以外の仮面ライダー達がゆりかごから離れると同時に彼らが、

ギャリリリリリリリリ…

「…絶望が…」

エンジンブレードを！

「お前等のゴールだ…！！」

振り切った。

その瞬間！ゆりかごに『斬り口』が走る！

ズバツ！

ゆりかごだけではなく、仮面ライダーコアまで…いや、『世界』が斜めに切れて、断裂している！

『世界』の法則が働き、『世界』は元に戻るが、

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

ドオオオオオオオオオオ……

「…威力ありすぎだね。空間断裂っていうのかな？」

そのまま聖王のゆりかごと仮面ライダーコアが爆裂した。

B・S、36 別れとプロトバースと約束の空へ

―…探してたのは勇気の意味―

―…今を見つめられなくて、夢と未来を逃げてたこと―

―…傷つけてばかりで何も出来なかった頃―

―…俯いて震えてただけだった自分―

―…教えてもらったのは立ち向かうための心と力―

―…今、自分に出来ること―

―…大切なものを守るために―

―…真っ直ぐ前を見つめること―

―…この事件を悲しみと後悔で終わらせないように―

「……レリック事件をきっかけに始まった今回の任務はこうして無事に終わりを告げました。いくつもの出来事が絡み合って起こったこの事件がジェイル・スカリエッティ事件またはJS事件と呼ばれるようになったのは、事件が終わって随分経ってからのこと――」

フエイトは逮捕されたスカリエッティ一味のその後を見ていた

逮捕されたスカリエッティと事件捜査に協力の意思を見せなかった戦闘機人達は、それぞれ別世界の機動拘置所。罪を認め捜査に協力的な姿勢を見せた子達はミッド海上の隔離施設。ライトニング隊が保護した二人、ルーテシアとアギトも自分達で決めてそこにいる

「まあ、お二人はすぐに出来ると思いますけどね」

「精神操作、心神喪失、その他諸々があるっすからね」

「うん」

「アギトさんなんかは来なくてもよさそうなものに」

「うつ……ルールーが心配だったんだよ!」

「クスッ……」

「それに、これからはちゃんと生きなきゃならねえからな」

セインとウエンディは笑う

「あれ？そう言えばルーお嬢様、お母さんは？」

「病院で眠ってる。ちゃんと治療すればレリックがなくてもいつか目を覚ますだろうって」

――ミッド地上は平穏を取り戻し、機動六課のオフィスも修理完了。隊員達も全員職場復帰。ヴィヴィオも一時保護と検査から帰ってきてママと一緒に平和な暮らし――

「しかしはやて、事件以降めっきり大人しいね」

「疲れが出た？」

「うん、シグナムから聞いたレジアス中將の話がな、なんや私もな、同じ様な思いがあるからな。失ったものがあるから守りたくて、守りたいから必死になって無茶もして」

「どんな気持ちも、どんな思いも、強くなりすぎれば裏返ってしま
うものさ」

「積み重ねてきた時間や、犠牲になったものが多ければ多いほど余
計にな」

「だけど、急いで求めすぎたら悲しいことばかりが増えていくから」

「慎太郎さん、帰ってしまっんですね？」

「ああ、スカリエッティを置き去りにして逃げたグリード達が別の世界にいる限り・・・ここにずっと滞在するわけにはいかない。」

「それとこの世界に潜伏していたショッカーがガジェットや色々な者を回収して、別の世界に行ってしまった以上僕たちも放っておけないからね！」

なのは達が慎太郎達にお別れを言うと、彼らは答える。

「また、会えますよね？」

「はい！」

ライダー達、デネブ、亜樹子は、光写真館に入っていく。

「ああ、それとシャーリー！」

「はい！」

慎太郎がバースや他のライダーシステムのマニュアルを渡す。

「この世界にショッカーが現れるときの為に幾つかライダーシステムを置いていく・・・頼んだ！」

「任せてください！」

『皆さんさようなら！』

写真館はオーロラに包まれ、その場から消えていった・・・。

都市型テロ事件、「ゆりかご事件」解決から4年の月日が経過した。

当時、対処に当たった部隊、「機動六課」も解散し、皆、それぞれの道を歩んでいた。

そして、事件の際、聖王のゆりかごを使用する為に生み出された聖王のクローン体、ヴィヴィオは事件後、なのはに引き取られ、St・ヒルデ魔法学院に通い今年、初等科4年生になろうとしていた。

「いってきまーす！」

「気をつけてねー！」

チャリン・・・。

「ん？メダル？」

ギンガは陸士108隊隊舎から、ナカジマ家に通信していた。

「…連続傷害事件？」

「ああ…事件ではまだないんだけど。」

「どゆこと？」

「被害者は主に格闘系の実力者、そういう人に街頭試合を申し込んで…。」

「フルボッコって訳？」

「そう。」

「あたし、そーゆーの知ってるっす！喧嘩師！ストリートファイター！」

「ウエンディ、うるさい。」

興奮ぎみのウエンディをディエチは注意する。

「ウエンディ正解、そういう人達の間で話題になってるんだって。

被害届が出てこないから、事件扱いではないんだけど、みんなも襲われたりしないよう気をつけてね。」

「そう…。」

「気をつける。つーか来たら逆ボッコだ。」

「ふむ…これが容疑者の写真か。」

チンクはモニターに映った人物を見て言う。

「ええ、自称「霸王」イングヴァルト。」

「それって。」

「そう、古代ベルカ、聖王戦争時代の王様の名前…。」

そんな中、陸士108隊隊舎の近くで、ミュージックホーンが流れていた。

B・S、37 NEW電王とヤミーと新たな敵

「テディ、さっきの見たか？」

「ああ、例のあれはまさしくヤミーだった！」

「なんか、よく分かんないけど まあいいとつとあいつかたずけに行くよ。」

冷静を装ってもやはり幸太郎も驚きを隠しきることはできなかった

「幸いここは人が多いようだ、誰かに話を聞いてみよう。」

しかしテディの提案を拒否するかのように

「ドオオオン！！」

巨大な爆発音が鳴り響いた。

「なんだ今の！？テディ行くぞ！」

「応！」

一方そのころ・・・

「皆さん！！早く避難してください急いで！！」

オレンジ色の髪をツインテールにしている女性が市民に避難を促していた

「よし、民間の人は避難したわね、行くわよスバル!!」

「OK!! ティア」

青い髪の女性が加わり戦闘が始まる

そこにはヤミーが一体が暴れていた
彼女達はヤミー相手に苦戦してしまう・・・

「(・・・こうなったら、”プロトバース改”で・・・)」

その時・・・

「行け!! テディ」

幸太郎の合図とともにテディはNEW電王の武器『マチエーテディ』
となりヤミーの一体に体当たりする

「「え!!」」

驚いたのは2人の少女だ突然やってきた謎の男と青鬼がヤミーを吹っ飛ばしたのだから無理もない

「ちょっと! その人危ないから逃げてください!!」

ティアが幸太郎に強い口調で言う
しかし幸太郎は・・・

「別に逃げる必要ないからいいよ。」

そして幸太郎がライダーパスを手にとると彼の腰に金色と黒色で装飾された

『NEWデノウベルト』が現れる

ミュージックホーンが流れ彼は自らを戦士に変えるための言葉を言う

「変身」

「ストライクフォーム」

鋭角的な電仮面や全身を走るデンレール

胸のターンテーブルなどが特徴の

幸太郎のオーラをフリーエネルギーに変換して変身する戦士

仮面ライダーNEW電王へと彼の姿は変わる

『カウントは?』

マチエーデイの持ち手のすぐ上の部分にあるデイの顔が聞く

「とりあえず、5・・・いや3でいいや」

肩から腹までを袈裟懸けの斬撃を叩き込み、後ろから攻撃しようとしたが、後ろ回し蹴りをお見舞いする。

『フルチャージ!』

マチエーデディにエネルギーが溜まっていく、NEW電王の必殺技マチエーデディで敵を切り裂く「カウンスラッシュ」を使うためである

「ハアアア!」

「1」

と言うカウントと同時に一気に切りつける!

「0」

それと同時にヤミィが爆発した

「さて、これで終わりつと。」

「す、すご・・・」

スバルが呆然としながら言う

「あなた、もしかして仮面ライダー!?!」

「!?!? なぜそれを・・・。」

「そういえば自己紹介がまだでしたね。時空管理局執務官ティアナ・ランスターです」

「私は時空管理局防災市長スバル・ナカジマです」

「時空管理局？テディ知ってるか？」

「いや、聞いていない。」

マチエーテディから元の姿に戻るテディ
幸太郎も同じく変身を解く

「時空管理局を知らない・・・ティアもしかしてこの人？」

「慎太郎さん達とは違うかもしれないわね・・・」

ティアナが続けて言う

「私たちにはあなたを保護する義務があるから一緒に来てもらいます」

「どうするテディ？」

「私たちはこの世界について何も知らないしいいんじゃないか？」

「まあ、お前がそう言うなら」

そして2人はスバル達についていく。

そこから少し離れた地点

????「臭う、欲望の臭いだ」

欲望の怪物が息を潜めていた

B・S、38 アンクとイクスとアイス

聖王教会本部、

今ヴィヴィオ、ウエンディ、デイエチ、チンク、ノーヴェの5人が訪れていた。ウエンディとデイエチの二人は聖王教会の噴水広場にいるオットーとデイドと会っていた。

「いよーつす、オットー、デイド」

「久しぶり」

「ウエンディ姉様、デイエチ姉様」

「二人ともお久しぶりです」

デイドはシスター服、オットーは執事服を来てお茶の準備をしていた。四人はヴィヴィオが今眠っているイクスのお見舞いについて話していたのだった。

その頃、チンクは……

カリム・グラシア執務室

「お話って言うのは…例の傷害事件の事よね。」

「ええ、我ながら要らぬ心配かとは思ったのですが……」

チンクはそう言って、モニターを出すとそこには襲撃犯の映像が映し出されていた。

「件の格闘戦技の実力者を狙う襲撃犯。彼女が自称している『霸王』イングヴァルトと言えば……」

「ベルカ戦乱期…諸王時代の王の名ですね」

「はい、時代は異なりますが、こちらで保護されているイクスヴェリア陛下やヴィヴィオの母体である『最後のゆりかごの聖王』オリヴィエ聖王女殿下とも無縁ではありません」

「ヴィヴィオやイクスに危険が及ぶ可能性が？」

「無くはないかと」

「そうね、イクスの警備強化をするわ。それにもしそのイングヴァルトと話す機会があったら、」

カリムはそう言いながら、モニターにある映像を映し出した……。

『セルバースト！』

『エンジンマキシマムドライブ!』

ぐあああああ!

4年前、アクセル・ブースターと共闘したバースと戦い、アंकは撃ち落とされ行方不明になる。

戻って、聖王教会の近くに落ち現在に至る。

「ちつ・・・あの訳わからない仮面ライダーと後藤の奴、覚えてろ・・・。」

コアメダルが無事だったものの、セルメダルの消費が激しかった。

「くそつ、こんな事ならあの体（信吾）おいてくんじゃなかったな・・・ん?」

聖王教会の一室、ここに一人の少女が眠っていた、名は”冥王イクスヴェリア”

マリンガーデンの地下にある遺跡で眠っていた、”古代ベルカ、ガレア王国の王”。マリアージュの接近に伴い目覚め・・・”ある人物”に助けられる。しかし、マリアージュ事件の終結後から眠り続けている。

「こいつは・・・」ただの人間のガキ”じゃねえな?”

その時、誰かが部屋に入ってくる。

（チツ、仕方ない。こいつの体を使うか・・・！）

「イクス？」

ヴィヴィオの前には金のメッシュがかかった派手なヘアスタイルの
”イクスヴェリア”がいた。

「・・・！？・・・赤い腕！？」

「あ？なんだお前ら？まあ何でもいい。ところでお前アイス持っていないか？」

Aイクスは右手を人の手に戻してヴィヴィオに突き出す

「ふええっ！？」

驚くはず・・・先ほどまで”イクスヴェリア”の右腕の右肘から
指先までが、赤い色をした異形だったからだ。

B・S、39 霸王と虹彩異色と闘争心

戦いの記憶。

古代ベルカの、王達による戦いの記憶。

霸王の記憶。

悲しい記憶。

聖王との記憶。

果たせなかった悲願、霸王の求めた悲願が、痛いくらいに伝わってくる夢。

碧銀の髪と虹彩異色の瞳と共に受け継がれてきた、記憶。霸王の血の中に流れ続ける、欠片としての記憶。

自分が成すべき事……霸王の悲願を達成すること、数百年分の後悔を清算すること。

S t・ヒルデ魔法学院。

魔法を学ぶための学校の一つであるその施設内にて、碧銀の髪・虹彩異色の瞳を持つ少女、アインハルト・ストラトスは1つ息を吐く。

「…………ふう。」

別に気分が落ちているわけではない、ただ、心に重石を結び付けられているような気分だけだ。

戸惑いと言う表現が一番適当かもしれない。

記憶の中の霸王の悲願を達成すること、カイザーアーツ霸王流とこれらの記憶は、自身の存在理由。

・・チャリーン・・チャリーン・・

「……コレは？」

彼女は『ソレ』に気づき、拾った。

「…………メダル? ……昔の通貨?」

アインハルトが拾ったのは銀色の『メダル』だった。それは、恐竜の絵の刻まれたメダルが二枚。

ヨクボウヲカイホウシロ

彼女の額と私物に銀色のコインスロットが現れ、手にしていたメダルはそこに飛び込んだ・・・すると、

ズッ！ズズズルウウウー！！

アインハルトの頭に音が響いた瞬間、そんな音を立てて、彼女の身体と私物からミイラのように体中にバンドのようなものを巻きつけたミイラのような半身の人型の異形が二体這いずり出てきた。

「ヴヴウウウアア〜」

「きゃああああッ！」

異形は呻き声を上げると、一つにくっ付いた。”普通のヤミー”とは違う・・・”欲望の半分子怪人形のヤミー”が・・・そして異形たちは、

「タタカイタイ・・・モット、タタカイタイ・・・ツヨクナリタイ、モットオオオオオ！！！！」

「きゃあッ！」

雄叫びと共に身体を変化させ、ヤミーというより”Wの世界の怪人、ドーパント”に酷似した姿に成長する。

「カメンライダー、マドウシ、チカクニ・・・タタカウ！タタカウ！」

その言葉とともに、背中に生えた、風車の羽を模した3対の翼で飛翔し、異形は何処かへと飛び去った・・・。

「い、一体・・・？」

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマダナ？」

月を背に街灯の上に立っていた……ヤミー、

「キサマニキタイコトタメシタイコトガル！」

「ヤミー！？降りて来い潰してやる！」

「アセンナヨ」

ヤミーは街灯から飛び降りた。

着地の寸前に魔力放出をして軽く浮遊し、衝撃を緩和。

（噂の通り魔に似ている・・・。）

「否定ハシナイ」

「こいつ、アタシの思考を・・・？」

アインハルトが親の為似てなくもない。

「キキタイノハキサマノ知己デアル“王”達ニツイテダ。聖王オリ
ヴィエノ複製体^{クローン}ト冥府ノ炎王イクスヴェリア」

「あたしが知ってんのは、一生懸命生きてるだけの普通の子供達だ」

複製体^{クローン}。

JS事件——ジェイル・スカリエツィ事件。

4年前に起こった、大規模な都市型テロ事件であり、かのエースオ
ブエース率いる機動六課が解決した事件としても有名。

その事件で使用された、ゆりかごと呼ばれる古代ベルカの兵器のキ
ーとなっていたのが、聖王オリヴィエの複製体^{クローン}。

聖王オリヴィエの複製体ヴィヴィオの事だ……

「——理解デキタ。ソレハ他デサガス、ソシテ——オディハクサム
ラムツコロス！」

グロンギ語のような言葉を叫び挑戦状を叩きつけた。

ノーヴェは碧銀の“霸王Wヤミー”に向かって歩みを進める。

ノーヴェとヤミーはあの一撃以降、互いに睨みあつたままの状態。

そして、先に動いたのはノーヴェ。

「ジェットエッジ！」

S t a r t U p

眩い光に包まれ、ノーヴェが戦う本来の姿になる。

ガントレットと足首部分に回転リングがついたローラーブーツが特徴的な姿。

「お前らヤミーはなんでこんな事をしやる？」

「——強サヲ知リタタキノメス、ソレガワレノヨクボウ！」

ノーヴェは舌打ちする。

「ちッ！馬鹿馬鹿しい」

それに対してノーヴェは軽く吐き捨てて、右拳を腰にためる構えを取る。

次の瞬間——

踏み込みが全く見えない。

一瞬にして“霸王Wヤミー”に膝蹴りを打ち込んでいるノーヴェの姿があった。

——速さは人が動く際に必然的に発生するであろう——初動ですら見ることが出来ないほど。

「アマイ」

その不意打ちに対してガードするヤミー。

ノーヴェの右拳がバチバチと音を立てて唸りを上げていた。”スタシヨット”電撃を纏った拳で、対象の動きを止める効果もある一撃だ。

そのまま躊躇なく突き出す。

ドコンー！

大きな音が響き渡り、ヤミーはその衝撃に耐えきれず後ろへ吹き飛ばされる。

しかし、この一撃に対して一步も動くことなくガードする、普通ならば・・・ガードの精度が落ちて少なからずダメージは通っていた。

「強さを知りたいって正気か？怪人の癖に！」

「正気ダ。ソシテ今ヨリサラニ強クナル！」

「単なる喧嘩ならここでやめとけ、こんな事してねーで。」

「ダメレ、ワレノ確カメタイ強サハ——生キル意味ハ表舞台ニハソ
ンザイシナイ！」

ここに来て、“ヤミー”が構える。

先程までの防御ではなく、明らかに攻撃の意思を持った構え……。

いつでも右を叩きこめるその体勢は——臨戦態勢と言つに相応しいもの。

だが……この距離で構えるのは普通おかしい、間合いがありすぎ、当然蹴りも拳も届きはしないだろう。

ノーヴェが右拳を突き出すが、ヤミーはそれを回避して鳩尾に右を叩き込んだ。

「が……ッ！」

咄嗟にローラーブーツで後ろに下がって威力を緩和する。

「列強ノ王達ヲ全テ倒シ、ベルカノ天地ニ覇ヲ成スコト。ソレガワレノ成スベキ欲望。」

「怪人が、寝惚けた事抜かしてんじゃねエよッ！」

ノーヴェは突っ込む。ダメージをろくに感じさせない勢いだっただ。

「昔の王様なんざみんな死んでる！生き残りや末裔達だってみんな普通に生きてんだ！！」

激しい拳の撃ち合い、ノーヴェの拳はまともには入っていないようだ。

「——弱キ王ナラ——コノ手デ屠ルマデダ！」

「この、怪物野郎が……！」

その叫びと共に、宙には凄まじいほどの魔力の放出で構成された道のようなものが浮かび上がり、ノーヴェはその上を激走した。

加えて、バインドによってヤミーの両腕、両脚を封じ、

「ベルカの戦乱も聖王戦争もツ、ベルカって国そのものも!!もうとつくに終わってんだよツ!!」

ノーヴェの魔力をフルに使った跳び廻し蹴りがヤミーに襲いかかる。

「リボルバースパイク!」

・・・が、受け止められる。

「終ワツテイナイ、オウルノハ・・・キサマダ!」

ヤミーは距離を離すと、腰を一回叩く。

(こいつ、まさか!?)

『霸王ジョーカーエクストリーム』

紫色の竜巻を発生させ、その力で宙に浮き上がり正中から分割され、時間差で両足蹴りを放つ。

「かはあっ!」

ドゴー!!

その破壊力は数十も。嫌な音を立て、必殺技が命中する。

「弱サハ罪ダ。弱キ拳ナド……ツブスカチモナイ」

「ク……ソ……。」

ノーヴェが倒れ、気を失うと、ヤミーは背を向けて立ち去った。

翌日、アインハルトは通常通り学園に登校していた。

今朝は、霸王の最も悲しい記憶を夢に見て、涙を流しながら目を覚ましてしまった。霸王の記憶を夢で見た為である。

アインハルトは鏡の前に立ち、拳を鏡につける。

「（…いつもの夢…一番悲しい…霸王^{わたし}の記憶…。）」

アインハルトは一度目を瞑り、そして目を開き呟く。

「…いつまで…この記憶を見続ければいいんでしょうか…。誰も…教えてくれない…。記憶にある霸王と同じように、私も報われないのですか…？」

アインハルトは再び涙を流した。

「（私は何をやっているんだろう…。やらなきゃならない事、沢山あるのに…。）」

アインハルトはもう一度そう念じるように心の中で呟いた。

教室に入り、カバンから教科書などを取りだして片す。毎日繰り返ししてきた動作だ。明日も、明後日も、恐らくアインハルトは朝学校に来てこの動作を行うのだろう。

しかし、今思えばその日は、いや正確にはその日からは朝の風景に少し変化が現れるようになったのかもしれない。

ガチャ…

そんなアインハルトの背後から足音が聞こえてくる。振り向くと、そこにはアイクスがいた。

「何かご用ですか？」

「……お前だな？…ヤミーの親は。」

アインハルトの問いに、アイクスは鋭い目つきで言う。

「…冥王イクスヴェリア。古代ベルカガレア国の君主。古代ベルカを生きた人物…。」

「言っておくが…今の『俺』は違う…こいつは『体を動かかせ』ない。手も動かさせなけりや、口は喰う事も喋る事もできない。今動けているのは俺のお陰だ」

それを聞いたアイクスはどこか予想通りといった表情をし、言う。

「…今、コイツの頭の中を『読み取った』。お前には霸王とやらの記憶が継承されているようだな。だが、コイツの時代と霸王の時代では年代が違うぞ？」

「？ 貴女が争いを嫌い、命を尊重する心優しき少女であったと、伺っています…。」

「チツ、こいつ。俺の話全然聞いてねえ……まあいい、話してやる。」

Aイクスは少し間を置き、話し出す。

「…『コイツ』の時代も、戦が絶えなかったようだな…。戦って残ったのは、焼け野原、虚しさ、悲しみ、どこにぶつければいいか分からない怒りや憎しみ…。そして再び戦が起きたうえに、能力を抑え切れずに自国の破滅、そしてコイツは他国の当代の王達によって封印されたようだな…。」

Aイクスはイクスヴェリアの思考を読み、語る。

「…そんなことが……。そういう経緯で封印されていたのですか…。」

「そんな事はどうでもいい。お前の欲望はなんだ？」

Aインハルトは右拳を胸元に持っていていき、言う。

「あなたの拳と私の拳、いったいどちらが強いのか……。知りたいです。」

「フン、だったら表に出ろ。相手になってやる。」

「…武装形態。」

アインハルトはバリアジャケットを展開し、大人の姿になる。それを見たアイクスは・・・。

「フン、なるほどな。・・・こうか？」

それを見たアイクスもバリアジャケットを展開し、大人モードになる。

「来な！」

アイクスは持っていたアイスの棒を投げ捨て答える。

B・S、41 アインとアイクスとプロミネンスドロップ

——学園の外。そこでは激しい攻防戦が繰り広げられ互いの拳をぶつけ防御してを繰り返していた。

激しい砂煙を引き起こして強風をも巻き起こす、高速で発生する攻撃と防御を瞬間的に繰り返し続ける。アインハルトは殴りかかる。アイクスは両肩より翼を出現させ空中に飛び立ちそれを回避する。

そして反撃とばかりに広げた左翼から、羽根手裏剣を発射してきた。アインハルトは暴風に逆らうように後方へと一気に飛んで距離を置く。それだけで周辺をかき乱す強風を発生させるほど彼女達が今起こしている戦闘はレベルが高い物なのだ。

「チツ…やるな。」

「…貴女こそ。」

アインハルトはアイクスの背後に移り、跳び上がって蹴りを放つ。しかしそれに気付いたアイクスは炎を放射し、アインハルトを押し返す。

「——ッ!？」

炎に襲われたアインハルトは地面へと落下し、それを追ったアイクスは空中でアインハルトを蹴り飛ばし、地面に勢い良く叩きつけた。

「どうした？ 霸王つてのも大した事ないな？ ハハハ！」

アイクスは笑いながらアインハルトのすぐそばに着地する。

「終わってません、私にとってはまだ何も……。」

「ちっ！」

強烈な一撃、決して手加減されていない本気の拳。

突然の攻撃にも関わらず、アイクスは平然と繰り出された拳を受け止め、逆の手で殴り飛ばすが……

「何！？」

アイクスが拳を受け止めている間、体中は魔力で形成された鎖によつてアイクスは縛れていた。

彼女（？）はようやく気がついたのだ、敵は防御を捨てて反撃の準備をしていたことに。動きを止める鎖は恐らく、次の攻撃を確実に当てるための準備。

「霸王……！」

紫色の瞳と青い瞳、オッドアイの目がアイクスを捉える。短時間の間に練り上げた力が瞬間的に拳に収束され強大な破壊力が伴っている。気圧だけで圧倒させる魔力が拳に集中する…。

「断空拳！」

「させるかつ」

アイクスの放つ火球がインハルトの身体に直撃する。

だが強烈な破壊力を込めた拳をアイクスの腹部に叩きつけ、さらに地面に全身を叩きつけ衝撃でバウンドを繰り返しながら一気に吹き飛ばされてしまう。

「ふん、やるじゃねえか…だが…！」

アイクスはインハルトに炎を乱射し始めた…。しかもその威力は今までよりも数段高く、地面を一瞬で黒こげにしてい

「くっ、さっきよりも…。」

「…ッッ…！」

次の瞬間、両者は地面を走り抜け攻撃に出た、間もなくアイクスの眼前にはインハルトが飛び込む。

拳による連撃が次々と絶え間なく降り注ぐ、決して遅くはない速度

を持った攻撃の雨は通常の格闘技者であれば避ける事は容易い事ではない。

アインハルトは次々と拳を振るい続け、更なる速度と攻撃を持つて畳み掛けていたが・・・攻撃が当たらない。拳による高速連続打撃に対してもアイクスは避け続けている。軽やかに余裕を持っていると言わんばかりの動作で彼女以上の速度で回避しているのだ。

「く…っ！」

「そろそろ、終わらせてやる。」

ゴオオオオオウン！

アイクスは空高くから、両脚に炎を纏って両脚蹴りを繰り出す。

「！？」

「うおおらあああ！！！！」

ドコッ！

「ぐっつ！！」

アイクスは「プロミネンスドロップ」をアインハルトの腹へと叩き込む、その攻撃は信じられないほどの威力で彼女を襲い体制を崩し

たのだ。

「あ……ぐ……。」

アインハルトは揺らぐ視界の中でアイクスを見据えた後——地面に倒れる……暫くすると眩い光が彼女を包み込んでいき、消失した頃には武装形態が解除された。

「さて、後はこいつのヤミー……か……。」

アイクスはアインハルトを近くのベンチに放置し、ヤミーの元に向かった。

B・S、42 オレンジとバース・ミラージュと対艦巨砲主義

翌日、

以前ノーヴェを破った“霸王Wヤミー”が街中で暴れていた。

「っ！」

ダンッ！

瓦礫の固まりを盾に傷ついた局員が集まっている。

その中に。

「はあ、はあ、はあ・・・何あれ？ でたらめだわ。」

オレンジのロングヘアーの執務官、ティアナ・ランスターが息を切らしながらクロスミラージュを構えていた。

隙について瓦礫から撃とうとするが完全に狙いを定めた“霸王Wヤミー”の魔弾が徐々にティアナ達が盾にしている瓦礫を削っていく。

「霸王トリガーエクスプロージョン！！！」

「！？」

“霸王Wヤミー”が魔弾を放とうとした瞬間機械の音声が届いた。

『ドリルアーム』

その音声と同時にある声が聞こえた

「ティア！」

その声にティアナがその場を離れた瞬間、“霸王Wヤミー”が攻撃を受ける。その攻撃の先を見るとそこには構えたバースの姿があった・・・が、通常と違い”緑”ではなく”青”が基調となっている。

「大丈夫、怪我無い！？」

「スバルなの？！」

倒れた体を起こしティアナの名を呼ぶ

「どうしてここに？」

「話は後。まずはあいつを片付けよう・・・はい！」

バース”青”はティアナにバースドライバーを渡す。

「マリーさん、完成させたんだ。」

「うん。私は周りの人を避難させる、だからお願い！」

ティアナはバース”青”に駆け寄り肩を叩く

「ええ。まかせたわ！」

バース”青”が救助に向かうと、ティアナはカプセルオーブがオレ

ンジのバースドライバーを腰に巻き、左手でメダルを入れる。

「変身！」

グリップを回し中央のセルリアクターを開き輝きを放ち機械音を発音させる

カポーン

カプセルオーブから再び様々なパーツが出現しティアナは仮面ライダーバース”オレンジ”へと変身を遂げる。

「仮面ライダー……。」

「……まあ、言うなら”バース・ミラージュ”ね。」

“霸王Wヤミー”は走り、発泡しながら接近してくる。

当のバース・ミラージュは。

「このぉ！」

弾丸をひたすらストレートで叩き落としていく。

「何！」

「さて、これで……。」

バース・ミラージュはセルメダルを一枚取り出しバースロットに入れたグリップを回すと中央のセルリアクターが開き輝きを放ち機械音

を発音する

『ランチャーレッグ』

すると…カプセルオーブから様々なネジ等が出現し、両足にキヤタピラレッグではなく、『ランチャーレッグ』が出現する

「（キヤタピラレッグじゃない！？）全弾発射！！！」

ズドドオ！！！と音を立てランチャーレッグからミサイルが発射される

（私向けにアレンジしたって、マリーさん言ってたけど…なるほどね！）

一人で勝手に納得したバース・ミラージュに“霸王Wヤミー”が襲いかかるが、

「こっちの番よ。・・・たあ！」

バース・ミラージュは回し蹴り、フック、アッパーでヤミーを打ちのめしていく。

そして弱った“霸王Wヤミー”に横蹴りを放ち、吹き飛ばす。

バース・ミラージュは再び、セルメダルを一枚取り出しバースロケットに入れグリップを回す

『マルチトレースミサイル』

本来、カッターウィングが出現する場所に多連装ミサイルを搭載された背部コンテナが現れる。

「つて！これもう完全に武器庫じゃない！？」

「霸王メタルブランディング！」

「五月蠅いわね。これで決まりよ！」

バース・ミラージュはさらに、セルメダルを一枚取り出しバースロツトに入れグリップを回す

『セルバースト！』

「全弾持つて行きなさい！」

セルバーストにより背部のコンテナからマルチトレースミサイルが“霸王Wヤミー”に放たれ、吹き飛ぶ。

そして、“霸王Wヤミー”の身体にプラズマが走り身体が爆発。

「や、やったの？」

ティアナは啞然とする。

“霸王Wヤミー”は爆発しセルメダルへとバラける

「ティア——！」

スバルとギンガが駆け付けた。

「スバル！ ギンガさん！」

「どう？それ！」

「なんか・・・なのはさんみたいに”対艦巨砲主義”になりそう・・・。」

「あはは・・・。」

離れた場所

「・・・伊達や後藤よりも無茶苦茶だな。」

ティアナ達の様子を見たアイクスは何処かへ飛び去った。

B・S、43 切り札と誕生（パンツ）とヤミーの大群

人がうごめく海湾。

するとそこにバリアジャケット姿のスバルが駆け付けた。

「湾岸警備隊、防災士長のスバル・ナカジマです。どんな状況ですか？」

スバルは場の局員に聞く。

「はい。今夜入港予定だった豪華客船サント・アンヌ号内で怪人が現れて火災を起こし、現在怪人は屋上。内部に要救助者が数名。今さっき仮面ライダーという方が変な乗り物で飛んで行ってしまいました。」

「慎太郎さ・・・、仮面ライダーが!？」

「? はい!」

「・・・私も合流します。後から来た方にも説明お願いします。」

「えっ? ちよっ・・・ナカジマ士長?」

「ウイングロード!」

局員の制止を聞かずスバルはウイングロードを客船に伸ばし、走っていた。

客船。今ここで、仮面ライダーバースと仮面ライダージョーカーが協力し、ヤミーの大群と戦っていた。

「数が多すぎる!!」

バースは突進しながらセルメダルを2枚スロットする

『キヤタピラレッグ!ドリルアーム!』

バースは押し寄せるヤミーの前に立ち、キヤタピラレッグを装着し間合いを詰めると、ドリルアームを装備する

さらにセルメダルを2枚連続でスロットしグラップを回転させ、

『セルバースト!!』

「せいやあ!」

その叫び、発音と同時にズドオオン!!と音をたてヤミーを一掃する。

「オース・・・じゃねえ、火野!!」

「W・・・じゃなかった、左さんでしたね。俺たちは今、Wにもオーズにもなれませんから・・・。」

とある理由で”本来の変身”で戦えない2人はそれぞれ、ジョーカ―とバースになり、戦っていた。

「ああ。俺は今、フィリップと別行動だからコイツでやるしかねえ！」

「俺もバースドライダーを後藤さんから借りてますし……。」

「さて、火野。後方支援頼むぜ」

「はい！」

「いくぞ！」

すると、ジョーカーはドライバーのジョーカーメモリーを右腰のマキシマムスロットにセットしボタンを叩く。

『ジョーカー・マキシマムドライブ！』

「ライダーキック！」

ジョーカーは高く跳躍。

そのまま右足に紫色のエネルギーを纏い飛び蹴りを放った。

腹部にライダーキックを受けたヤミーは吹き飛ばす。

「バースドライダー使うの……久しぶりかな？使い慣れないけど……。」

バースは突進し、ドリルアームで蹴散らす。

戦いのある場所から少し離れた臨海公園。

その中の一角の休憩所にアイクスは移動していた。

ティアナとヴィータ、アイクスは向かい合うようにベンチに座り、アイクスは近くの壁の上に腰掛け2人を見下ろしながら道すがら買ったアイスクャンディーを食べていた。

そんな中、ティアナは、

「・・・色々聞きたいことはあるけど・・・まずは、あなたはいつたい『何者』なの？」

そう言つて話を切り出した。

「・・・コイツ、イクスヴェリアの体を借りている・・・それだけだ！」

その返答にティアナは、

「あなたには・・・その・・・強制連行つて形で署に来てもらう事に・・・」

「・・・あ？好きにすりゃ良いだろうが」

アイクスはさもどうでもいいように答えると、二本目のアイスを食べ始めた。ソレを見たヴィータは、

「何、他人事みたいに言ってやがんだ！問題なのはおめーなんだよ！つーか何、アイス喰ってんだよ、テメー！」

「・・・俺も丁度、お前らには用がある。」

「？」

「紫の”Wみたいなヤミ”についてなあ・・・。」

そう言ってアイスをほっばる。

B・S、44 未来と海賊と特務六課

その頃、未来『新暦81年』

―ゴーカイガレオン―

腕を組んだ赤い服の男がボヤク。

「…気に入らねえ。」

「…今回ばかりは、私もそう思うわ。」

「なんでですか？」

男勝りの少女、片方はおしとやかな少女が話す。

腰まで届く長髪を後ろで一つに束ねている青年がトランプをテーブルに叩きつけ…

ガタン！と大きい音を立てる

「…全くだ…！」

明るい茶色の頭髮をしている落ち着きなさそうな青年は

「！？…皆さん、管理局の戦艦がもう追いついてきました！」

「ええ！？」

「…振り切れそうに、ないな。」

ヘタレそうな青年、長髪を束ねている青年が続けて言う、

「タイヘンダア！ドウスルノオ！？」

オウム型のロボットは腕を組んだ赤い服の男に聞く。

「こうなったら・・・派手にいくぜっ！」

「やっぱり」

赤い服の男がそう叫ぶと明るい茶色の頭髪をしている青年は困った

「提督、ライン231で通信です。」

ピッ

「はいっ　こちら本局運用部ですが・・・」

『特殊定置観測隊だ、至急の配置要請なんだが…武装局員40名を強行探索装備Cで揃えてほしい。』

「……いきなりですね、何か荒事ですか？」

『探索指定遺失物が稼働しているようなんだ…それを使った被害者も出てる』

「なるほど…ねえ、聞いてたでしょ？」

「はいっ！」

「C装備40人分の準備何時間で出来る？」

「えーとですね……チェック込みで3時間もあれば！」

「動かせる人員も確保できそうです、4時間後にはこちらから出勤できますが？」

「頼むよ」

「相変わらず世界は物騒ね。」

「そうですね。」

「左舷…ガレオンキャノン、てえー！」

『オーライ』

「！？ やめてください！」

「！？ 待って下さい、マーベラスさん…」

「…無駄よ、アイム、凱！もう撃っちゃったんだから。」

凱は撃つと言わんばかりに止めようとするが、ゴークイガレオンの大砲が次々と戦艦を撃ち落とす。

「どうする、マーベラス?」「管理局の魔王」が出てきたら…振り切れないぞ?」

ジヨーがそうゴーカイレッドに変身したマーベラスに聞き、ハカセが泣き叫ぶ。

「うわゝ、もうおしまいだあ!」

「……つるさいっ!」

ゴッ!

「……ぐふっ……」

ルカのボディーブローが、ハカセの腹部に見事にヒット…その場に倒れこむ。

「……面舵いっぱい!」

そう言ってゴーカイレッドは舵輪を思いっきり回し、ゴーカイガレオンで次々と管理局の戦艦に突進して破壊していく。

(さて……これからどうなる……ん?)

ジヨーが、考えている矢先…外に一人の女性が飛行していた

「!? 誰か、いるようです……白い服をお召しになった方。」

「デイベインシューター！」

『フルドライビング』

「シュートオオオー!!」

何者かの砲撃がゴーカイガレオンに命中する。

ドドドドンッ　ズズ…

「うあつとお!?!」

「これはまた……」

「ヘッ!面白えな連中!俺たちのハラん中に入ってくる気だ!」

(…奴等と、闘うのか……)

「暴れてやるか!」

マーベラスとジョーはやる気である。

「ええ、やだよお!」

「そうですね!?!」

ハカセと凱は反対する。

「なにいつてんの、やるしかないでしょ！」

「奴等も本気だ、「白い魔王」が出てきてるんだからな……っておわっ！！」

ルカとジョーは強気だ

「……話し合いで何とか……。」

「もうだめだ〜！」

「困った、困った、どうするド〜スル〜」

相変わらずさわが……

「うるさい〜！」

「……。」

しいが、ルカの大声でみんな静まった。

「みんないくよ……！」

「うん、構わないよ制圧して出るんだから！」

「……ですね。」

ザッ

「……大層な自信だな！」

「…私たちの戦艦に土足で踏み込んでおいて、まさか無傷でここから出られるとも？」

ゴーカイイエロー、ブルーにゴーカイチェンジしたルカ、ジョーが立ちふさがる。

ザザッ…。

「うわあああ！」

ハカセこと、ゴーカイグリーンはビビる。

「管理局特務六課です武器を捨てて投降しなさい！」

「覚悟しな！」

六課メンバーに囲まれたゴーカイレッド達・・・だが、

「魔導師にはこいつだ！」

ゴーカイジャー達は、マジレンジャーのレンジャーキーでゴーカイチェンジした。

「……………ゴーカイチェンジ！」……………」

《マジレンジャー！》

「えっ、えっ、」

「姿が？」

「な、一体何が……」

「あなた達はいつたい……？」

管理局特務六課のメンバーたちは彼らが別の姿に変化したことに、驚いていた。

「……あの人達、何処かで？」

「「「「マジ・マジュール・ゴゴール・ジンガジン！ハッ！」」」」

「……くっ！」

最大限に高めた5人のエレメントを一つに終結させて相手を攻撃する呪文で特務六課のメンバーたちはゴークイガレオンの外に吹き飛ばされた。

<数時間後……>

「大丈夫？」

「はい……」

フェイトが、エリオを心配している隣でティアがみんなに聞く。

「あの人達、何なんでしょう？」

「彼？」

「いえ、それより戻りましょう。」

――ゴークイガレオン――

「…どうしましょう？マーベラスさん、地球にいた筈の俺達は何故か…「ミッドチルダ」に飛ばされてしまいました。」

「そうだよ？おかしいよ！まだ、使えないはずの「レンジャーキー」がいきなり光り出して…オーロラにのみ込まれたんだから。」

ハカセが理由を話していると何処からか声が聞こえ、全員がその方向を向くと顔がはつきりと見えないが…人の姿の様なモノがぼやけてみえる。

『今の俺は、因子が足りない…そちらにいけない、その、鳥型ロボに…聞け。』

マーベラスはそれに触れようとするが、霧のように掻き消えると同時に、目の前に複数のレンジャーキー……のような物がバラバラと落ちる。マーベラスは…それをレンジャーキーの入ったボックスにしまい、ナビィに話しかける。

「おい、鳥ー！」

マーベラスはナビィの頭を親指と人差し指で掴み…。

『ん！？』

ナビィは振り向く。

「占え！」

乱暴にナビィに命令すると鳥呼ばわりされたことを否定した。

『鳥じゃないよお般若だよ』

『般若？』

マーベラスはナビィを睨み…。

「くだらない冗談言っでないで、さっさとやれ！」

人差し指でナビィを小突く。

『・・・バサッ、バサッ』

ナビィは声でバサッ、バサッと言いながら…自分の翼を広げ、構え

る。

『レッツ！お宝ナビゲート〜！！』

天井に向かって思いきり飛び…「ゴン！」と激突し…「グッ」と言いゆつくり下に降りようとした、その時…

『そなた達、公務員のお姉さんを訪ねてみるとよいぞよ…ってな感じ〜』

ナビィの占いを聞いたゴーカイジャー達は…ナビィの突然の発言に、啞然としてしまう。

「またそれですか？」

「っだよ…それは？」

ジョーはそう言ってナビィを睨み付ける。

「…漠然としてるわね〜」

ルカは呆れていた。

「…でも他に方法なんてないし」

「公務員のお姉さんを訪ねればいいのですね？」

彼等はミッドチルダ内を搜索することにした。

『街道の各所で検問を行っております。ご通行の皆様、ご協力をお願い致します。』

（うえ、これ完全にトーマが犯人扱いじゃん。）

B・S、45 烈火と眼帯と凶鳥

ミヘナ街道

―ザッ―

「そのまま、放っておけ。」

褐色の肌に、腰には刀を身につけ、右目に眼帯を眼帯を着けた女剣士が少女へと近づいていく。

「エクリプスドライバーEC因子適合者があるべき姿になるだけだ…お前もすぐにその少年と一つになれる。」

『―エクリプス、ドライバー―』

眼帯を着けた女剣士は少女に近づいていく。

「…倫理破損か？リアクトプラグが役目を忘れるとは…」

眼帯を着けた女剣士は少女に近づき剣を抜く。

「我々にはその少年が必要だ。破損プラグに用はない…退け」

『…――！！！！』

少女は眼帯を着けた女剣士を睨みながら後退する。

「判断機能すら破損したか」

「全員動くなッ！武器を捨てて両手を上げるッ！」

女が刀を構えた瞬間、突然女の腕にチェーンバインドに縛られた。少女は上空を見るとそこには二つの影があった。

「管理局特務六課だ、危険物所持及び暴行の現行犯で逮捕する。」

現れたのは剣の騎士、シグナムとユニゾンデバイス アギトだった。

「魔導士？いや騎士だな、連れているのは融合騎か？」

女はバインドを破ると、刀をシグナムに向けた。

「動くな」と警告はしたぞ？一歩でも動けば誰であろうと切り伏せる！」

眼帯を着けた女剣士はシグナムの前に立ち、そのまま武器を構えた。シグナムはそれを見ると自分も構える。その光景を見た少女も啞然としながら立っている。

「面白い事を言う騎士だ、公僕とは思えんな。」

「もう一度だけ言う」

眼帯を着けた女剣士が、開き直って言った言葉がシグナムに不快な思いになっていく。そしてシグナムは手に持っていたレヴァンティンを……

(Explosion.)

「武器を捨てて投降しろ。」

「炎熱変換？ますます面白い！」

眼帯を着けた女剣士は少女を見ながら問いかけた。

「さて…公僕、武器をせずに動いたぞ…どうする？」

連結刃にすると、眼帯を着けた女剣士は、シグナムと互いの剣を構え、同時にぶつかり合った。

「フィールドエフェクト分析完了…行けるよシグナム！」

二人の戦いを離れてみていたアギトが念話でシグナムに呼びかける。

「よし…来い、アギトッ！」

「…ユニゾンッインッ！」「…」

シグナムとアギトはユニゾンをし、シグナムの背中に紫色の炎の翼が生えた。

「ヘイヘイヘーイ！どよ？見事な捕獲術！」

突然現れた一人の少女が一人の少年と二人の少女を特殊なロープで捕獲した…

「そしてアル様、颯爽と登場ってね！」

「……………ッ！」

「うおっと、アブネエ！寝てろ、ぺったんこ胸め！」

アルナージという少女は、ロープで動けなくなった3人を催涙スプレーで眠らせた。

「さて、あとはサイ姉に任せてと…？」

同時刻ミヘナ街道上空…

シグナムとサイファアの何度目かのぶつかり合いを繰り返していた。

「居るものだな。強者というものは」

「最後に聞いておく、それは「デイバイダー」で貴様は「フツケバイン」の一味だな？」

「確かにこいつはデイバイダーで、私はフツケバインファミリー一家の最初期からのメンバーだ…我々と何か因縁でも？」

サイファアは呟くように言うと手に持っていた武器を振り回しシグナムに襲いかかってきた。

(s c h l a n g e F o r m .)

二つの剣が何度も交差するそんな中レヴァンティンが鞭状に変わった。

(鞭 ? いや、連結刃)

サイファアはシグナムの連結刃を回避しようとする。

(速い ! 剣尖の軌道が…読めな…うおあッ !)

軌道が読めず、サイファアの頬を軽く斬りつけるレヴァンティンの刃。

「紫電・一閃！！！」

強力な一閃をサイファーにぶつけた。サイファーは咄嗟に刀の鞘で防御をしたが……

「グッ！？」

シグナムの紫電一閃が確実にサイファーに届く。サイファーは地面に叩きつけられた……が。

「やったか！？」

「まだだっ……！」

(Engage konig 944.)

サイファーは刃物状の無機物を……

(react.)

自身の左手に差し込んだ。

「……これが、EC兵器の起動状態……世界を殺す猛毒だ」

デバイダー944「ケーニッヒ・リアクテッド」彼女、サイファーの武装である。

「左手に火炎弾、右手に捕獲輪だ！」

「心得た…」

シグナムは火炎弾、捕獲輪をサイファーに放つが…

「魔導殺しのこの双剣、止められるものなら止めてみる。」

「魔導殺し」の名の通り。

（…効かない！？）

魔力エネルギーの結合分断、魔力によって編成された弾丸や保護された物質は。

『うわ…レヴァンティン！？』

シグナムはレヴァンティンの刃を見た。刃にはヒビが入っていた。

（レヴァンティンにヒビを入れたのは後藤慎太郎以来だ。）

……武具の堅さではない「EC兵器の起動状態」のサイファーには効かず…レヴァンティンは折れてしまった。

「…残念だったな…リアクト時には刃物も魔力も我々には通らん。」

（うあっ！！！！ユニゾンが解け…）

「…剣での勝負は危うかったが、殺し合いでは私の勝ちだ…。」

「…くっつ…！！！」

「…お前らは、主はやてが言っていた…？」

「ドーンと行くよ…！」

4人は二段変身を解き、

「さて、公務員のお姉さんも見つかったしね」

「貴様ら…！」

魔弾を放つがゴーカイガンで相殺、

「派手にいかせてもらおう！」

マーベラスはゴーカイガンを片手でジャグリングする。

今、凶鳥と海賊のド派手なバトルが始まる…

B・S、46 チェンジとライダーキーと敵のもくてき

「やれっ！ジョー！！」

「魔力の類いは効かないんだよな？」

剣を持ち、剣で円を描いて十字に振り下ろすと十字型の強力な斬撃が放たれた。

「！？」

「くっはっ！！」

アイム、ハカセ、ルカ、凱はそれぞれ…ゴセイピンク、シンケングリーン、ギンガイエロー、デカブレイクにゴーカイチェンジしサイファアの足を止める。

「くっ、なんだと？」

防御、特殊防御を崩したスキに、今度は、ゴーカイサーベルの二刀流でジョーはサイファアを切りつける。

《ファイナルウェーブ！！》

「喰らいな！！」

そして、マーベラスは二丁のゴーカイガンにレンジャーキーを装填し、ファイナルウェーブを叩き込む。

「ぐああああー!!」

ドオオオオン!

「やったか?」

「うっん、多分まだ...。」

煙の中から人影が見える...その時だった。

ズドオツ!

ウワアアアアアアーッ!!

「...うっ、勝てっこないよ...。」

「...冗談じゃねえ、地球の宝を見つけるまで死ねるか...」

「...くっ。」

「...って言っても、普通じゃないわよ...あの女化け物よ?」

「勝算はあるのか?マーベラス...」

「...マーベラスさん...?」

その頃...

「…ハア…ハア…」

シグナムは血を流した腕を抑え、壁に寄り掛かる。

「シグナム、水汲んできたぞ。」

そこにアギトがコップを持って飛んでくる。

「アギト、すまない…」

シグナムはアギトから水を受け取りそれを飲む。

「くそ…まさか、海賊に助けてもらうなんてな…」

アギトが小さな拳を強く握りしめる。

マーベラスは相手を見ながら考える。サイファー「エクリプストライバー」を…。

「みんな、こいつに賭けるぞ…！」

…マーベラスがモバイレーツ本体の鍵穴へ先ほど、手に入れたレンジャーキーをセットすると、続いてジョー達もレンジャーキーをセットして、回した上部が展開すると同時に電子音が発声された、その時だった…

《仮面ライダーアギト、カブト、ブレイド、ディケイド、パンチ
ホッパー、キックホッパー!》

「なによこれ…?」

「…なつ、いったい何が起きたんだ…?」

「…それは俺達が聞きたい!」

「……何なんでしょう?」

「!?!? 皆さん!これ、仮面ライダーですよ!?!」

「カメンライダー……何それ?」

ゴーカイジャー達は見たこともない姿に驚く、相手もちろん、驚
いていた。

「!?!? 何だ、その姿はっ!」

「仮面ライダー……!?!?。何故だ、何故あいつ等がッ……?」

「お前ら……話は後だ……、まずは、あの眼帯女をぶッ潰す!」

「いきなり、現われて何を言っかと思ったら……。」

「…ふん、弱い奴ほど弱く吠えるか?」

ジヨ一の発言にサイファ一がキレる。

「！？ 言つたな、我々に手を出す愚かさを…貴様ら海賊の死で改めて世に知らしめてやる…我々を追おうとしている馬鹿な特務の連中にもな！」

マーベラスはパンチでケーニツヒ・リアクテッドを捌き、隙を見つけてはキックで攻撃する。

だが、サイファ一ももう一つの剣でジヨ一を翻弄する。

《ライダーキック！！》

「でやあああッ」

そして、マーベラスはライダーキックによる、回し蹴りを喰らわせる。

だが、相手はそれほど甘い騎士ではなかった。

ガキイン！

「私に通用すると思つたか！」

「…ふん、思つてねえよ、ゴーカイチェンジ！」

《仮一面ライダー龍騎！！》

仮面ライダー龍騎にゴーカイチェンジする。

「な、なんだ…また姿が変わった…?!」

「…。」

「さて、いくぜ！眼帯女！」

マーベラスはサイファーに近づき、懐に入りソードベントによる剣撃を放っていく。一撃一撃が重いマーベラスの剣撃にサイファーは押され、最後はストライクベントで近くにあった警邏隊車両のど真ん中に吹っ飛ばされる。

「ぐおッ！」

「倒れるには早いだろ？まだまだこれからだぜ」

体勢を立て直したサイファーはケーニツヒ・リアクテッドで切りつける。

「ウオッ！？チ…ッ！」

ケーニツヒ・リアクテッドによる攻撃にマーベラスは耐えきれず怯んでしまう。

「はっ！」

「私たちを忘れてない？」

アイムとルカは至近距離に潜り込み、同時に蹴りを喰らわせ、吹き飛ばした。

《ライトニングスラッシュ！！》

「ッ！」

ライトニングスラッシュが決まり、サイファーは倒れる。

「こいつは確かに便利だな！」

ライダーの力を巧みに使い相手を追い詰めていく。

《ライダージャンプ！！》

「はっ！」

「たあっ！！！」

「…ガハッ！ハア、ハア…」

サイファーが倒れている中、…マーベラスは倒れているサイファーを見て鼻で笑っていた……。

「無様だな、凶悪犯……」

マーベラス達を睨みつけ、拳を握り締めながら小刻みに震えていた……。

「……………クッ！覚えていろ！」

「ちっ、逃げたか…」

果たしてフツケバインの目的とは…？

B・S、47 割れたメダルと元六課とBADANの目的

過去、オーズの世界

ある砂漠を歩く1人の青年。

彼の名は「火野^{ひの} 映司^{えいじ}」かつて「仮面ライダーオーズ」としてメダルで出来た欲望の怪人「グリード」と戦い・・・騒動後、すぐに日本を飛び出し、異国のこの地へと来ていた。

「凄い空だ・・・。こんな広い空は日本じゃ見られなかったよな・・・」

何処までも続く真つ白な砂漠。日に照らされ、貫ける様な空の下でキラキラと輝く地表は素晴らしく綺麗だ。

（アंक……お前のことは忘れない、絶対に）

映司は赤いメダルを右手にジッと見る。

正し、そのメダルは2つに割れており、使う事が出来ない。

（……クヨクヨしたって仕方ない。）

旅はまだまだ続く・・・が、次の瞬間、

「なんだッ!？」

強烈な光に包まれ、映司は世界の狭間にいた。

「よお、オーズ！久しぶりだな！」

ハードボイルドを気取った様な青年、

「！？ 君たちは・・・W！」

髪をクリップで留めている少年、

「やあ、風都タワーの時はありがとう・・・って、それどころじゃなかった。」

映司の目の前に現れたのは、風都を護る二色の戦士”仮面ライダーW”に変身する2人だった。

「そうだったな・・・俺たちは今、”BADAN”って組織と戦うために・・・」

「あっちこっちの世界を回って、仮面ライダー達を集めているんだ・・・って、どうした？」

映司は2つに割れて、使う事が出来ない赤いメダルを見せて答える。

「ゴメン、協力したいけど・・・それに、オーズのベルトも鴻上さんに預けて・・・。」

「その問題は解決済みさ！・・・ハイ。」

髪をクリップで留めている少年は、バースに変身するのに必要なツール『バースドライバー』を渡す。

「!?・・・どうしてこれを？」

「バース・・・」後藤慎太郎”から、預かってきたんだ。」

「おい、フィリップ！そんなことよりも”BADAN”の事、説明してやれ！」

「・・・そうだったね。」

”BADAN”かつての歴代暗黒組織（ショッカー／ミュージアム）を裏から操っていたとされる秘密結社。BADAN総統が支配している。歴代暗黒組織を遥かに凌ぐ科学力と戦力を誇る。時空を操作することが可能な時空破断装置を使用し、世界を支配しようと企む。

「わかった、協力するよ！」

「ありがとう。それじゃあ、いくよ！」

フィリップが『某熱き冒険者風』に指を弾くと・・・再び、強烈な光に包まれた・・・

戻って、現在『新暦79年』

ヤミーを片付けた、翔太郎達はティアナ、Aイクスと合流する。

「・・・アंक？アंकなのか？」

「！？ 映司、お前！何で生きてやがる！？」

Aイクスは映司を映司はAイクスの腕を見て驚く。

「おい、2人とも。話が噛み合っていないぞ。」

『！？』

「・・・そうだろう、だって2人はそれぞれ”別のオーズの世界”から来たのだから・・・。」

3人が話していると、フィリップがやって来る。

「フィリップ！」

「あなたは？」

フィリップは語りだす・・・

「・・・それをこれから、いろいろ話そう。」

彼は語る。自分達が来た理由、六課の知らないライダーシステムの事、割れたタカメダル以外の全てのメダルが破壊された”オーズの世界”の事、かつての”デンライナーの事件”で分岐してわかれた”別のオーズの世界”の事、“BADAN”がこの世界に来てること。そして連中が動き出すこと。

フィリップが全て、語り終わると部屋は静寂に包まれる。

「これでいいかい？」

『……』

という意味を込めて元六課メンバー達を見る、

「ご苦労様、仮面ライダーの皆さん。ゆっくり休んでな。」

そういつと、全員解散する。

数時間後、

「おい、映司。割れた”俺”を渡せ！」

「いいけど、つかえん」「いいから寄せせ！」……」

Aイクスは割れたタカメダルを映司からウヴァって、腕に取り込み・
・目を瞑ると……”記憶”を読みはじめる。

「……なるほどな、大体わかった。「ディケイドのまねっこかい
？」うるせえ、ほらよっ！」

フィリップの突っ込みをよそにAイクスは”割れてないタカコア”
を渡す。

「？ これ、割れも……「そいつは駄賃だ、割れた”俺”は預か

る！」でもなあ……。」

「とっておきなよ。問題無いみたいだし、後で何か役に立つかもね？」

「……わかった、『今度』は大事にするよ！」

「ふん！」

名も無き荒野。

誰にも知られず、誰の記憶にも残っていないその場所に彼は立っていた。

くすんだ色の帽子をかぶり、丈の長いコートを羽織った男、彼はそのどこまでも続く荒野を遠い眼で見つめ続ける。

その右手に持っていた物に視線を落とし、強く握り締める。

それは一本のメモリースティックだった。

「E」の文字が記されたそのメモリーから、彼の意思に呼応するかのように電子音が流れる。

「……止めなければ!」

『エターナル!』

B・S、48 Iより豪快なCとWメモリと酢こんぶ

——六課本部

「みんな、ミーティング中に悪いが…会って貰いたい人物がいる。」

クロノがそう言うと、一人の男が部屋に入ってくる。

「てめえは！」

「ジェイル・スカリエッティ！」

喧嘩腰になるフェイトとヴィータ。

「ちょっと、待ってくれ！みんな、詳しくは彼から話をきいてくれ。」

「どういうことなの？」

ジェイル・スカリエッティは話を始める。

「私の名は「ニードル」仮面ライダー達が戦ってきた「ショッカーからクライシス帝国」まで全ての暗黒組織を裏で操っていた組織“バダン”の元戦闘怪人”ヤマアラシロイド”だった。」

『だった？』

その言葉に、疑問を持つ六課一同。

「話を続けて。」

ジェイル・スカリエッティの中身ことニードルは話を続ける。

「奴等の最新技術で蘇った、私たち”BADANの改造人間”は戦うことを嫌い、奴等に反発し、こういう事になった……。」

「なんで？」

スバルが質問するが、ニードルはいきなり話を変える……。

「『からだの部品とりかえっこ』や『いれかえロープ』という物を知っているかな？」

「あつ、あたし知ってるぞ。……確か、はやてが昔読んでた……漫画だ!？」

ヴィータははやての読んでいた”某ネコ型ロボット”の漫画を思い出す。

「……話が早い、我々BADANの改造人間は脳をジェイル・スカリエッティと数体あるクローンとを奴等の最新技術で入れ替えられたんだ。怪人の中にそんな、能力を持った奴もいてね……。」

「……何!？」

六課一同は驚いていた。

「1ついいですか？確か、彼のクローンは・・・。」

処分されたはず・・・だが、

「表ではな。だが、君達の上層部に連中のスパイがいたようだ。」

フェイトが聞くと、ニードルは答える・・・。

「ッざけんな……！」

「ニードルさんに怒っても仕方ないです。」

キレルヴィータを抑えるリイン。

「じゃあ、何で、お前らは戦いがイヤになったんだ!？」

「・・・分からない・・・私達のような連中でも「良心」という物があったのかもしれないな。」

ニードルがヴィータに聞かれると答える。

『・・・』

弱30秒静かになる。

「それで、ニードルさん。これからどうするん？」

「このまま、生きていくしかないな……罪は償うつもりだ。」

次にはやてが聞くと、それも答える。

「仮面ライダーの敵だった人の中にもいい人がいたんですね。安心しました。」

「そんなもんじゃないさ、クロノと言ったね？そろそろ……」

エリオの質問に首を横に振る。

「分かった、行こう。」

ニードルはクロノに連れられ、去っていった。

ミッド港 廃工場。

埃にまみれた装置の並んだ広い作業部屋の中に、数十人の場違いともいえる黒装束を着た男の姿があった。

「このコンテナはこっちへ運べ」

男達が口々に話し合っていると、作業部屋の大きなドアが開き、外から巨大な装置の乗った台車を押した数人の白衣を着た研究員らしき人間が入ってくる。

「例の装置…確かに持ってきた…」

研究員達を代表して、一人の男が話しながらケースを取り出し、ケースの蓋を開くと、そこには宝石のように輝く…

「これが注文の品…」ワイズマンガイアメモリ」だ！」

男が説明すると、黒装束を着た男達が皆、歓声を上げる。

「すばらしい！これが例の『wのガイアメモリ』ですか！美しい…早くその内に秘めたパワーを目の当たりにしたいものですな」

男がそう答えると、どこからか響くような声が聞こえてくる。

「いいえ、それは僕がさせません！」

そこに聞こえるはずのない、聞き覚えのない声。それが辺りに響き、男達は一斉に声のしてきた方を見やる。

「な、何だお前は！」

声の主——エリオ・モンディアルが叫ぶと、今度は逆方向から声が響き渡る…がそれは、バッタカンドロイド。

「現行犯で逮捕します。抵抗をしなければ、弁護の機会があなたにあります。同意するなら、武装の解除を」

途端に、ざわざわと男達に動揺が走った。

「くそっ、やってしまえ！」

男達が一斉に身構える。

懐から取り出したのは、拳銃でもナイフでもなく、彼らが取引する商品、ガイアメモリそのものだった。

《ジョーカー！》

男達がガイアメモリを体に挿入、^{ドーピング}異形のアンデッドへと化しエリオに襲い掛かる。

「変身！！」

エリオはアンデッドのエネルギー弾をかわすと、彼はドライバーを腰に装着しセルメダルをスロットしグリップを回転させる、

《カポーン！！》

そしてエリオはバース・ストラダへ変身し、前に出る

「やれっ！」

リーダー格らしい男の号令と共に、異形のアンデッド達が一斉に彼に襲いかかった。

「くっ！」

バース・Sの目の前の敵は格闘戦を挑み迎え撃つ。

「はぁっ！」

バース・Sは走り出し異形のアンデッド達にとび蹴りをする。
異形のアンデッド達はその場に倒れる。
だが、すぐに起き上がる。

「くっ！やっぱしぶとい・・・だけど！！」

当初こそ圧倒的な数で圧していた異形のアンデッド達だったが、所詮はまがいもの。その力の差の前に、徐々に巻き返される。

「これで決めます！」

バース・Sはセルメダルを一枚取り出しスロットに入れグリップを回すと中央のセルリアクターが開き輝きを放ち機械音を発音する

《ロケット・アーム》

そして右腕のカプセルオーブから様々なネジ等が出現しバースの右腕に鋼色のロケット、『ロケットアーム』が出現し、

「ぐあああああああ！」

バース・Sの拳を受け縦一列に異形のアンデッド達に炸裂し、爆炎とともに断末魔の声が上がり、1度に数人の異形のアンデッドからメモリが排出され砕け散る。

バース・Sは再びスロットに入れグリップアクセラレータを回し中央のセルリアクターを開き輝きを放ち機械音を発音させる

《シザースアーム》

すると、『シザースアーム』が左腕に出現する

「はあっ！」

《セルバースト！》

刀身振るい、目の前の異形のアンデッド達に、次々と斬撃を叩き込んだ！

「ぐがあああああ………」

セルバーストによる、斬撃をともに受けた異形のアンデッド達は、爆炎を上げてメモリを排出した。

「ふう……。…」

「無駄のない動きだね、一丁あがりか」

「この軽やかな動きは今後の訓練に参考出来るんじゃないかな？」

変身を解いたエリオの下へ、メモリガジェットやカンドロイドで彼の様子を見ていた翔太郎達が駆け寄る。

「ええ。………ですが、まんまとやられました」

「は？」

エリオの言葉に最初は訳が解らない顔をしていた翔太郎だったが、
彼等の視線の先に例のコンテナがあることに気付き目線を移す。

「な……………何ッじゃ！こりやあああああッ！」

「酢昆布の箱だ！」

コンテナの中に入っていたのはガイアメモリではなく、酢昆布の箱。

「酢昆布の箱だと！？」

「酢昆布の箱お！？」

予想外の答えに翔太郎と、映司は思わず叫びを上げる。

ガイアメモリではなかった……。

「おい……………どういうことだ……………ガイアメモリの取引はこんな
んじゃないのかよ」

そう言つて呆然とする翔太郎のスタッグフォンに、通信が入る。

メモリガジェット。対応するメモリで自律行動を行い写真を取つて
敵の偵察をしたり、携帯電話として通信機として使用できる特殊ツ
ールである。

「何だよ、こんな時に！……………おい、フィリップ！どうなってる
！？」

『その取引は囷だ！ 2重の囷とはな。やってくれるよ”バダン”』

も。』

「ああ……って感心してる場合か！ 行くぞ！」

ガジェットでフィリップに連絡を入れ、3人は彼の待つ場所へと急いだ。

その頃、

「スペシャルやしな！」

「どうしました？主はやて？」

「いつてみたかったんよ。」

——1人の男が何かを発動させようとしたその瞬間、何かがぶつかった。女性が遠くに離れて、こちらの様子を見ている。

「何者だっ！」

男は目の前にいた女性に怒鳴る。だが彼女は意に介さない。

「ガイアメモリの取引現場ね。この場の全員、ガイアメモリ違法取引の容疑で逮捕するわよ！」

そう言って、女——ティアナ・ランスターは武器を向ける

「管理局!？」

男が構えるが、奥にいた壮年の男がそれを遮った。

「待て。ガイアメモリのテストをするいい機会だ。私に任せてもらおう」

《ベノスネーカー!アップグレード!》

壮年の男はジェノサイダーへと、変貌した。

ティアナは懷からバーストライバーを取り出すと、腹部に装着した。

「変身っ!」

ティアナはドライバーを起動させる。

《カポーン》

バーストライバーから音声が発せられ…電子音と共に装甲がティアナの体へと纏われていく。

「!？ 貴様、仮面ライダーか!？・・・片づけるっ!」

「はあっ!」

バース・Mはジェノサイダーに蹴りを放つ。ジェノサイダーはそれを避けて後方に飛ぶが、バース・Mはそのまま走りバースバスターを構えた。

「たあっ！」

そして、トリガーを引く

バースバスターのメダル弾が発射される。

「ふん！キカンナア「だったら、これはどうかしら？」・・・なんだと！！」

バースもメダルポッドを銃口へセットし、狙いをジェノサイダーへ定める

『セルバースト』

そして必殺技をジェノサイダーへ向けて放つと、突然の砲撃に防御出来ず、ただ黙って一撃を受けていった。

「ぐはあああああああああっ！」

すると、ジェノサイダーの体が人間に戻り、その体からガイアメモリ強化アダプターと壊れたガイアメモリが抜け出た。

B・S、49 空港とRヤミーと復活のD

—— 場所は変わり、ミッドチルダ北部臨海第八空港。

その地域は、今は夜の帳が降りている。

しかし、その空港と空港近辺は、朱い明りに照らされていた。

空港に火が回り、空港そのものが薪の様に燃えている。激しく炎が舞う。

「早く逃げてください!」

「こつちです!」

吹き荒れる風は熱風になる。

逃げ惑う人々。

原因は貨物に紛れ込んだ、”バダン”の送り込んだ——”ライ
ダーヤミー軍団”の特殊攻撃。

それによって、空港は一気に燃え広がった。

—— ブー、ブー、ブー—— !!

警報が鳴り響く。

管理局地上部隊も既に動いているが、いくら、高ランクの魔導師とはいえ、やはり手が回らない所が出てくる。

「おい、お前はここを脱出しろ！」

「隊長！？」

「そうだ、お前の足ならなんとか救援を呼びに行ける」

「先輩……」

「ああ……ぐっ！？」

その時、時空管理局の隊員の一人の胸元から、一本の刃が突き出てきた。

その刃はズバッ！と、胸から肩へ掛けて切り抜かれ、一瞬で絶命。彼を殺したのは……、

「ら……ライダーもどき……！！」

『バダン』の刺客……ライダーヤミー軍団。

見た目こそライダーだが、その中身は全てライダーシステムのバツタ物で強化された『グリードによって生み出されたヤミー』。

恐らく、彼等はどこかで隠れて隙を狙っていたのだろう。

同僚を殺されて呆然とする隊員に、ライダーヤミー達は武器を振り上げ、次々に襲ってきた。

「うわっ!？」

隊員はライダーヤミー軍団の攻撃を避けて猛攻を加える。ライダーヤミー軍団も隊員に攻撃を食らわせる。そして、扉の向こう側へ逃げ出す。

「逃がさんっ!」

ライダーヤミーが駆けだそうとするが、それは叶わない。隊長に吹き飛ばされたからだ。

「悪いがここは一步も通さんぞ、ライダーもどき共!」

「そうだ、ここから先は行かせないぜ!」

二人が構えを取る

「キシヤアッ!!!」

二人はその軍団へと向かって行った。

「——あ、っ……」

隊員の声はあまり出ず、ただの小声のみがその口から漏れ出てくる。

熱で喉は焼け、周りに漂う炎が幼い肌をチリチリと焼く。

待っててください・・・すぐに助けを呼びますから――

上官を置いて自分は走り続けている。救援を呼ぶために。

言葉が出ない。もし出ていたとしても、その口から出ていたのはかすれた声だけだっただろう。

そして、この状況に耐えきれずに叫んでいたかもしれない。

隊員は、前のめりに倒れた動かない体に鞭打ち、仰向けに体勢を変える。

見上げるのは、容赦なく辺りを燃やす炎の色を映した、公共施設特有の高い天井。体が思うように動かない。体力が限界だ。もう駄目だと、そう悟った。

「――え……？」

そんな彼の視界に・・・

『！？』

突如、人気のない場所の影から出てきたのは、・・・。

タイガーロイド「おまたせ、蜂女……ん？ずいぶんと準備が早いね。待ちわびたかい？」

蜂女「始まったのに、まだ行っちゃだめなの？」

タイガーロイド「じきにきれいな花火が見えるはずだよ。」

蜂女「ヤミーガジェット？」

タイガーロイド「だったら、君に真つ先に報告しているさ。私の玩具^{おもちゃ}の動作テストなんだよ。破壊されるまでのデータがほしくてねえ。」

蜂女「壊されちゃうの？」

タイガーロイド「私はあんな鉄くずに直接戦力は期待してないんだよ。私の作品たちがより輝くためにデコイとして使うガラクタさ。」

蜂女「そう……じゃあせつかくだし、私にもやらせてくれない？」

タイガーロイド「それはかまわないが、もう少し待っていてくれ。私から連絡する。」

蜂女「……………わかった。」

タイガーロイド「しかし……おとなしかったあの子があそこまで出しゃばる様になってしまうとは……これもあのセルメダルやガ

イアメモリの影響かな。フッフッフ・・・やはり私の作品はいい出来ばかりだ。」

タイガーロイドは不気味に笑う。

B・S、50 トーマと蟲と危ない奴等

その頃、未来『新暦81年』

やめて、やめてくれ痛いんだ！

傷つけようとする意思が…破壊しようとする力が…

「お前から欲望を感じる。」

頭の中に突き刺さる・・・。

なんで…みんな…どうしてみんな…

「お前は『欲望』が渦巻いている。近くでみていると心地いい」

俺や、俺が大切にしてるもの…

酷い事ばかりするんだ！？

「何故だと？そんなモン欲望に決まっている！！！」

「誰？…俺の『欲望』って何だよ？」

・傷つけるものみんな、邪魔するものみんな・・・

「・・・ククク、そうだ！もつと！」

怖い戦いも、全部…みんな…

「くくくく・・・はははは・・・。」

消えてなくなればいい！！

「・・・まあいい。お前といると俺としても心地がいいからな・・・」

「えっ、」

男は一枚のメダルを取り出し、蟲の怪物となった。

「うわあああああああああああああああ！」

「その欲望、使わせてもらう」

チャリン

「あ、ああ、あああ…！？」

ズル、ズ、ズルルル…

怪物の名前はウヴァ。グリードの一人だ。ウヴァはトーマの額にバダシから預かったシヨツカーメダルを入れると彼のリアクトが解け

ると同時に、リアクト時の彼に似たヤミー……と言つよりグリードのような怪物が体から出てきた。

「な、何なんだコレ。」

「こいつは『エクリプスグリード』。お前の欲望と”悪意”から生まれた。……さあ、行け!!」

エクリプスグリードは何処かへと去っていった…

「あんた、何なんだよ!?!」

「お前の欲望…『怖い戦いも、全部…みんな…消えてなくなればいい!!』とドン底から願っていただろう。それが俺には結構心地いい。」

『???? ???? ??::??』

「ウヴァ……アナタ、いきなり飛び出したと思ったら……何処に行ってたの?」

「少し試したい事があってな。」

「……ふうん。君のショッカーグリードを観察に使うんだから……データはちゃんと取ってよね。」

「あれ1体で、データが取れるなら安いモンだ。しかし……」世界を殺す猛毒のショッカーグリード「か。」

「奴等が、ヤミーを感知すれば必ず来るよ……それに奴等は必ず戦うよ。ちゃんとステージは用意してきたからね。」

カザリは不敵に笑っていた。

ウヴァは2枚の変わった「コアメダル」をメズールに見せた。

「俺達「グリード」もさらに、進化すべきだと思わないか？ 奴等のように。」

ウヴァは不敵に笑った。仮面ライダー、管理局の魔導師……バダ

ン、フツケバイン・・・ウヴァ達「グリード」は自分達も何かを変え進化しなくてはならないと考えた・・・過去のように進化を怖がっ
ていては駄目だと・・・。

「・・・時代遅れのグリードには明日は無いの？」

「そう言う事だ。」

空間は沈黙に包まれた。

バダン幹部のアジト

「ほう。ガジェットを破壊したのは局の魔導師か、それとも“当たり”
”を引いたかな？」

『断言は出来ませんが、恐らく後者ではないかと・・・』

タイガーロイドとバラのタトウの女、最近ショッカーの幹部になった者である。

「素晴らしい。さっそく追撃をかけよう……」

バラのタトウの女はタイガーロイドに質問をした。

『それとですが、輸送途中だった“シヨッカーライダー10号”のシグナルがこの辺りのポイントで消息を絶っています。いかがなさいますか?』

「10号が?ふむ、追撃と同時に回収もしたいが……」

「ねえタイガーロイド、それならアタシも出たいんだけど……」

「蜂女、君か……?」

『駄目よ、あなたの装備はまだ調整中なのよ』

「もし当たりなら、自分の目で見てみたい」

「大丈夫さ、焦らずともアレはいずれ必ず私の所にくる。それまで落ち着いて待っていてほしいね……」

「……分かったわ……」

蜂女が去って行くのと入れ替わりに、人工イマジンを首にぶら下げた黒いイマジンがやってきた。

「タイガーロイド、その当たりというのはどういうものなんだ?」

タイガーロイド「おやおや、今度は君達か……丁度良いところに

来てくれたね、これからその当たりの回収に行つてきてほしいんだ。君達もそろそろ外での戦闘を試みたいと思わないかね？恐らく管理局の者も現れるかもしれないし、何より“彼ら”も来てくれるかもしれないよ？」

「ふんっ、いいだろう。もし奴が来るのであるなら今度こそ倒すまでだ・・・行くぞイヴ」

「ああ・・・」

ネガタロスは去っていく、姿を見て…タイガーロイドは不気味な笑みを浮かべる。

B・S、51 カレンと人形と大喧嘩

《…ミッドチルダ…フッケバイン》

「……まったく、酷いことをしてくれました。」

「知るか、僕達は“メダル”を稼げればいいんだよ……ハハッ！」

カザリの悪ふざけな態度に……

「冗談じゃありません！僕らやこの船の操舵手が死ぬところでしたよ！」

フォルティスは怒るが、ウヴァは舌打ちで返す。

「はっ！凶鳥だけに、お前らは”チキン”か！？」

「クソカスがあ！」

ウヴァの言葉にキレルヴェイロン

「この艦の航行責任者として必要のない危険は避けたいです。」

ステラの言葉に、

「何かしら？お譲ちゃん？」

フッケバインファミリーはエクリプスヤミーとリアクターヤミーを造った事に怒り、グリード達と喧嘩していた。

「……ていうか、ちょっとやりすぎだよドクター。このお人形とっ
ちやうよ?」

「YA・ME・RO!」

キヨちゃんに興味津津で声を荒げる女性と渡すまいとする真木、

「アンコじゃねえ!俺はアंकだ!って、お前は誰だ!?」

後ろから明るく陽気な女性が現れる。

「カレン……」

「姉貴。」

「YES」フツケバイン一家の首領”カレン・フツケバイン”ただ
いま現着!」

再開を喜ぶファミリ―

「そう、貴女がここのボスってことだね。」

「そういう事。とにかく、もし私の家族が怪我したら…本気で君達
やっつけちゃうよ!」

カレンは本のような物を開こうとする…

「と言われましても、私にもどう答えてよいものかと、とりあえず
君は身に起きた変化に気が付くべきでしょう」

「やってみる！」

「俺もメズール傷つける奴、許さない！」

喧嘩腰のウヴァと、ガメル

「やめなさい、みんな。…カレンって言ったわね？わかったわ。」

「僕もみんなも、これから気をつけるよ。」

と力ザリ

「よろしい……じゃあ、いろいろヨロシクね。」

カレンは本の様な物をパタンと閉じながらにつこり笑う。

「ふん。（まあいい、利用させてもらっただけだ……）」

ウヴァは気に入らないと内心思いつつ、悪巧みを考えていた。

その頃、ミッドのとある市街

その市街の上空に突如空間の歪みが起こった
何だろう？

そう思って空を待ち行く人達が見た

するとその空間の歪みからは数体の『ヤミー』と数十体の『屑ヤミー』が現れたのだ

そして、その中央には『魔力』を吸収し進化した『真・エクリプスグリード』が居た

『ヤミー』達が突如町を破壊し始めた

『真・エクリプスグリード』の肩から放たれる赤白いレーザーが街を焼き

『ヤミー』から放たれる怪光線が車を吹き飛ばし道を砕く

それに恐れを感じた町の人々が逃げ惑う

謎の敵の襲撃の知らせを聞きつけたライドベンダー隊は当然迎撃の為隊員を出撃させる

大勢の武装隊員が『真・エクリプスグリード』を発見し攻撃を開始する

隊員達の持っていた武器から数発の弾が放たれる

一人では数発だが何十人も居る為その数は何十発にも及ぶのだ
その何十発の弾が全て『真・エクリプスグリード』に当たり爆煙が
辺りを包み込む

「やったか？」

とある武装隊員がそう呟いた

だが、その直後赤白いレーザーが隊員達を襲う

B・S、52 欲と毒と闇

数時間前——フツケバインアジト

トーマは個室に閉じ込められていた。両腕は縛られ椅子に座らされている。

「うつ。」

カチャッッ！

「……ああ、おはようトーマ君……いいタイミングで起きてくれましたね。」

「ここはどこだ？」

優しいような感じの青年が、ドアを開けて入ってきた。

「酷い頭痛がするでしょう？気分がよくないと思いますが、もう少し我慢しててください、まあ……これでも飲んでください」

「うつ。」

優しいような感じの青年がトーマに薬を飲ませる暫くした後、青年はトーマに話しかける。

「……頭痛がいくらかスッキリすると思いますよ」

「あんたらは？」

「ここは僕らの本拠地で、僕らは世間から凶悪犯罪者集団なんて呼ばれてるファミリー「フツケバイン」のメンバーです。」

フォルティスはそう言って、腕に刻まれた刺青を見せるのだった。

「……おれはドウピル、コイツはフォルティスだ。」

「君に分かりやすく言うなら「ヴァイロン」のお仲間ですね」

こいつらがツ！と、立ち上がるうとするが…両手を縛られており、動けなかった。

ガタツ

「…ああ。最初に言っておきますよトーマ君、現時点で僕たちは君の敵でも仇でもありません。君は故郷を破壊した犯人を捜していて僕らのマークが手がかかりだったとか？…ですが残念ながらというべきか、その集落破壊は僕らの仕業ではありません。」

えっ？と思いつつも、トーマは怒りの表情を浮かべながら睨み続ける。

「！？」

フォルティス「それに今は過去よりも現在の事を君に説明する必要があります…よければ少し話を聞いてくれませんか？」

「・・・？」

——トーマは黙って彼らの話を聞いてみる。

——トーマは、フォルティスという青年の話を苦しい体制で何時間も聞かされていた。そんな時…

「・・・ヴァイロンに頼まれて調べたんですよ君の故郷を壊したのも住人を殺したのも僕らではありません・・・少し調べてもらえば分かりますよ僕らがよくやる集落殲滅と君の故郷の壊滅とは状況も結果もかなり違います。」

「!？」

彼は「そんな馬鹿な!？」と言わんばかりの表情を見せる。

「そしてなにより「君が生き残ってる」のが僕らの犯行ではない証拠です。僕らが行けば集落殲滅で理由なく生存者を残すようなミスはしませんから。」

平気でそんな事をと、に怒りを露わにし、睨みつけ…言い放った。

「やつぱり…あんたら凶悪犯なんだな？」

「だからそう自己紹介したじゃないですか？」

そんな時、アナウンスが鳴る。

『フツケバイン、軌道ポイント到達まであと16分』

「おや、もうそんな時間ですか？コホン、続きですが、僕たちは以来や報酬があるとき、武器を向けられたとき、僕らの障害となるとき、感染者である僕らが生きるために必要となるとき、そういうときには遠慮なく殲滅させてもらってます」

「生きるために…ということだよ、それ？」

トーマが質問すると、辺りの景色が歪み始め、歪みが収まるところには、何かがいたのだった。

「…興味深いね……僕たちにも聞かせてもらえるかな……？」

「っただ…ここは欲望の塊だな、居心地がいい。」

フォルティス「やあ、待ってましたよ！アंकさん、カザリさん！」

2体は「ウヴァ」と「カザリ」「オーズの世界」のグリードという怪人だった。

「続きを聞かせてくれないかい？」

フォルティス「そうでしたね… EC感染者は人を殺さずにはいられません、自分が死なずにまともな精神と生命を維持するには人を殺し続ける必要があるんです。」

「くくく、ここは欲望の渦だな。」

「ぞくぞくするね。」

「な……！」

…2体のグリードの発言に、驚くトーマ。グリード達の姿、言い方に彼は寒気が走る。

「君も感じたんじゃないんですか？ デイバイダーを手に行っている時の常軌を逸した殺意と憎しみ…それがエクリプスウィルスが呼び起こす強烈な破壊と殺戮の衝動です。」

「興味深いね。」

（何だ、この人たち？）

「感染が進めば通常の感染者なら発狂するレベルの肉体的苦痛も伴うようになります、何らかの方法で耐え続けたとしてもその先に待っているのはウィルスによる体組織の自己対滅のみ。」

「人間もここまで狂ってるとはな…。」

フォルティスの顔色一つ変えずに破壊と殺戮、発狂などと言い放つ姿にアंकは、面白がっていた。

「ああ、自己対滅も分からないですね、こんな物体を見たことありませんか？」

「これは、肉塊？」

（これ、リリイを助けた施設で！？）

「自己再生能力が暴走して単なる肉塊に変わるそれが自己対滅、この模様、見覚えがあると思いますが…分かりますか？君はもう随分感染が進んでいるんです。」

「ゾクゾクするね。」

「意識を失ってもなおリアクトが解けないのも感染が進んでる証拠です」

「ましてお前はリアクトプラグ抜きでの非常に危うい変化だ、今の瞬間に対滅の兆候が起きてもおかしくない」

トーマは、彼らの顔が「悪魔」に見える、と心の中で思っていた。

「さて、ここからが本題です」

「まっけたよ。」

「……我々フツケバインの構成員は全員がエキリプスの感染者ですが僕は正気を保ちウィルスに踊らされることなく活動している。その理由は何でしょう？」

「それは…」

トーマが言おうとすると…。

「『ウィルスを制する方法を知っている』でしょ？」

「正解です聡い子は好きですよ。」

カザリに先に言われてしまった。

「……そういつ、お前もずる賢そうに見えるがな！」

「……どうも、さて…そこで一つ相談ですトーマ君とグリードの皆さん、僕らと一緒に行きませんか？」

「もちろん！行くさ。」

「！？」

フォルティス「…仲間が増えることは心強いことですし…僕らも君の目的達成に多少なりとも協力できます…人殺しには抵抗があると思いますが…！まあ、すぐに慣れます僕もそうでした。」

フォルティスが「まあ、すぐに慣れます僕もそうでした。」と聞いた時「こいつは…」と思っていた。

「嘘つけ、俺はわかる…お前には迷いが見えない」

「君が選べる道は幾つかあります…どれを選べと強制はしません…ですが。」

「何かな？」

「君がもしエクリプスの運命を受け入れて僕らと共に来るのなら……僕らは同じ運命の共同体として君を歓迎します。」

フォルティスの笑顔は普通ではなかった。

「面白い事になってきたね、ウヴァ。」

「ああ、逃げたところで殺戮衝動と自己対滅との戦いだがな、トーマだったか？お前が感染者である以上……お前はもう世界を汚す毒物だ、誰であろうとお前を救ってはくれん……たとえ神であろうともな。」

ウヴァ達も、ざまあないとトーマに言い放つ……

（何だよこいつは？）

「ああ、それから基本的に逃げ出すのは諦めた方がいいですよ、特に君一人ならともかくお友達を連れてというのは絶望的ですな。」

「俺たちの本拠地飛空艇「フッケバイン」から飛び降りるのは自殺行為に等しい。」

——彼らはそう言い、個室から出ていく。

「あの少年おとなしく恭順すると思うか？」

フォルティスとドウビルは通路を歩きながらトーマの事を話していた。

「どうでしょう聞き分けのいい子には見えましたが……まあ、いずれにせよ……」

その時、フツケバインアジト内にアラームが鳴った。

『敵機接近。　LS級艦船です。』

「どうやら、来たようですね。」

とある岩島。

そこから現れる光の柱。その光の中から声が聞こえた。

「我は、闇の書の主なり。この手に、力を——」

謎の声とともに、オーロラが現れる。奥から今度は1つの黒い影が。

「——封印、開放」

《Freilassung》

その影はオーロラをゆつくりと抜け、”人の様な何か”の姿が現れる。

髪は銀、頭部に左右一对の小さな羽根がある。

そして閉じていた瞳をゆつくりと開く。そこにあるのはルビーのような紅い瞳。

足元には闇色に輝く、正三角形の何かの方陣がゆつくりと回っている。

闇の書の意志は、両腕を広げて空を仰ぐ。

「我は、闇の書の闇。わが力のすべては——」

闇の書の闇は大きく身体を開き、腕を左右に広げた。そして、ゆつくりと俯き息を吐き、右手を天に掲げる。

「——我は究極の力で、この世界を潰すなりな！」

《Diabolic emission》

頁の開かれていた本が、光を放つ。

掲げられた闇の書の闇の右腕の先、開かれた掌の上に黒い光球が生まれ、一瞬で数十倍にも巨大化する。

「すべてはゴミより生まれ、ゴミに戻るなりな……！」

顔を上げ、天を仰ぎ、静かな力ある声で告げる終焉。

「デアボリック・エミッション。闇に、染まれ」

光球が炸裂し、攻撃が放たれた。

B・S、53 油断と誘拐と逮捕

『フツケバイン』居住区

黒いジャケットに左手首には藍色の羽の刺青の男… ヴェイロンが居住区に戻ってきた

「おう！帰ったぞ、アルナージ！」

ヴェイロンが目にしたのは、テーブルいっばいに用意された豪華な料理の数々だった。

「ヴェイ兄おかえり！」

アルナージはテーブルに置かれた数々の料理を早速食べていた。

「土産は！？飯は！？」

「うるせー食いながらしゃべんな。」

そついい、指を後ろに指しながら言う

「土産の飯ならコンテナ中だ・・・トラッカー一台分盗って来た」

「ナイスヴェイ兄！褒美にこいつをファックしていい！」

ロブスターを半分に分け渡そうとする。

「いらねーよボケ…てめーの食いかけじゃねえか！」

「相変わらずノリ悪イなあ・・・」

そっついながら再びイスに座り、料理を食べ始めるアルナージ。

「そーいやフォルティスとビル兄が呼んでたよ、戻ってきたら顔出せて。」

「用があんならテメーが来いって言っとけ」

「オーライそいつアてめーで言いに行けあたしにや関係ねえ。」

食べながらそう喋る。

「おう、ステラ盗って来たメシな、その馬鹿が全部食わねーよう管理を頼むぞ。」

「ヴェーイロン！」

「噂をすれば・・・きやがったな。」

二人の男と一人の女性が部屋に入ってきた。

「結構かったな？」

「……メシを調達してきた。」

「そうですか……。」

『フツケバイン』居住区の近くに赤い船、「ゴークイガレオン」が飛行していた。

「着いたか？」

そう呟きながらモニターに指を指す緑のコートを着た男

「どうするマーベラス？ 奴等はいろんな意味でザンギャックより厄介だ！」

トランプをテーブルに叩き付ける、青いコートを着た男

「知るか……。行くぜ、奴等の所へ……。借りを返すためにミッドまでわざわざ戻って来たんだ！」

そして赤いコートを着た男「キャプテン・マーベラス」が叫ぶ。

「マーベラスはあいつ等の事、気に食わないみたいだけど、私は同情するな……。」

貧民の出身のルカは。ゴークイジャー加入前に、ザンギャックの武

器倉庫から盗みを働いたことがあるため、『フツケバイン』の連中のやり方に少し同情していた。

*

『機体外壁に接敵！破損箇所から内部に侵入されました！』

「これはまた・・・。。。」

「ふん、仕方が無いな」

「昼寝の邪魔しやがって！」

その時だった・・・。

ガガガッ！

「くっ！！？ 何だ！！？」

そこでフツケバイン達はマーベラス達に気付いた。

「失礼致します。」

「邪魔するぜ！凶鳥ども！！」

「貴様等は確かいつかの海賊ども！！」

「ここから去れ、そうすれば戦わずにすむ……。」

マーベラスは笑いながら、声を張る。

「ふん、いいたいことはそれだけか？」

「……最近の海賊さん達はお馬鹿さんなんですね？」

「うっさい！バカはあんた達の方よ！」

「僕はお前等みたいな奴等、大嫌いだ！！」

「毒に頼らないと、悪さを出来ないチキン野郎供とはうまく言ったな……。」

「糞粕が！！！」

マーベラス達の発言にキレたフツケバインは敵意をむき出しにし、襲い掛かる。

同時に、ゴーカイジャーの5人は「モバイレーツ」という携帯の様なものと「レンジャーキー」という鍵を取り出す。

モバイルーツを携帯の様に開き、レンジャーキーを差し込む。

『豪快チェンジ……!』

《ゴーカイジャー……!》

マーベラスは赤いスーツにマスクのゴーカイレッド、ジョーはそれが青くなった様なゴーカイブルー、ルカはそれが黄色くなった様なゴーカイエロー、ハカセはそれが緑になった様なゴーカイグリーン、アームはそれがピンクになった様なゴーカイピンクに変身した。

「ゴーカイレッド!」

「ゴーカイブルー!」

「ゴーカイエロー!」

「ゴーカイグリーン!」

「ゴーカイピンク!」

「ゴーカイシルバー!」

6人はそれぞれ名乗り……。

『海賊戦隊……! ゴーカイジャー……!……!』

最後に全員が名乗りを上げた。

「派手に行くぜ……!」

ゴーカイサーベルという剣とゴーカイガンで5人は構え、ゴーカイガンを撃ちながら突っ込んで行く。

アトムと鎧はぶら下がっていたロープを使いゴーカイガン、ゴーカイスピア（ガンモード）でアルナージを撃つ。

「コイツッ！！？」

「ハッ！！」

華麗な動きをしながらジョーはゴーカイガンを持つてる左手を後ろに廻し、ゴーカイサーベルで自分に襲い掛かるサイファールとつば競り合う。

「ハア！！ フン！！」

（こいつ、前よりも強く・・・！！！！？）

「アトムッ！！」

「承りました！！」

アトムはゴーカイサーベルを、ジョーはゴーカイガンをそれぞれ交換する。

マーベラスの方ではヴェイロンがマーベラスに後ろから迫りエネルギー弾を放った。マーベラスはゴーカイサーベルで受け止めゴーカ

イガンでヴェイロンを撃つ。

「うらあー!!」

「あん?」

ヴェイロンは険しい表情を浮かべ、ディバイダーをマーベラスに向けた。

「てめえな、調子に乗るんじゃないよ。死ねクソカス!!」

ヴェイロンはマーベラスに向けて、エネルギー弾を放った。マーベラスは咄嗟にそれを避け、ヴェイロンに近づき斬りつけるが、ヴェイロンはそれを避け、マーベラスに銃身を向け、マーベラスもヴェイロンに銃身を向けた。

「ゴークイガン!!」

『フレシエット・シエル』

二人はほぼ同時にエネルギー弾を放った。居住区は煙に包まれしばらくしてから煙は晴れるとマーベラスは膝を突いているが、ヴェイロンはほぼ無傷だった。

「ハッハア!!こいつア面白エ。ただの海賊じゃねってか。聞かせてみな!ここに來た理由は何だ?」

「気にいらねえやつはぶっ潰す!それだけだ!」

「クク……ハハハハ、そうかい、そうかい」

「何がおかしい!？」

「テムエら海賊つてのは面白エなあ。ハハハハハ、スゲエな!とんだクソカスだ!！」

「ブツ飛ばす!」

ヴェイロンは笑い出した。マーベラスは憤怒しながらヴェイロンに向かっていくとヴェイロンはエネルギー弾を放った。マーベラスがいた場所は煙に包まれるが……

「おりゃあああ!！」

(!？ コイツ、こんだけ叩きのめしても・・・!？)

ドウピルがハカセに斧を振り回して襲い掛かる。

「うわわわ!!？」

とつさに避けるハカセ。

「!」のお!！」

そのままゴロゴロ転がりながらゴーカイガンでドウピルを撃ちまくる。

「残念だ、無駄に命を散らすこともないだろうに……。」

ドウピルが自身の腕を切ると、禍々しい姿に変貌する。

「うわあ?!・・・だったら、こっちも、ゴークイチェンジ!」

《マジレンジャー!》

「やってやるぞぉ!」

「・・・空しいな、ならばここで碎けて消えろ!」

飛空挺フツケバイン内、マーベラスとヴェイロンは対峙している。

「ナパームファング!!」

ヴェイロンは自身の拳に炎を宿し、ナパームファングをマーベラスに放つ。

「くっ」

ヴェイロンがマーベラスに突っ込み、マーベラスはゴークイサーベルとゴークイガンを取り出しゴークイガンでヴェイロンを撃つ。

しかしヴェイロンは素早く避ける。

「素早しっこい奴め、ならこれだ!! 豪快チェンジ!!」

新たなレンジャーキーをモバイレーツに差し込むマーベラス。

『ハリケンジャー!!』

マーベラスは「忍風戦隊ハリケンジャー」のハリケンレッドに変身する。

「ハヤテ丸!!」

マーベラスはハヤテ丸という刀でヴェイロンに斬りかかる。

「オリアア!!」

「なんの!!」

しかしヴェイロンはディバイダー「928」で防ぎ、マーベラスから距離を取る。

「来やがれ!!」

「超忍法・影の舞!!」

前に障子が出現し、その裏で影となり、ヴェイロンに様々な攻撃を繰り出す!

「ぐっ……。クソカスがあっ!」

そして互いの技がぶつかり合う。

「グリーンスピッキング!!」

「ぐあっ!!」

肉体には肉体をと言わんばかりに、ハカセは魔法で伸ばした植物の蔦につかまって高速回転しながらキックを繰り返し、ドウピルを蹴り飛ばす。

「グリーングラントルネード!!」

さらに高速回転して、竜巻を引き起こせる。グリーングラントルネードが放たれた。

「くっ、調子に乗るなッ!!」

「いい弾丸だ、アタシ程じゃねえが、結構撃てるじゃねーか?」

アルナージはグリップ下部に巨大な銃器が形成された、実弾兵器を

構えている。

「それでは、参ります!! 豪快チェンジ!!」

「俺も!! 豪快チェンジ!!」

『ジュウレンジャー!!』

「プテアアロー!!」

「獣奏剣!!」

「チッ!!」

その頃、

「リリイ……!?!リリイ、しっかりして!!」

『トーマは?』

アイシスと言う少女がリリイと言う少女を介抱していた。

「トーマなら変な怪物にメダルみたいなもの埋められてノビてるわ……」

『その、私も埋め込まれて……』

「あんた達、大丈夫!？」

「あんたこそ誰!!？」

ルカがどさくさに紛れて救出に来た。

「安心して、あんた達の知り合いに頼まれて、助けに来たの!」

「・・・うん、ここは？」

「・・・やっと起きたわね。」

「ちょっと、勝手に決めないでよ!」

ルカはレンジャーキーをモバイレッツに差し込む。

『ゴーオンジャー!!』

ルカは「炎神戦隊ゴーオンジャー」のゴーオンイエローに変身する。

「しっかり捕まってね・・・それッ!」

「ちよっ……!?!まつ、ヒイイイ!!——」

『きゃああああっ！——』

「ちよつ、ちよつと、なにを——アッー！」

ル力は3人を担いで、全速力でその場を離れた・・・。

「貴様ら！最初からそのつもりで！？」

「そういうことだ！確かに三つのお宝頂いて行くぜ！」

『お宝？』

トーマ達は心の中で突っこむ。

「借りは返した。」

「バイバイキーン！」

「ごきげんようー！」

「ついでに、宝石類も頂いたから！」

「テメツ！？」

「ぼちつとな！」

ルカがトーマ達を救出しに行くついでに爆薬をセッティングして、脱出と同時にハカセがスイッチをいれる。

「クソオ、覚えてやがれ海賊どもおツ!？」

「クウウソオオカスがアアア！」

その場を離れ、ゴーカイジャー一行とトーマ達、ゴーカイガレオンに乗り込もうとしたその時だった…突然現れたオーロラの中に飲み込まれた。

<・・・ヴォルフラム内・・・>

「…ん？どこだここは？」

「あの訳解らない奴らをまいたと思ったら、こんなところに…って
うわっ…ッ!？」

(フッフ…彼らが言っていた「助っ人」はこの人たちやったんか？)

ゴーカイジャー達が目の前の特務六課達に気づき、身構えた……が。

『確保……!……!……!』

マーベラス達は拘束魔法^{バインド}を掛けられた。

「おっしや捕まえたでー！！！！」

「なに！！？」

「ちょっと何よこれ！！」

なのは達を睨みつけるルカ。

「お前等・・・公務員供！！」

「時空管理局、次元航行隊提督クロノ・ハラOUNだ。詳しい話を聞かせてもらおう。」

「手荒な真似ですいません、だけど、こうでもしないと話も聞いてくれないと思ったので……」

マーベラス達は、特務六課のメンバー達にあっさりと捕まってしまった

バインドも外され、取り合えずマーベラス達は話を聞く事を承知した。

「それで、俺達はどうなる？」

イライラしながらもマーベラスはなのは達の話を伺う。

「ああ…海賊行為、公務執行妨害、管理局の戦艦への発砲、少年、少女誘拐、e t c

…までしたんだ…唯では済まないだろう。」

(・・・もう駄目だ)

「・・・本来ならそうやけど・・・「彼」等の用意してくれた、助つとなんや丁重に御持て成しせんとな・・・」

「でも」彼ら」が来るまでの間、彼らの身柄はどうするのですか？」

「そうだな・・・我々の世界にない力を持った存在だ。行動が制限される事は覚悟した方がいいかもしれないな・・・」

はやてとクロノは、ゴークイジャー達をどうするか話している。

「ほんなら私らの新部隊、特務六課に預からせてくれへんか？」

「おいおいはやて、六課設立にはかなりの裏技を使っているんだぞ。これ以上は無理じゃないか？」

「でも、マーベラスさん達の力をこのまま隠しておくより、危険なフツケバイン討伐の担当になる六課にいたほうが良いと思うで。」

それにマーベラスさん達が元の世界に戻るのも時間がかかるんやろ？ だったら“民間協力者”という形で預からせてくれればいいやん」

「しかし、ゴークイジャー達の意志は・・・」

マーベラスは立ち上がる。

「別に構わないぜ。どうせすぐに見つからないならこの世界を見て回るって言うのも悪くない。それに、フツケバインの奴らには借りがあるしな……」

「よっしゃー!」

「……仕方ない。それならさっそく君達のIDを発行しなければ……ん……あれ?」

「クロノ提督、どないしたん?」

「いや、彼らのIDが既に発行されていた……一体誰が……」

IDを渡す、

「それはIDカードやないか。どうしてそれが……」

「いや、まさかと思うが……」

(ん、なんだ?)

「しかし不思議なもんやな。シグナムに聞いたけど、こんな携帯電話型デバイスであんなすごい力が出せるなんて。」

「ところで、ゴーカイジャーの皆さんの使ってたあの力は一体何なんでしょうか?「レンジャーキー」でしたっけ?いろいろ出てましたよね。」

「あ、それは私も気になります。教えてください。」

特務六課のメンバー達は、知りたそうな目でマーベラス達を見る。

「あの、皆さん、このデバイス一度調べてみていいですか？何か仕組みがわかるかも・・・」

「しょうがねえな・・・あんまりごちゃごちゃいじるなよ。」

マーベラスはため息をつきながら、

「はい。それはもう!」

「調べるのって時間がかかるのか?」

「いえ、デバイスをスキャンして調べるだけですからすぐに済みますよ...では、その台の上にデバイスを置いてください」

「ああ・・・」

マーベラス達は、コンソールにモバイレーツを置く。

「うーん・・・やっぱり魔力機関などは積んでいませんね・・・それに構成物質などもミッドチルダでは見た事の無い物質で出来ているようですね・・・おや?これは・・・だとすると・・・もしかしたら・・・」

シャーリーはマジレンジャーの鍵を見ている。

「なんだ?どうかしたのか?」

「い、いえ!大丈夫です!あ、もういいですよ。」

「ありがとう。」

なのは達は、ゴーカイジャー達を六課の開いてる部屋に案内する。

「ところで、クロノくんなんで、ここに？」

「いや、僕の後任が、来た御蔭でここに寄る事ができた。」

「ふん。」

後任とはいったい・・・。

B・S、54 クリスとティオと現代

戻って、現在『新暦79年』

「行きますよ、ティオ!!」

アインハルトは武装形態に変身すべく、八神司令、ひいてはその一家の方々に作ってもらったデバイス、アステイオン（通称ティオ）にそう呼びかけ、

「ニャアアアア!!」

「武装形態……」

アインハルトがそう呟くと相棒であるティオが肩から飛び出しアインハルトは武装形態へと姿を変える。

「行くよクリス……!!」

ヴィヴィオはクリスを手に取ると、それを高らかに天へと突き上げる。

「セイクリッド・ハート! セットアーーップ!!」

彼女も聖王モードになる。

その頃…

バースに変身した映司はセルメダルを一枚取り出スロットに入れグ
ラップを回すと中央のセルリアクタ
ーが開き輝きを放ち機械音を発音する

『ドリルアーム』

そして右腕のカプセルオーブから様々なネジ等が出現しバースの右
腕にドリルが装着される

「せいやあああ！」

襲い掛かるバダンのコンバットロイドを薙ぎ倒す。

吹き飛ばされた、バダンのコンバットロイドは立ち上がり、後ろ飛

び回し蹴りを放つ。

『ジョーカー・マキシマムドライブ!』

「ライダー・・・パンチ!」

ジョーカーは3人がかりで攻撃してくるコンバットロイドの攻撃をしゃがんで避けた後、メモリをマキシマムスロットにスロットする。

そして・・・。

「うおりゃあああああ!」

敵の顎にアッパータイプのライダーパンチを叩き込むと、

「ぬおおおお!」

上に吹き飛ばされ、敵は爆発。

「次、行くぞ!火野!」

「はい!」

2人はつぎの場所へ向かう・・・とおりすがった男に気づかず。

本局

その頃、本局では・・・フィリップとAイクスが話していた。

「えっと、つまり君が”火野映司”に渡したタカのコアは”連中”に細工されたコアってことか・・・？」

「ああ、俺だけ完全体になれないように奴等にな・・・本当に小賢しい奴等だ！」

悪態をつくAイクス

「しょうがないよ、君は仲間のグリードを裏切ってオーズに着いてたんだからね・・・でも、君は確か？」

「ああ、映司の持っていた”割れた俺”のおかげで”この体”は必要なくなった・・・さて。」

Aイクスは武装形態を解き、イクスの体からアंकが離れ、何処かへ向かう。

「どこへいくんだい？」

「未来だ。カザリ達はそこにいるからな・・・。」

アंकは蒼い縁ふちのオーメダルを空中に投げる。そのセルメダルは空中で円を描き黒い時空の入口を作る。

「それは？」「前にバダンの奴等からかつぱった、”デンオウメダル”だ・・・映司に「お前も後から来い」ってて言っつけ。」わかったよ。」

そしてアंकは次元の入口を通り未来のミッドチルダへ向かった。

フィリップは、スタッグフォンで映司のバツタカンに連絡をいれる。

『ライダー・ツインマキシマム!!』

ジョーカーのマキシマムドライブによるライダーキックとバースのキャタピラレッグ・セルバーストによる、ダブルライダーキックにより、バダンの巨大戦闘怪人が爆裂する。

2人が変身を解くと、バツタカンドロイドが光り・・・プルタブをプシュツとあける

「フィリップ君？聞こえてる？」

.....

『...聞こえているよ。さつき、アंकが連中から奪った”特殊なメダル”で未来に向かった。』

それを聞いた2人は顔色を変える...

「ねえ、フィリップ君。何で止めなかったの？」

『止める必要はないだろう?』

「さてさて・・・コラ！照井に聞いた所によると、ヴィヴィオちゃんにセルメダルやレリックを埋めたって、聞いたぞ！そんな危ない奴を・・・。」

『…彼には”こうもり”になって貰おうと思ってね。』

「こうもり？」

『…連中の中に潜り込んでもらおうと思って。』

『……………』

「俺はもう戻るわ、いろいろ疲れた」

『そうかい、僕は調べ物があるから、』

「ああ、頼む。」

こうして彼らの長い日が終わった。

B・S、55 マゼンダとバーコードとブラック&ホワイト

その頃、未来『新暦81年』

大空を飛ぶ赤い海賊船型の宇宙船”ゴークイガレオン”の船内にマゼンタのトイカメラを持った男がやってくる。

「なんだ、お前は？」

「お前らに預けた、俺の力を返してもらいにきた。」

男はレンジャーキーボックスを勝手に開ける。

「てめー！何しやがる！？」

マーベラスの拳を交わし、バーコード頭のライダーキーを掴むと、前に構える。

「何者だ！？」

ジョーが質問すると、男は答える。

「通りすがりの仮面ライダー、ディケイドだ。」

そう答えると、彼の体に独特なスーツが装着され、最後に仮面部分にカード状の物が刺さっていき、灰色だった部分が鮮やかな色に変化していった。

「…ディケイド？」

ハカセがそう聞くと、レンジャーキーボックスの中に入っていた、ライダーキーがカードに変わり、彼の手元に移動する。

「ご苦労だったな。」この世界に來れない間”俺のカードをライダーキーに変えてお前らに力を貸してやってたんだ。」

「そうだったんですか……。」

鎧とハカセとアイムは納得したが、他の3人は納得いかないようだ。

「てめえ！かえs……」来たぞ！」なにっ!？」

ガレオンの外には、バダンの怪人軍団が集まっていた。

「……どうやら、お前たちが救助したガキ3人を取り返しに着たらしい……。」

「チッ、フツケバインの奴等”バスコ”だけじゃなく”バダン”とも、手を組んだのか？」

「どうする、海賊ども？」

マーベラス、ジョー、ルカ、ハカセ、アイムはモバイレーツとレンジャーキーを取り出す。

「決まってる、行くぜ!!！」

「はい!!！」

鎧もゴーカイスルラーとレンジャーキーを取り出す。

『豪快チェンジ!!』

『ゴッカイジャー!!』

マーベラスはゴーカイレッド、ジョーはゴークাইブルー、ルカはゴークাইイエロー、ハカセはゴークাইグリーン、アームはゴークাইピンク、鎧はゴークাইシルバーに変身した。

「ゴークイレッド」

「ゴークイブルー」

「ゴークাইイエロー」

「ゴークイグリーン」

「ゴークイピンク」

「ゴォカイ、シルバー!!」

「海賊戦隊!!」

『ゴークイジャー!!!!!!!!』

「派手に行くぜ!!」

6人のゴークイジャーは走り、ゴークイガン、ゴークイスピア（ガンモード）で一斉にコンバットロイド達を撃ちまくる。

『グハッッ!!?』

因みにディケイドは逆方向から来たコンバットロイドをライドブッカー（ソードモード）で薙ぎ払う。

「おりやつ!」

『はっ!!!』

「やるじゃねえか?」お前らもな!」へっ!」

そう言いながらゴーカイサーベルでコンバットロイドの攻撃を避けてコンバットロイドを斬りつけるゴーカイブルー!。

「グエッ!!!?」

「オリヤア!!!」

「ヤアア!!!」

ゴーカイシルバーとゴーカイグリーンは同時にコンバットロイドを斬りつける。

「ぐわあ!!!? おのれえ!!!」

ゴーカイグリーンに攻撃を仕掛けるコンバットロイドだが、ゴーカイグリーンは距離をとって、仰向けになり、

「いくよ、鎧!」

「はい！」

ゴーカイシルバーが発射台役になったゴーカイグリーンの足の上に
乗って勢いをつけてジャンプし、

「ゴーカイ！スカイラブハリケーン！！」

「ぐわあ！！？」

ゴーカイシルバーがコンバットロイドに頭突きをお見舞いする。

「決まったね！」

「はい！」

そのままゴーカイレッドと一緒にゴーカイガンでコンバットロイド
を撃つ。

「ぐわあ！！？」

「ルカ！！」

ゴーカイサーベルとゴーカイガンをゴーカイイエローとゴーカイピ
ンクは交換し、ゴーカイイエローは2本のゴーカイサーベルを構え
ワイヤーを伸ばしコンバットロイド達を切裂く。

『があッ！！？』

「おのれッ！！！！」

コンバットロイド達がミサイルをディケイドに放とうとするが……。

ディケイドはライドブッカーから1枚のカードを取り出し、ディケイドライバーへと装填しスライドさせていった。

—FORMRIDE OOO! LATORARTAR!—

電子音声が響くとディケイドの身体は仮面ライダーDオーズラトラーターに変身した。

「があっ!」

襲い掛かるミサイルをチーターレグをフル活用してそれを回避し、縦横無尽に動き回り、コンバットロイドを倒す。

—FORMRIDE FOZE! ELEC!—

「ハア!! フン!!」

『がはッ!!!?!』

仮面ライダーD「フォーゼエレキステイツ」は次に別の1枚のカードをディケイドライバーに装填しスライドさせる。

—FORMRIDE W! FangJOKER!—

「!? こいつ、俺達と似たような力を?」

「でしたら、私たちも白黒で参りましょう!」

先ほどからコロコロ変わるディケイドを見た、6人は並び立ち、ゴ
ーカイピンクは白い戦士のレンジャーキーを取り出す。

「それはいいかもな」

『――豪快チェンジ……!』

――ゴーオンジャー……!

――ジーヤッカー……!

――ガーオレンジャー……!

――ボーウケンジャー……!

――ジェーットマン……!

――オーレンジャー……!

ゴーカイレッドはゴーオンブラック、ゴーカイブルーは、ビッグワ
ン、ゴーカイエローはガオホワイト、ゴーカイグリーンはボウケ
ンブラック、ゴーカイピンクはホワイトスワン、ゴーカイシルバー
はキングレンジャーに変身した。

「カウルレーザー……!」

「ビッグワンフィニッシュ……!」

「ベルクライシス……!」

B・S、56 赤と派生とファルコンアタック

ミッドチルダの何処か

「うわっ臭えな。ゴムでも焼けてんのか。民家じゃないのかよ」

髪型がリーゼント、服装は短ラン・Ｔシャツ・ボタンという不良の様な出で立ちの少年が咳払いをする。周りの空気は既に火災現場独特の匂いがし始めていた。

「確か、”アイツ”が言ってたのはこの辺りか？」

フォーゼの世界の仮面ライダー・・・『フォーゼ』こと”如月弦太郎”はある人物に導きによって、ミッドチルダに来ていた。

「・・・じゃ、行くかー!!」

弦太郎がそう言うと、変身ベルト”フォーゼドライバー”に各ソケットに付いている赤いスイッチを全てOFFの状態から順番に押しONにするし右手でエンターレバーを握り左腕を右肩の位置に持つていくと同時に変身へのカウントダウンが始まる

『3』

『2』

『1』

「変身!!」

『1』の宣言と同時に叫び、エンターレバーを引くと弦太郎を白い煙りが包み、彼は右腕を天に掲げるポーズをする

そして煙りを払うとそこには白がベースにカラーリングされ頭部がロケットのような形をしたライダー、フォーゼが現れ身体を縮こませ

「宇宙キタアアアアアア!!」

と叫ぶと同時に両腕を大きく開く

「ひどいな・・・。」

火点の放射熱が入ってくる。パチパチと弾ける真っ赤な炎に、飛び交う怒号。近隣住民の悲鳴。

「こいつで行くか!」

『ファイヤー・オン!』

その頃、ディケイド達は中型の怪人たちに襲われていた。

腕の爪を振りかざしてディケイドに襲いかかる。

ディケイドはその攻撃を上半身を低くして避けると、カブトワームの腹目がけてストレートパンチ。

その攻撃によるけるカブトワーム。

「クツ！ナロオ！！」

素早く態勢を戻して右手の爪を横に振って攻撃するも、瞬時に反応したディケイドの左手によって攻撃は防がれ、逆にディケイドの右ストレートパンチを胸に食らい、怯んだ隙をパンチの連打を食らい、止めに右膝の蹴りを腹に食らい地面転がるカブトワーム。

「グウウアーーー！？」

転がるカブトワームを余所に、ディケイドはライドブッカーから1枚のカードを取り出し、ディケイドライバーへと装填しスライドさせる。

—FORMRIDE OOO！TAKAJYABA！—

電子音声が響くとディケイドの身体はオーズの数ある亜種形態の一つ『タカジャバ』へと変身を遂げる・・・続けて、

タジャスピナーは飛び道具にもなる万能型武器、タジャスピナーが回転し、ギガスキャンを発動させる。

エネルギーを左腕に溜めると、Dオーズタカジャバはタジャスピナーからゴークイジャー達のエネルギー体を発射。

『ゴークイ・プロミネンスドロップ!!』

敵に蹴りかかり連続攻撃を決める。

「グウォアー!?!……ガアッ……グッ!……」

その強力すぎる猛攻にカプトワームの全身を包む炎が力を増していき最終的にカプトワームの体統べてを飲み込む。

「グアアアアア……!!……!!……!!」

叫びと共に、カプトワームの体は爆発し緑色の爆煙を上げながら消滅する。

が、カプトワームを倒してもぞろぞろと敵が出てくる。

「まったく、しつこい野郎どもだ!」

元に戻ったゴークイレッドが悪態をつく、ゴークイグリーンはあ

るレンジャーキーを取り出す。

「これで行ってみようよ!!」

「おし」

『豪快チェンジ!!』

『ゴーオンジャー!!』

ゴーカイレッドはゴーオンレッド、ゴーカイブルーはゴーオンブルー、ゴーカイイエローはゴーオンイエロー、ゴーカイグリーンはゴーオングリーン、ゴーカイピンクはゴーオンブラックの「炎神戦隊ゴーオンジャー」に豪快チェンジした。

怪人軍団は一斉にゴーオンジャーを攻撃するがゴーオンジャーは怪人軍団の攻撃を受け流す。

「行くぜみんな! ハイウェイバスターだ!!」

「頼んだぞ! マツハルコン!!」

『よっしゃあああ! バリバリだぜ!!!!』

ゴーオンジャー達はスーパーハイウェイバスターにゴーオンギアを合体。

「ボールポジション! スーパーハイウェイバスター!!」

「マツハルコンソウル、セット!!」

「ぶつちぎるぜ!!」

スーパーハイウェイバスターからレーシングバレットが発射。

「ターゲットロック!!ゴーオン!!」

マツハルコンソウルと重なる。

『バリバリバリバリーーーーー!!』

放たれた光弾が怪人軍団に向かう。

『ぎえええええ!!』

マツハルコンのエネルギー体の砲撃に落ち、怪人軍団は貫かれ全滅する。

「さて、あいつらが心配だ!!いくぞ、お前ら!!」

『仕切るな!!』

二段変身を解いたディケイド達は、フツケバインと戦闘中のなのは達のもとへ向かった。

B・S、56・5 未来の救世主（前書き）

再びゲスト

LS級艦船ヴォルフラム

はやては外に出ると移動要塞に向けて魔法を発動させようとしていた。

『本部及び本局より、八神部隊長の技能封印開放許可。』ヘイムダル』起動承認。八神司令打てます』

『承認了解。』海より集え。水神の槍、彼方より来たれ銀雪の吐息、逆巻き連なり、天に坐せ』」

移動要塞の上空に巨大な大氷塊が浮かび上がった。それを見たフツケバイン一同は……

「な……………な……………」

「巨大な氷？」

「海水を汲み上げて作った大氷塊。いかなる『防御無効』も関係あれへん。抵抗のしようのない物理重量。進路を変えても無駄やで、もう十分に射程距離範囲や」

「魔法といいはれば、なんでもありな連中ですか？」

「ちょ、ちよつとそつちのおかしな喋り方の司令官。そんなの落としたら、下の被害が……………」

「心配してもらわんでも、安全確認はクリア済みや。命中した後碎いて雪にして散らすから津波の心配はあらへん。警告や、その艦止めて降伏しなさい」

「ぐぬぬ」

「心配するな。ステラ。この程度、私が切り裂く。」

サイファーが外へ飛び出し、大氷塊を切り裂いた。その瞬間、氷塊が砕けた。

「甘いな。この程度の攻撃、対策済みだ。」

「甘いのはそつちやフツケバイン。ブラスター3。ヘイムダル再氷結！！槍陣を成せ、白銀の破槌。ヘイムダル・フランクスシフト」

はやては大氷塊を再生させ、さらにいくつもの氷解を移動要塞に向けた。

「抵抗は無駄や。碎かれるよりも再生のほうが速い。最終警告や、降伏しなさい」

この瞬間、特務六課全員が勝ったと確信していた。だが、その次の瞬間。

《Flash Move!!》

それは突然はやてが何者かに突き飛ばされたのだ。そのショックで

ヘイムダルの発動は失敗。

「大丈夫か？」

羽飾りのついた仮面、ベルトの腰に本の形をしたツール、白銀のボディ、胸部の所に金属パーツが装飾され、腕、腰の部分に青いラインが入っており、青いレッグには赤いラインが入っている戦士。

「何すんねん！もうさ、そうだな、下手すれば闇討ちされていた！？」

2人の目の前に黒髪の女性がいる。その女性は黒い刀と銀十字に似た本を持っていた。もし、この仮面戦士が突き飛ばさなければ、黒髪の女性に背後から刺されていただろう……。

「というか、邪魔しないでくれるかな？」

「なんだ！？てめーは！！！」

黒髪の女性とヴィータが同時に言うと、

「いつぺんに面倒くさいな……そうだな、正義の味方」エクセリオン「……かな？」

エクセリオンと名乗った仮面戦士が2人の方を見ている隙を付き、ヴェイロンとサイファアがエクセリオンを背後から襲いかかった。

「ストレイトバスター！」

だが、エクセリオンは右側の腰にある本型のケースを変形させると・
・後ろを向いたまま、二人に向かって構え、桜色の魔力弾を放つ。

『がはあ！』

「峰打ちだ。」

「魔法やて！？」

はやてはエクセリオンの術技を見て、自分の友人を思い出す。

「……俺はお前らと同じ”EC”と戦ったことあるけど……大したことないみたいだな……」

「へえ、そお？」

「なめんな、クソカスが！」

エクセリオンは機器と機器を接続、2つのツールのシステムが起動し始めた。

「……今から、道を開けてやるからいけよ。」

「！？　どういう魂胆だ？！」

「……俺はどちらの敵でも味方でもない、面倒だからあんた達には退散して貰う。」

《Blaster Mode!》

音声を発したあと、ツールを構える。

「セットアップ!!」

《B l a s t e r ・ s e t - u p》

手に出現した大型銃を構え、

『G I G A D R I V E S t a r l i g h t』

「ブレイカー!」

大型銃の砲身から桜色の強力な砲撃が放たれ、飛空艇フツケバインの前方に大穴があく。

「あら、ありがと。じゃあ、私らもう撤退するからさ頼むね!」

フツケバインは全員撤退した。

「・・・さて、奴が来る前に・・・と、」

エクセリオンはそのまま立ち去ろうとするが、そう簡単にことは進まなかった。

「その人、止まりなさい!」

金髪の女性。黒いリボンでツインテールに結び、マントを付けた女性だが、自分に向かって武器を向けていた。つまり、フェイトが、武

器を向けていたのだ。

「武装を解除し、投降してください」

（アリシ・・・いや、ハナは”黒い死神”とかいつてたな？）

だが、エクセリオンは武装を解除しようとせず、身構える。そこへ、一人の女性が後ろから彼の肩を叩いた。

「まあまあ、落ち着いて、みんな・・・それと仮面君。・・・えーと、前にもあったよね？話し聞かせてほしいな。任意同行お願いできる？」

（母さ・・・じゃなくて、エースオブエースか。）

なのはがエクセリオンに手を差し伸べた。

「任意という名の強制だろ。それ、」

「任意は任意だよ。いい子で来てくれたら嬉しいけど・・・それに、君のやったことは公務執行妨害だし・・・。」

なのはの言葉に彼はそっぽを向く。

「それは無理だ・・・ついでに言うと、連中とまともにやってたらあんた達・・・確実にやられてたぞ。」

「んだと！テメエ！！」

なのはが苦笑いをしながら手で制する。

「ヴィータちゃん。．．．えーと、どうしてかな？」

エクセリオンが指さした方向を見ると、巨大な未確認の姿があった。

「なんやの？あれ！」

「デカツ！？」

はやてたちが驚くと、エクセリオンがツールを動かす。

『オオオオオオン』

「またデカイのが．．．ライオン？」

巨大未確認。突然の出来事に、なのは達はただ呆然とするだけ。

しかし、エクセリオンは違う。

「．．．行くぜ．．．セイオウライガー！」

『ゴオオオオン！』

エクセリオンはどこからともなく、やって来たライオンロボ『星桜』に乗り込む。

『下がってる！！　ドライブイン！』

ライオンロボは人型ロボに単独変形する・・・そして、巨大未確認と相対し、固定武装を構える。

『セイオウグレート！全力全開！！行くぜ！！』

「”全力全開”やて、なのはちゃん。」

「はやてちゃんってば、」

武器を巨大未確認めがけて放つ。巨大未確認も黙って受けているだけの筈はなく、反撃に無数の車輪をセイオウグレート目掛けて放つ。

『避ける！！』

エクセリオンの言葉と共に、巨大な体躯に似合わぬダイナミックかつ俊敏な動作で車輪の群れを回避するセイオウグレート。回避行動の間も、武器を撃ち続ける。

「ウオオオオオオ！！！！」

車輪が命中しない事に業を煮やした未確認が、今度はサーベル片手に近接戦を挑みにかかる。エクセリオンはそれを見るや、セイオウグレートのもう一つの武装を取り出す。

「デイベインセイヴァー！！」

彼の操作によって右足から飛び出したデイベインセイヴァーを右手

で持つて未確認のサーベルを受け止め、構えて反撃に出る。

「しゃんなるお!!」

サーベルを利用した近接戦は未確認の方が上の様だったが、腰の銃を用いた、シューティングアーツの前に圧倒され続けていた。

「よし!!一気に行くぜ!!」

未確認の身体にダメージが蓄積されたところで、セイオウグレートは未確認に止めを刺すべく、再び構える。

コックピット内、エクセリオンは小型ロボを取り出すと、足場のコンソールにセットする。

「ゴライアスレリックロイド!セット!!ユニゾン・イン!!」

すると、セイオウグレートのボディカラーが鋼色に変わり・・・パワー・パンチ力・腕力・強靭さに優れたガントレット状武器が両前腕部に装備された。

「完成!セイオウトージャ!」

鋼色の装甲を纏うセイオウと巨大未確認は、決着を着けるべく、真っ向からぶつかり合う。

『オオオオオオ!!』

『ハンマァー・シュラーク!!!』

高い破壊力の拳を巨大未確認に叩き込む。やがて邪悪な断末魔と共にその存在は限界を迎え、大爆発を起こして消滅する。

『・・・さて、俺の役目は終わったな・・・』

「まっ　っ・・・」

なのは達の事をきにせず、エクセリオンはセイオウグレートと共に次元の彼方へと飛び去った。

『特別編 時代劇だよスペシャル!』前編

時は江戸時代。

「風の中、誰かの嘔び泣きが聞こえる時・・・ズバリ名推理が冴え渡る。俺は此の街を愛するハードボイルドな岡引でい。」

岡引。しかもハードボイルドは横文字なのに岡引・・・名は”左翔太郎”。

「親分、左親分!大変だ!!」

長屋の戸を開け飛び込む来客は・・・。

「おうおう、朝っぱらから一体何事だつてんでい?今、一服・・・」

裁縫教室を開いている。腕のいい仕立て屋“お知世”さんのもとで働く…青年「映司」。

「それどころじゃないんです! 大変なんですよ、親分!」

一体全体何事か。耳を傾け言葉を待てば、彼の口から仰天飛び出す。

「天ノ川塾でカラクリが何者かに盗まれちゃったんですよ!」

「なにいつ!? そいつぁ本当かい!？」

驚き固まる左親分。するとすかさず子分が一言。

「案内してくれるかな？」

”フィリッハ”役職は翔太郎の子分。・・・何とも軽妙な響き。
フィリッハ。

「こっちです。」

長屋の外へと飛び出す。こうして3人は天ノ川塾へと一步を踏み出す。

現場につけば、風町奉行所定町廻り同心。マゲの似合い様は尋常じやありません。

”照井竜”・・・人呼んで、”加速の竜”。

「よう、来たか。」

「これは・・・照井の旦那。で、盗まれたのは？」

戸を開け飛びだし、現れた3人。

「・・・取り返してください！あれは父の形見なんです。」

「賢吾、おユウ・・・心配するな、俺がとっ捕まえて・・・」

泣き出す賢吾。父の形見を取り返しておくれと、願いを込めて男泣

き。

「2人とも、おちついて。」

ならばと膝をぴしゃりと叩き、足を踏み出し睨みを利かせ、

「よっしゃあ！ こうなったら俺、俺達が引き受けてやろうじゃねえか！」

まかせておけよと気合いを一発。泣く子も黙るはこの御方、ハドボイルドな岡引・・・名は”左 翔太郎”。

これより『特別編 時代劇だよスペシャル！』、はじまり、はじまりい・・・ペンペン！

「お爺ちゃん、何やってるんですか？」

「こら、”お夏”。芝居中だぞ？」

「アハハッ」

中編に続く・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2531v/>

仮面 RIDER birth 戦記

2011年12月3日02時52分発行